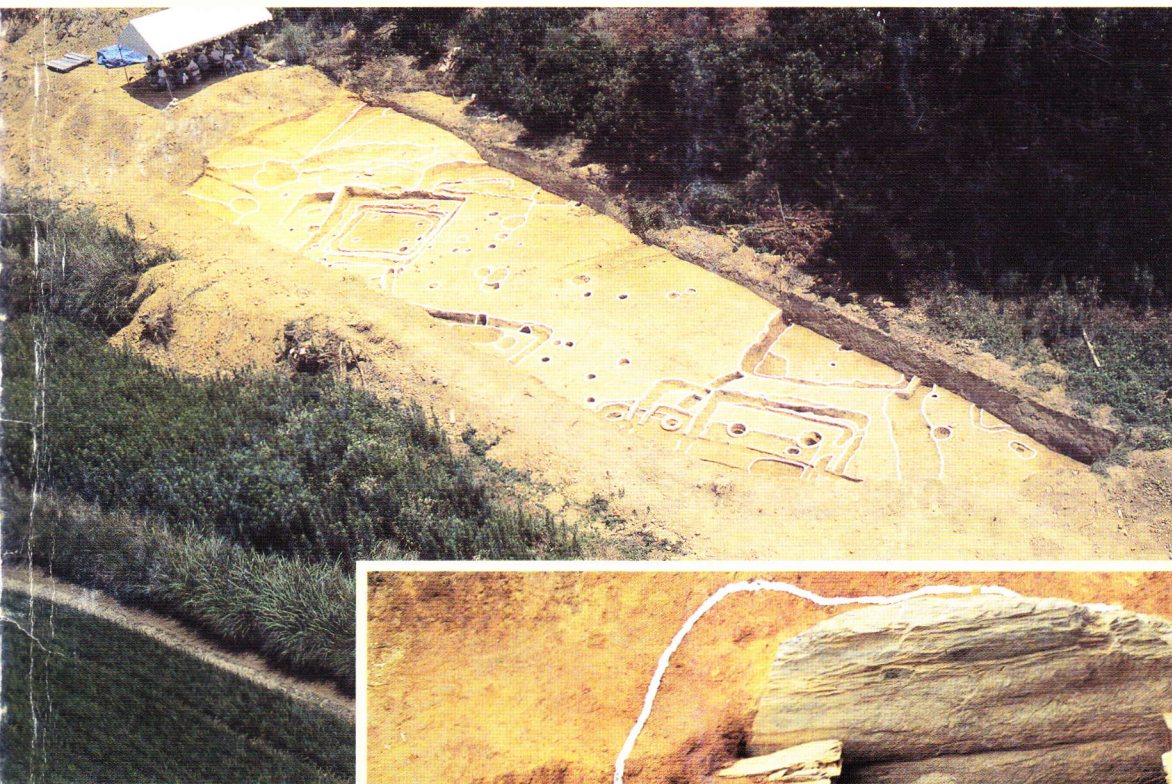


和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 4

— 平成 6 (1994) 年度 —



平尾遺跡



城ノ前1号墳

1997

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序 文

本年報は、本財団が中心となり平成6年度に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、新発見の遺跡である平尾遺跡及び府中IV遺跡が古墳時代の竪穴住居を中心とした集落跡であること、城ノ前I遺跡内に新たに発見された横穴式石室を主体部とする古墳の構造を明らかにすることができたことなど、多くの重要な成果を明らかにすることができました。

本財団の調査による新たな学術調査成果は、郷土の古代史を語る上でなくてはならない視点を与えることとなりました。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

理事長 木 下 正 昭

例 言

1. 本書は、平成6（1994）年度に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の年次概要を掲載するものである。
2. 本書に掲載の調査について、既に報告書を刊行したものもある。未完のものについては報告書が刊行された際には、その報告書をもって正式報告とする。
3. トレンチとは溝掘りによる調査区で、グリッドとは坪掘りによる調査区を指すが、対象地の状況や調査の進行状況にもより厳密には規定できない。よって、調査時の設定に従って使用した部分が多い。
4. 本書の執筆については各調査担当者がこれにあたり、編集は北野隆亮が行った。各執筆分担の文責は文末に氏名を記載した。
5. 埋蔵文化財発掘調査は以下の事務局組織で行った。

【事務局組織（埋蔵文化財関係）】

【平成6年度】

和歌山市教育委員会

教育長	浅井周英
文化振興課長	安井紹郎
文化財班長	松本信明
学芸員	前田敬彦
学芸員	益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	筒井敏郎
事務局長	堂村 弘
事務局次長	尾崎好昭
総務課長	別院 稔（平成6年8月～）
事務主任（埋蔵文化財事務担当）	小松義博
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	北野隆亮
学芸員（ " ）	井馬好英
学芸員（ " ）	木村善晶
学芸員（ " ）	木建正宏
学芸員（ " ）	奥村 薫
学芸員補（ " ）	栗本美香

本文目次

I. はじめに	1
II. 埋蔵文化財の発掘調査概要	
1. 城ノ前 I 遺跡 (城ノ前1号墳) 発掘調査	2
2. 西田井遺跡 発掘調査	10
3. 和歌山城跡 第3次調査	18
4. 鳴神IV遺跡 第5次調査	20
5. 平尾遺跡 発掘調査	22
6. 鷺ノ森遺跡第5次調査	28
7. 和歌山城跡 第4次発掘調査	34
8. 友田町遺跡 発掘調査	36
9. 鳴神IV遺跡 第6次調査	40
10. 鳴神VI遺跡 第4次調査	46
11. 太田・黒田遺跡 第2・5次調査	50
12. 府中IV遺跡 発掘調査	52
13. 史跡和歌山城 第1・3次調査	60
14. 狛口石岩陰遺跡 発掘調査	64
15. 有本城 発掘調査	68
16. 野奈浦遺跡 発掘調査	70
III. 普及啓発活動	72

和歌山市遺跡地名表 (「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈1989年〉より作成。一部訂正、追加。)

遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
1	報 恩 講 寺 遺 跡	45	木本小学校Ⅰ遺跡	93	田 屋 遺 跡	135	山 口 7 号 墳	177	河南中学校北方遺跡	249	城ヶ森 3 号 墳	292	曾 垣 田 Ⅱ 遺 跡	336	天 神 山 古 墳	376	行 者 堂 東 遺 跡
2	大 川 西 方 遺 跡	46	木本小学校Ⅱ遺跡	94	府 中 Ⅱ 遺 跡	136	山 口 8 号 墳	178	和 佐 中 遺 跡	250	城ヶ森 遺 跡	293	曾 垣 田 古 墳	337	秋 葉 山 貝 塚	377	松 江 経 塚
3	藻 江 遺 跡	47	榎 原 遺 跡	95	府 中 Ⅲ 遺 跡	137	山 口 9 号 墳	179	和 佐 寺 跡	251	相 坂 古 墳	294	城ノ前Ⅱ遺跡	338	アンドの鼻古墳	378	狹口石岩陰遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	48	中 野 遺 跡	96	府 中 遺 跡	138	山 口 10 号 墳	180	禰 宜 1 号 墳	252	千 石 山 5 号 墳	295	城ノ前Ⅰ遺跡	339	三 田 1 号 墳	379	和 歌 山 城 跡
5	水 谷 遺 跡	49	城 山 古 墳	97	北 山 Ⅰ 遺 跡	139	山 口 11 号 墳	181	禰 宜 2 号 墳	253	千 石 山 古 墳 群	296	大 池 遺 跡	340	三 田 2 号 墳	380	山 口 御 殿 跡
6	男良の谷遺跡	50	権 現 山 1 号 墳	98	北 山 1 号 墳	140	山 口 廃 寺 跡	182	和 坂 古 墳	254	菖 蒲 谷 遺 跡	297	赤 津 古 墳 群	341	三 田 3 号 墳	381	岩 橋 Ⅱ 遺 跡
7	深 山 遺 跡	51	権 現 山 2 号 墳	99	北 山 2 号 墳	141	中 筋 日 延 遺 跡	183	和 佐 古 墳 群	255	吉 礼 Ⅲ 遺 跡	298	吉 礼 貝 塚	342	三 田 4 号 墳	382	本 願 寺 跡
8	大 谷 川 遺 跡	52	高 芝 遺 跡	100	北 山 3 号 墳	142	山 口 遺 跡	184	花 山 古 墳 群	256	千 石 山 遺 跡	299	西 吉 礼 遺 跡	343	吉 原 古 墳	383	神 前 Ⅱ 遺 跡
9	加 太 遺 跡	53	高 芝 古 墳 群	101	北 山 4 号 墳	143	谷 遺 跡	185	岩橋千塚古墳群	257	井 戸 1 号 墳	300	東 吉 礼 遺 跡	344	広 原 古 墳	384	高 松 焼 窯 跡
10	加 太 南 遺 跡	54	栄 谷 貝 塚	102	北 山 5 号 墳	144	里 遺 跡	186	井辺前山古墳群	258	井 戸 2 号 墳	301	和 田 遺 跡	345	内 原 古 墳	385	奥 山 田 古 墳 群
11	平 の 谷 遺 跡	55	貴 志 古 墳	103	北 山 Ⅱ 遺 跡	145	川 辺 遺 跡	187	寺 内 古 墳 群	259	井 戸 3 号 墳	302	和 田 岩 坪 遺 跡	346	内 原 遺 跡	386	大 池 遺 跡
12	田 倉 崎 Ⅰ 遺 跡	56	川 原 崎 遺 跡	104	北 山 6 号 墳	146	藤 田 古 墳	188	森 小 手 穂 遺 跡	260	馬 場 古 墳	303~304	和 田 古 墳 群	347	名 草 貝 塚	387	大 旗 山 城 跡
13	田 倉 崎 Ⅱ 遺 跡	57	川 原 崎 1 号 墳	105	直川八幡山1号墳	147	碓 古 墳	189	寺 内 ナ イ フ 形 地 出 土 石 器 ナ イ フ 形 地 出 土 石 器	261	馬 場 遺 跡	305	竈 山 神 社 古 墳	350	高 津 子 山 古 墳	388	西 田 井 遺 跡
14	船 出 遺 跡	58	川 原 崎 2 号 墳	106	直川八幡山2号墳	148	藤 田 遺 跡	190	山 東 古 墳 群	262	東 池 1 号 墳	306	坂 田 地 蔵 山 古 墳	352	金 谷 廃 寺 跡	389	井 ノ 口 遺 跡
16	加太駅北方遺跡	59	川 原 崎 3 号 墳	107	直川八幡山3号墳	149	宇 田 森 遺 跡	209~215	上 野 廃 寺 跡 (紀伊薬師寺跡)	263	東 池 2 号 墳	307	神 前 遺 跡	353	興 徳 寺 跡	390	神 波 遺 跡
17	藻 崎 北 浜 遺 跡	60	国 有 本 遺 跡	108	直川八幡山4号墳	150	上 野 遺 跡	218	若 林 古 墳 群	264	東 池 3 号 墳	308	井 辺 遺 跡	356	太 田 城 跡	391	永 穂 遺 跡
18	藻 崎 南 浜 遺 跡	61	大 谷 古 墳	108-2	直川八幡山14号墳	151	上 野 遺 跡	219	吉 礼 砂 羅 谷 窯 跡	265	東 池 4 号 墳	309	岡 崎 縄 文 遺 跡	357	山 崎 山 古 墳 群	392	楠 本 遺 跡
19	藻 崎 西 方 遺 跡	62	晒 山 古 墳 群	109	直川八幡山5号墳	152	上 黒 谷 遺 跡	220	平 尾 1 号 墳	266	吉 里 銅 鐸 出 土 地	310	森 小 手 穂 埴 輪 窯 跡	358	山 東 中 遺 跡	393	吉 田 遺 跡
20	神 前 東 浜 遺 跡	63	慶 円 寺 裏 山 古 墳	110	直川八幡山6号墳	153	北 野 窯 跡	221	平 尾 2 号 墳	267	小 山 古 墳	311	大 日 山 Ⅰ 遺 跡	359	加 太 Ⅱ 遺 跡	394	城 山 遺 跡
21	神 前 西 浜 遺 跡	66	雨 が 谷 古 墳 群	111	直川八幡山7号墳	154	北 野 遺 跡	222	平 尾 3 号 墳	268	奥 須 佐 窯 跡	312	井 辺 Ⅰ 遺 跡	360	雨 が 谷 遺 跡	395	岡 村 遺 跡
22	屋 敷 浜 遺 跡	70	楠 見 遺 跡	112	直川八幡山8号墳	154-2	北 野 Ⅱ 遺 跡	226	楠 古 墳 群	269	円 満 寺 古 墳	313	井 辺 Ⅱ 遺 跡	361	冬 野 遺 跡	396	室 山 古 墳 群
23	おそ越の鼻遺跡	71	鳴 滝 古 墳 群	113	直川八幡山9号墳	155	若 宮 池 遺 跡	227	足 守 神 社 古 墳 群	270	峯 古 墳	314	鳴 神 Ⅱ 遺 跡	362	鳴 滝 遺 跡	397	明 王 寺 遺 跡
24	一 色 谷 遺 跡	72	奥 出 古 墳	114	直川八幡山10号墳	156	上 三 毛 遺 跡	228	赤 山 古 墳	271	西 光 寺 窯 跡	315	鳴 神 Ⅲ 遺 跡	363	園 部 円 山 古 墳	398	城ノ前1号墳
25	柏 の 浜 遺 跡	73	有 功 経 塚	115	直川八幡山11号墳	157	下 三 毛 遺 跡	229	塩 谷 1 号 墳	272	吉 里 1 号 窯 跡	316	鳴 神 Ⅳ 遺 跡	364	西 庄 Ⅱ 遺 跡	399	平 尾 遺 跡
26	深 蛇 池 遺 跡	74	蘭 部 Ⅰ 遺 跡	116	直川八幡山12号墳	158	小 山 古 墳	230	塩 谷 2 号 墳	273	吉 里 2 号 窯 跡	317	鳴 神 貝 塚	365	永 山 遺 跡	400	木ノ本Ⅳ遺跡
27	垂 水 遺 跡	75	蘭 部 古 墳	117	直川八幡山13号墳	159	寺 山 古 墳 群	231	塩 谷 3 号 墳	274	頭 陀 寺 古 墳	318	鳴 神 Ⅴ 遺 跡	366	永 山 古 墳	401	友 田 町 遺 跡
28	神 島 遺 跡	76	蘭 部 Ⅱ 遺 跡	118	八王寺山古墳群	160	東 国 山 古 墳 群	232	塩 谷 4 号 墳	275	頭 陀 寺 遺 跡	319	音 浦 遺 跡	367	井 辺 Ⅲ 遺 跡	402	府 中 Ⅳ 遺 跡
29	沖の島北方海底遺跡	77	有 功 遺 跡	119	橋 谷 Ⅰ 遺 跡	161	宮 山 古 墳 群	233	塩 谷 5 号 墳	276	大 将 軍 窯 跡	320	鳴 神 Ⅵ 遺 跡	368	紀 三 井 寺 遺 跡	指 1	史 跡 和 歌 山 城
30	野 奈 浦 遺 跡	78	池 田 遺 跡	120	橋 谷 Ⅱ 遺 跡	162	小 倉 古 墳 群	234	新 出 古 墳	277	有 ノ 木 窯 跡	321	岩 橋 遺 跡	369	奥 山 田 遺 跡		
31	ハイブの浦遺跡	79	有 功 古 墳	121	橋 谷 Ⅲ 遺 跡	163	小 倉 9 号 墳	235	明 王 寺 経 塚	278	宝 光 寺 跡	322	栗 栖 Ⅰ 遺 跡	370	朝 日 石 槍 出 土 地		
32	浜 遺 跡	80	大 同 寺 墳 墓	122	橋谷銅鐸出土地	164	明 楽 古 墳 群	236	矢 田 古 墳	279	松 原 1 号 墳	323	栗 栖 Ⅱ 遺 跡	371	深 山 要 塞 跡		
33	磯 の 浦 1 号 墳	81	大 同 寺 古 墳	123	弘 西 遺 跡	165	小 倉 神 社 1 号 墳	237	北 池 古 墳	280	松 原 2 号 墳	324	高 橋 神 社 遺 跡	371-1	深 山 第 1 砲 台 跡		
34	磯 の 浦 2 号 墳	82	大 同 寺 遺 跡	124	北 田 井 遺 跡	166	小 倉 神 社 2 号 墳	238	殿 山 1 号 墳	281	滝ヶ峯古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	371-2	深 山 第 2 砲 台 跡		
35	磯 の 浦 3 号 墳	83	法 然 寺 遺 跡	125	別 所 1 号 墳	167	モ ン ト 古 墳 群	239	殿 山 2 号 墳	282	滝ヶ峯 遺 跡	326	有 本 銅 鐸 出 土 地	371-3	男 良 砲 台 跡		
36	磯 の 浦 4 号 墳	84	六 十 谷 遺 跡	126	別 所 2 号 墳	168	小 倉 神 社 境 内 遺 跡	240	殿 山 3 号 墳	283	薬 勝 寺 南 山 古 墳 群	327	太 田 ・ 黒 田 遺 跡	372	加 太 砲 台 跡		
37	磯 脇 遺 跡	85	和 田 遺 跡	127	別 所 3 号 墳	169	金 谷 遺 跡	241	土 井 山 古 墳	284	仁 井 辺 遺 跡	328	吉 田 窯 跡	373	田 倉 崎 砲 台 跡		
38	西 庄 遺 跡	86	西 辻 遺 跡	128	上 野 古 墳 群	170	奥 池 遺 跡	242	丸 山 古 墳	285	薬 勝 寺 跡	329	鷺 ノ 森 遺 跡	374	虎 島 砲 台 跡		
39	平 の 下 遺 跡	87	川 口 遺 跡	129	山 口 1 号 墳	171	高 積 山 遺 跡	243	高 岡 古 墳	286	薬 勝 寺 遺 跡	330	鷺 ノ 森 窯 跡	375	友ヶ島要塞跡		
40	木ノ本Ⅰ遺跡	88	六 十 谷 古 墳 群	130	山 口 2 号 墳	172	薬 徳 寺 跡	244	桜 山 古 墳	287	松 原 Ⅰ 遺 跡	331	秋 月 遺 跡	375-1	友ヶ島第1砲台跡		
41	木ノ本Ⅱ遺跡	89	直 川 遺 跡	131	山 口 3 号 墳	173	城ヶ峯 城 跡	245	伊太祈曽神社古墳群	288	松 原 Ⅱ 遺 跡	332	津 秦 遺 跡	375-2	友ヶ島第2砲台跡		
42	木ノ本Ⅲ遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	132	山 口 4 号 墳	174	禰 宜 Ⅰ 遺 跡	246	チ シ ョ 古 墳	289	薬 師 谷 遺 跡	333	岡 の 里 古 墳	375-3	友ヶ島第3砲台跡		
43	木ノ本経塚	91	高 井 遺 跡	133	山 口 5 号 墳	175	禰 宜 Ⅱ 遺 跡	247	城ヶ森 1 号 墳	290	江 南 遺 跡	334	関 戸 遺 跡	375-4	友ヶ島第4砲台跡		
44	釜 山 古 墳 群	92	鳥 井 遺 跡	134	山 口 6 号 墳	176	禰 宜 貝 塚	248	城ヶ森 2 号 墳	291	曾 垣 田 遺 跡	335	関 戸 古 墳	375-5	友ヶ島第5砲台跡		

I. はじめに

和歌山市における平成6（1994）年度の本財団の発掘調査受託事業は13件である。

調査に至った原因としては、宅地造成及び道路建設に関わる開発が多いということが指摘できる。

これらの発掘調査で、いくつかの重要な成果が得られているので、以下時代毎にまとめることとする。

弥生時代 弥生時代の調査は、府中IV遺跡で弥生時代末期から古墳時代初頭の竪穴住居を中心とした集落跡を確認した。

古墳時代 古墳時代の遺跡の調査は件数が最も多く、竪穴住居などの集落の調査として西田井遺跡、平尾遺跡、鳴神IV遺跡の調査があげられる。古墳本体の調査は城ノ前1号墳で横穴式石室の調査を行った。

奈良～室町時代 奈良時代の調査として、鳴神IV遺跡で土坑を1基検出した。また、太田・黒田遺跡の調査では室町時代の溝を検出した。

江戸時代 江戸時代の調査は、鷺ノ森遺跡（本願寺跡）及び和歌山城関係の調査がある。それぞれの調査で石垣・礎石等を検出した。

【1994年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
1	城ノ前I遺跡 (城ノ前1号墳)	駐車場建設	5月～6月	30㎡	古墳(横穴式石室)の確認	木村・奥村	
2	西田井遺跡	老人ホーム建設	5月～6月	100㎡	古墳時代の竪穴住居跡を検出	北野・木建	
3	和歌山城跡第3次	車両出入口造成	5月	30㎡	江戸時代の石垣を検出	井馬	
4	鳴神IV遺跡第5次	住宅建設	6月	4㎡	奈良時代の土坑を検出	前田	市教委調査
5	平尾遺跡	市道建設	6月～7月	320㎡	古墳時代の集落を確認	北野・井馬・栗本	
6	鷺ノ森遺跡第5次	幼稚園園舎建設	7月～9月	225㎡	江戸時代の石垣・礎石を検出	木建	
7	和歌山城跡第4次	事務所建設	8月～9月	60㎡	近代の石敷遺構を検出	栗本・奥村	
8	友田町遺跡	住宅建設	9月	24㎡	新発見の遺跡、古墳時代の溝を検出	前田	市教委調査
9	鳴神IV遺跡第6次	道路改良工事	10月～12月	520㎡	古墳時代の竪穴住居跡・古墳(方墳)を検出	北野・井馬・木村	
10	鳴神VI遺跡第4次	道路改良工事	10月～12月	430㎡	江戸時代の河道を検出	木建・奥村	
11	太田・黒田遺跡第25次	住宅建設	10月	22㎡	中世の溝を検出	北野・栗本	
12	府中IV遺跡	宅地造成	12月	206㎡	弥生時代末から古墳時代初頭の集落を確認	井馬・栗本・奥村	
13	史跡和歌山城第13次	石垣改修工事	1月～2月	100㎡	旧表坂に関連する石垣等を検出	栗本	
14	睨口石岩陰遺跡	下水道管理設工事	3月	27㎡	近世以前の堆積層を確認	井馬	
15	有本城	河川改修工事	3月	20㎡	江戸時代の石垣を確認	木村・木建	
16	野奈浦遺跡	電柱設置工事	3月	1㎡	古墳時代の遺物包含層を確認	益田	市教委調査

II. 埋蔵文化財の発掘調査概要

1. 城ノ前^{じょうまえ}I遺跡(城ノ前1号墳)発掘調査

調査地 和歌山市朝日1242

調査面積 27m²

位置と環境

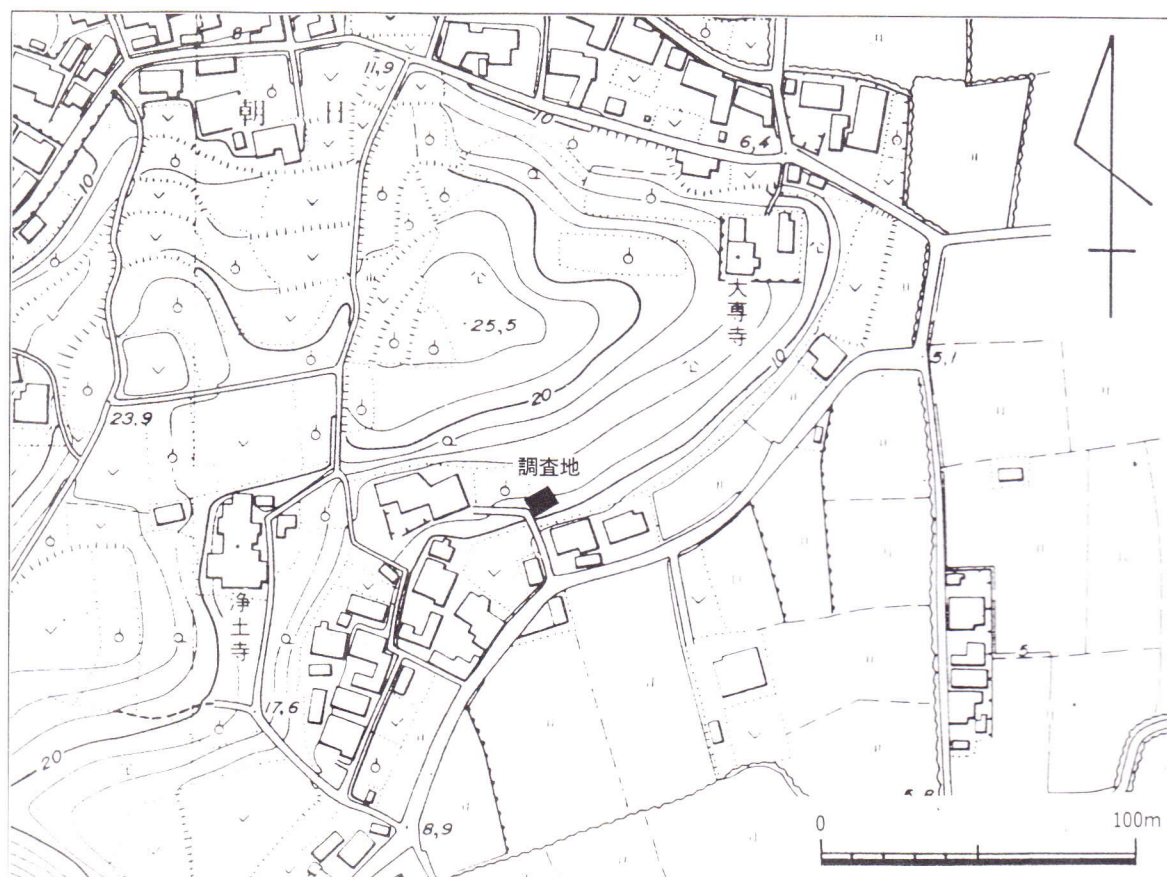
城ノ前I遺跡は和歌山市朝日に所在し、遺物散布地として周知の遺跡である。和歌山市の南東部に位置するこの遺跡は、名草山の東から分岐した標高約25.5mの独立丘陵に立地する。調査地は、この丘陵の南東斜面(標高約13.0m)に位置する。

この遺跡内において、個人の農業用駐車場建設に伴った工事中に横穴式石室が発見され、古墳の存在が明らかとなった。このためこの古墳は、和歌山市教育委員会が新発見の遺跡として文化庁に届け出を行い、城ノ前1号墳(遺跡番号398)となったものである。

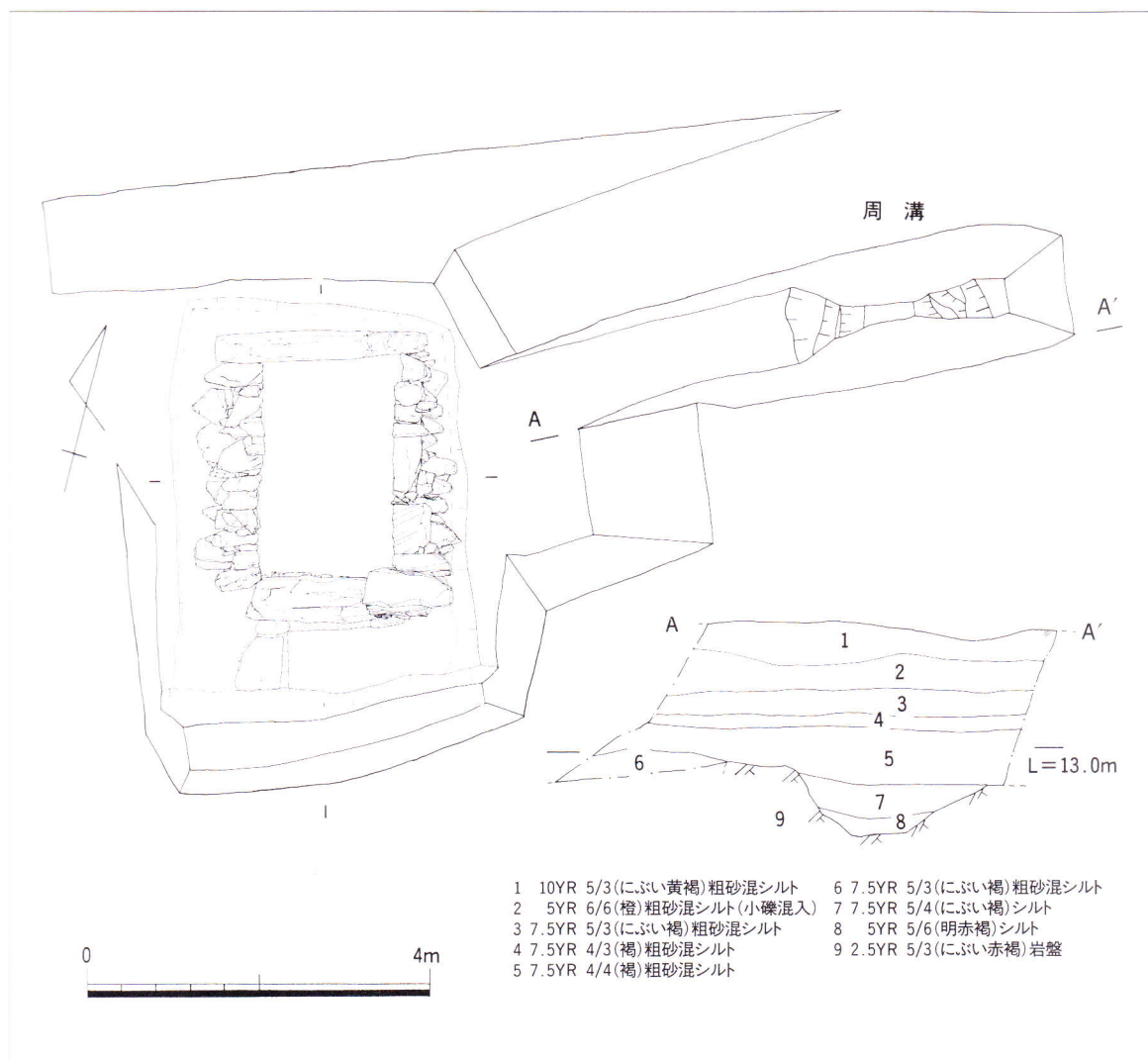
この遺跡周辺には古墳時代のものとして、約0.3km南東に曾垣田古墳、約2km南東に薬勝寺南山古墳群・滝ヶ峯古墳群、約0.5km北西には赤津古墳群、約2km北西には前方後円墳を含む和田古墳群や竈山神社古墳などが築かれている。また集落では約4km北東に平尾遺跡が位置する。

調査内容

この古墳は、調査前の段階においては、前述のように石室が露出した状態であったほか、工事の



調査位置図



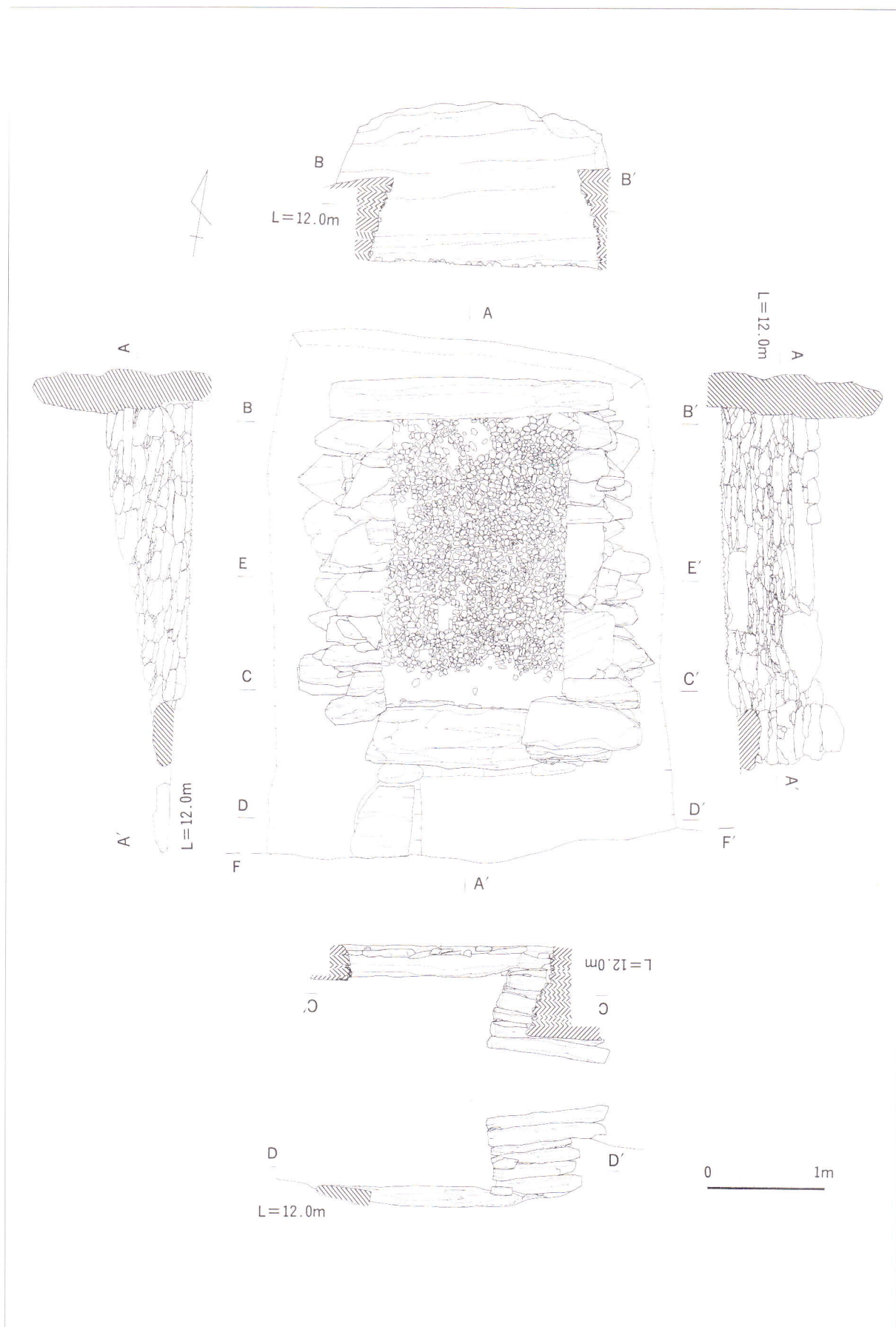
遺構全体実測図

後に埋め戻された状況であった。

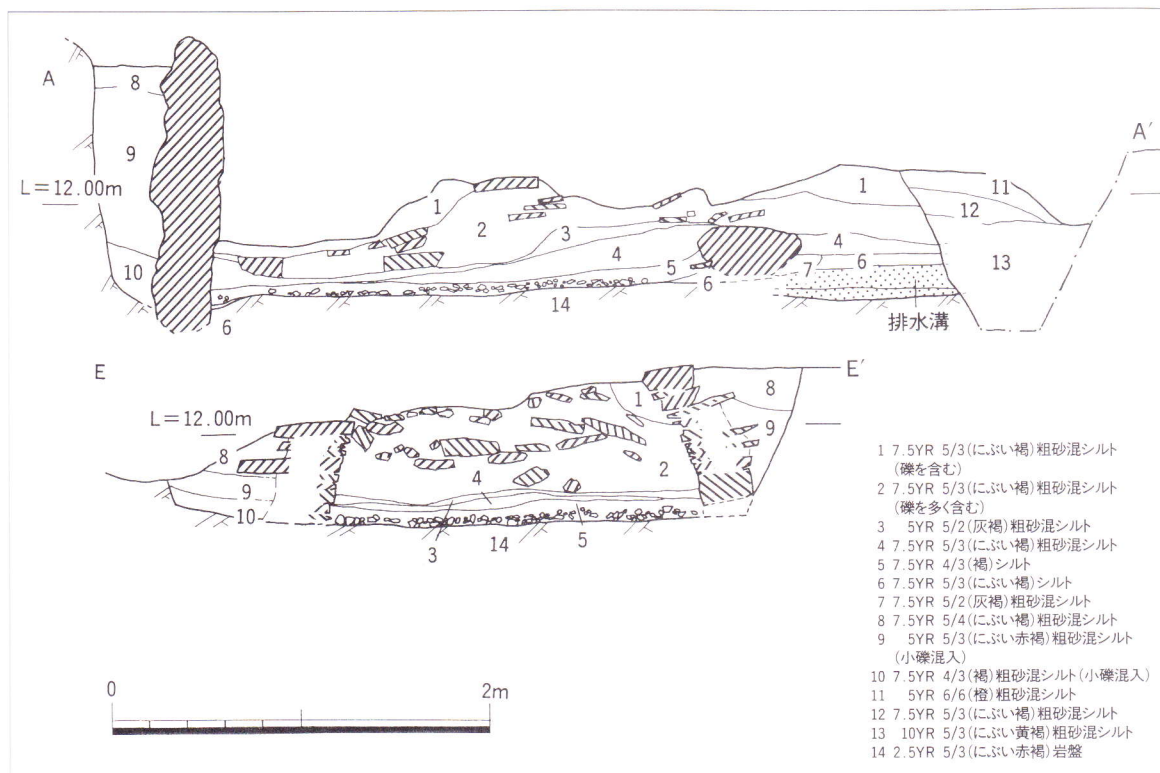
墳丘 調査対象地は、後世に大きく削平を受けていたことや地形的な制約を受け調査範囲が限られた。このため、墳丘の範囲確認は石室の東側において、幅約1.6m、長さ約6mの調査区を1カ所設けた。この結果、幅約2.5m、深さ約0.9mを測る溝を検出した。石室主軸線から溝の外側までは約5.5mを測る。この溝は、岩盤を掘削したものであった。溝の1層上位からは、須恵器・土師器・黒色土器・竈が出土し、下位からは、須恵器・土師器が出土した。2層からは、遺物が出土しなかった。この溝は、西側において検出された墓坑の掘方と同じ9層(玄室内土層14層に対応)から掘削されていることなどから周溝の可能性はある。この溝の規模は、限られた調査範囲のため明確でないが、円墳だと推定するならば直径約11mの規模を測るものである。

盛土は、土層観察から9層直上において調査範囲全体にわたって著しい削平を受けているためほとんど確認できなかった。しかし、調査区の南東隅に堆積する6層は墳丘盛土の可能性はある。また、5層から土師器・黒色土器が出土することから、墳丘は平安時代以降に削平されたと考えられる。

石室 石室は、南に開口する横穴式石室である。石室内1・2層は、石室が壊された際に落ち込んだものと考えられる10~50cm大の礫が堆積していた。2層は、1層より礫を多く含んでおり、焼土を混



横穴式石室実測図



石室内土層断面図

入するものであった。

遺物の出土状況は、1層から土師器・黒色土器・瓦器、2層は礫に混じって多くの土師器・黒色土器と瓦器が出土した。3層から須恵器・土師器・黒色土器、4層から土師器(竈・羽釜など)・黒色土器、5層では、須恵器・土師器・黒色土器・ガラス玉・鉄製品(刀子など)が出土している。

墓坑は、現存長約4.5m、幅約3.4m、深さは奥壁側で約2mを測る。

玄室規模は床面で幅約1.9m、長さ約2.6mを測る。天井石は、発見された際には全て失われていた。奥壁は高さ約1.5m、幅約2.5m、厚さ約0.3mの緑色片岩を据えていた。側壁は平均して長さ約50cm、幅約30cm、厚さ約10cmの緑色片岩による小口積みで、左側壁は約75度、右側壁は約65度の角度で内側に傾いている。左側壁は南側半分の残存状況が悪いが、右側壁は全体に約1mの高さまで残存しており、最上段の石材は、下



横穴式石室 (南から)

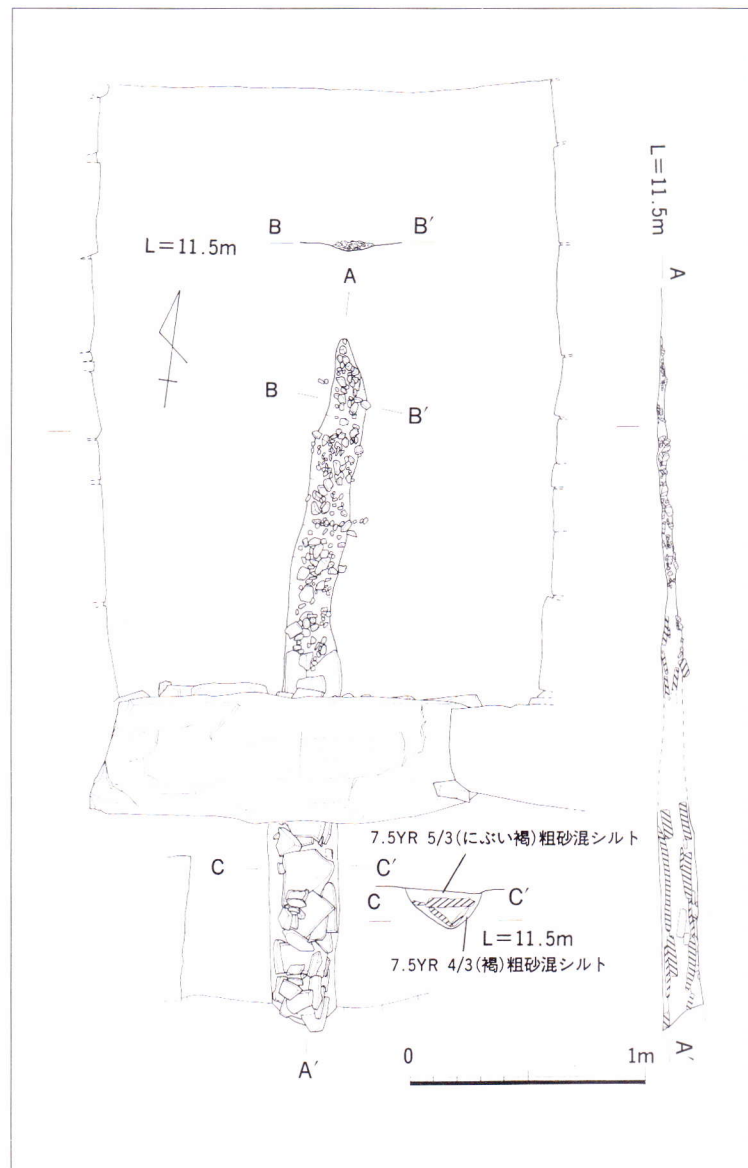


玄室側壁 (西から)

段の石材と比較して長さや厚みがやや大きくなる傾向がある。床石は、奥壁から約2.8mの範囲にわたって直径3～10cm大の円礫を敷き詰めていた。これに対して玄室前道基石から玄室内へ約30cmの範囲は、床石を検出しなかった。

羨道は削平が著しく、左側壁の基底石として長さ約1.4m、幅約0.5m、厚さ約0.3mを測る片岩の石材を1点検出した。基底石の南側は近世に削平を受けている。玄室と羨道との境の床面には長さ約1.9m、幅約0.5m、厚さ約0.2mを測る玄室前道基石が据えられていた。袖部は左側を消失していたが、右側は約0.8mの高さを残していた。右袖部は、玄室前道基石の上に石材を持ち送りしたものであり、約80度の角度で内側に傾いている。右袖部は、長さ約1m、幅約0.5mを測るものである。玄室前道基石と羨道の基底石は約20cmの間隔があり、その間に短径約20cm、長径約40cmを測る楕円形のピットが左側で確認された。また右側においても、石室の主軸線にほぼ対称する位置に短径約10cm、長径約35cmを測る楕円形のピットを検出した。さらに右袖部石材の羨道側に掘りくぼめられた痕跡を観察することができ、羨道側のピットの上の位置に当たるなどのことから、柱石が構築されていたと考えられる。さらに羨道床面は、玄室床面から約15cm高く構築されていたため、床面との高低差が生じ、玄室側の玄室前道基石の下には長さ約10～45cm、厚さ約5cmの片岩の割石が込められていた。

排水溝は、羨道部から玄室前道基石の下を通り玄室中央付近まで掘削されている。溝の掘削方向は、羨道部から玄室内約30cmまでは主軸方向に掘削されているが、これより北側は主軸から約13度東の方向に傾いている。排水溝の構造であるが、羨道部は素堀溝に断面V字形に緑色片岩の板石を組み、同じ石材で蓋をしている。この溝はさらに玄室前道基石の下を通り、玄室内へ約30cmまで及ぶ。しかし、玄室内は蓋石を欠くものである。これより玄室側は、断面U字形の素堀溝に円礫を入れており、さらにこの円礫は片岩の板石側へ約20cm流れ込んでいる。以上のように排水溝は緑色片岩と円礫の2つの方法で構築されている。このような違いが生じた要因として、本来

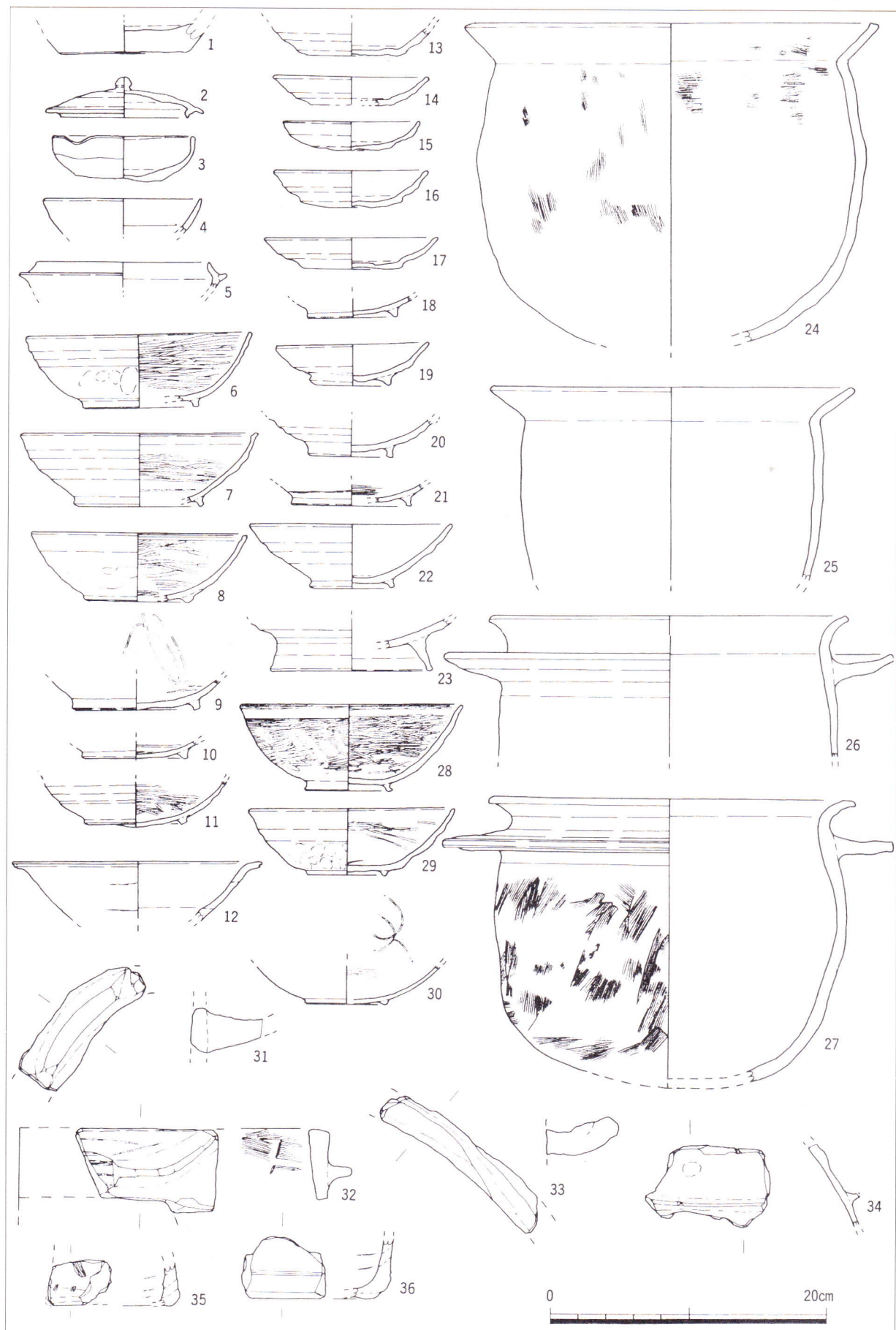


排水溝実測図

の構造は素掘した後に断面V字形に緑色片岩の板石を組み、円礫は床石を敷いた際に入ったものと推察できる。全体的に墓坑の床面からの深さは約10cmで、残存する排水溝の総延長は約2.9mを測る。玄室側と羨道側の高低差は、排水溝の底面において羨道側が約1cm低くなっている。

出土遺物 今回の調査で出土した遺物は、コンテナに約4箱であった。量的にみた場合、石室内堆積層である第4層からの土師器・黒色土器の出土が顕著である。遺物の種類は、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・竈・ガラス玉・鉄製品である。

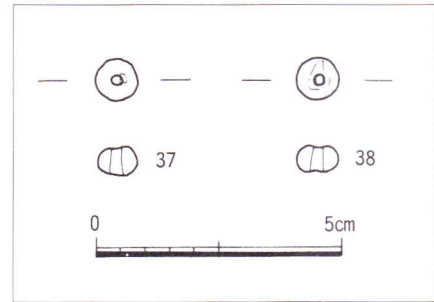
1は弥生土器の甕底部である。底部径9.6cm、残存器高2.0cmを測り、平底を呈する。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。2から5は須恵器である。2は宝珠つまみのつく杯蓋である。口径9.1cm、器高3.0cmを測る。外面調整は中心から2/3以上回転ヘラケズリを施す。色調は灰白色を呈し、焼成は良好であるが軟質。ロクロは右回転である。3から5は杯身である。3は口径10cm、器高3.0cmを測る。色調は暗灰色を呈し、焼成は堅緻。底部はヘラ切り未調整で、焼き歪んでいる。4は復元口径11.4cmを測る。焼成は良好であるが軟質である。色調は灰白色を呈し、胎土は密。5は復元口径12.5cmを測る。色調は褐黄色を呈し、胎土は密。6から12は黒色土器のA類で、6から11は碗であり、内面にミガキを施し炭素を吸着させたものである。6は口径16.9cm、復元高台径8.4cm、器高5.4cmを測る。内面には密にミガキを施す。7は口径17.0cm、高台径11.4cm、器高5.2cmを測る。胎土は密。8は口径15.3cm、高台径7.8cm、器高5.0cmを測る。焼成は良好。胎土は密。9は高台径9.4cm、残存器高2.2cmを測り、胎土は密である。10は高台径7.6cm、残存器高1.3cmを測る。胎土は密。11は高台径7.6cm、残存器高1.3cmを測る。12は復元口径18.2cmで、口縁外端部に一条の沈線を施す。焼成は良好、胎土は密。碗にみられる内面のミガキはなく、鉢と思われる。13から27は土師器である。13から17は皿で、焼成は良好で、胎土は密であるが砂粒を含む。13は底径8.0cm、残存器高2.0cmを測る。14は口径11.4cm、底径5.8cm、器高2.1cmを測る。15は口径9.9cm、器高2.1cmを測る。色調は淡橙褐色を呈する。16は口径11.2cm、底径9.4cm、器高2.6cmを測る。17は口径12.4cm、底径7.2cm、器高2.3cmを測る。18から22は碗である。18は高台径6.4cm、残存器高1.5cmを測る。19は口径11.0cm、高台径5.9cm、器高3.1cmを測る。色調は赤褐色を呈する。20は高台径6.4cm、残存器高2.7cmを測る。色調は赤褐色を呈する。21は高台径8.8cm、残存器高1.6cmを測り、内面にミガキを施す。22は口径14.6cm、高台径6.2cm、器高4.4cmを測る。色調は赤褐色を呈する。23は高台径11.8cm、残存器高3.7cmを測る。色調は赤褐色を呈する。24・25は甕である。24は口径28.8cm、体部最大径28.1cmを測る。口縁がラッパ状に開き、色調は淡茶褐色を呈する。内外面ともにタテハケを施す。25は口径25.6cm、残存器高14.1cmを測る。色調は赤褐色を呈する。26・27は羽釜である。26は口径25.2cm、鏝径32.4cmを測る。27は口径26.7cm、鏝径32.7cm、体部最大径25.5cmを測る。外面体部はハケ調整を施す。28から30は瓦器碗である。28は口径15.7cm、高台径6.4cm、器高6.2cmを測る。内外面ともに暗文を密に施す。胎土は密であるが、砂粒を含む。29は口径14.6cm、高台径5.6cm、器高4.9cmを測る。内面はミガキ、外面は指押えを施す。胎土は密であるが、砂粒を含む。30は高台径5.7cm、残存器高2.7cmを測る。内面はミガキ、外面は弱い指押えを施す。胎土は密である。31から36は竈である。31から33は、庇部分である。31は付け底で、竈に向かって左側面にあたり、33は右側面にあたり、接合面で剥離している。32は竈に向かって正面から右側面へ屈曲していく部分である。炊口部分の竈に向かった右のコーナー部分に、ヘラ状工具で切り取った痕跡を観察した。また、付け底の剥離した部



遺物実測図

分で、底を接合する際の切り込みの痕跡が顕著にみられる。復元口径は37cmを測る。34は貼り付け突帯の体部である。35は炊口部分の底部である。残存器高は3cmを測る。36は底部である。残存器高5.0cmを測る。焼成は良好で、胎土は密であるが砂粒を含む。外面に一条の沈線を施す。

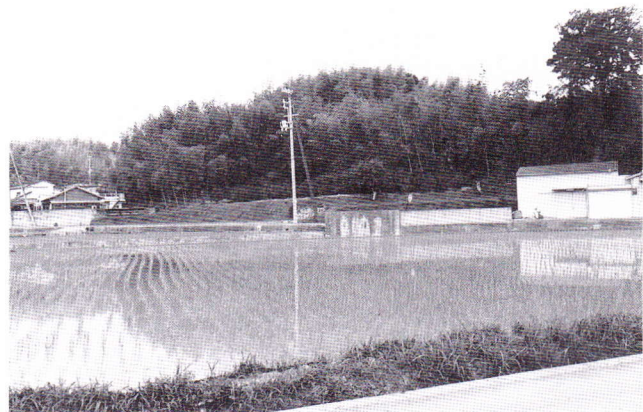
ガラス玉 37は淡緑色を呈し、直径8.5mm、厚さ5mm、孔径は上部2mm、下部2.5mmを測る。38は緑色を呈し、直径8.0mm、厚さ5.0mm、孔径は上部1.5mm、下部2.5mmを測るものである。



遺物実測図

まとめ

城ノ前1号墳は、岩橋丘陵に築造された、総数約700基を数える県下最大の古墳群である岩橋千塚古墳群の約4km南に位置する。今回の調査で確認した古墳の石室構造は、従来の岩橋千塚における「岩橋型」と称される一般的な横穴式石室と比較して異なった構造をもつものであった。いわゆる「岩橋型」の横穴式石室は、片岩の割石の小口積み、平積みで各壁面を構成している。調査の結果、古墳の石室は片岩の割石の小口積みで玄室幅約1.9m、玄室長約2.6mを測り、構築方法や石室の規模においては一般的な規模であるといえる。しかし、



城ノ前1号墳近影（南東から）

奥壁に残存高約1.5mの巨石を使用している点は、従来の「岩橋型」の構造と異なるものである。検出した横穴式石室について、羨道の左側壁は、玄室前道基石側で基底石を検出したことや石室主軸線を挟んだほぼ対称の位置に柱石を据えたと考えられるピットを検出したことから両袖式の石室とみられる。また、以上のことから羨道の幅は約1mと推定するものである。

次に古墳の築造年代は、石室の構造や出土遺物から6世紀後半から7世紀前半に築造されたとみられる。この頃の岩橋千塚古墳群は、造墓活動の衰退期に当たり、周辺他地域では独自の石室構造をもつ地域が出現する。本古墳は、「岩橋型」の石室構造の流れをくむものであるが、一部に独自の構造を合わせもつものであり、岩橋千塚古墳群に隣接する当地域での古墳の一樣相を示すものと考えられる。

以上、城ノ前I遺跡内で新たに発見された城ノ前1号墳は、当地域においての古墳文化を考える上で貴重な資料提供となった。

（奥村 薫）

参考文献

- 『岩橋千塚』末永雅雄編 和歌山市教育委員会（1967）
- 『和歌山市史』第1巻 和歌山市史編纂委員会（1991）

2. 西田井遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市西田井池の川224-2

調査面積 100m²

位置と環境

奈良県の大台ヶ原に源を発し、紀伊半島の北部を紀淡海峡にむかって西流する紀ノ川は、その河口部において広大な和歌山平野を形成する。和歌山市は、この和歌山平野を主な市域とする。

西田井遺跡は、和歌山平野のうち紀ノ川北岸の微高地上に立地しており、縄文時代から中世にまでわたって多く人間活動の痕跡が残されている⁽¹⁾。

この西田井遺跡のほかに、紀ノ川北岸においては、北方に北田井遺跡、西に田屋遺跡、北東に宇田森遺跡などがある。これらの遺跡は、古墳時代の紀ノ川北岸下流域において中心的位置を占める拠点集落であったと考えられる。

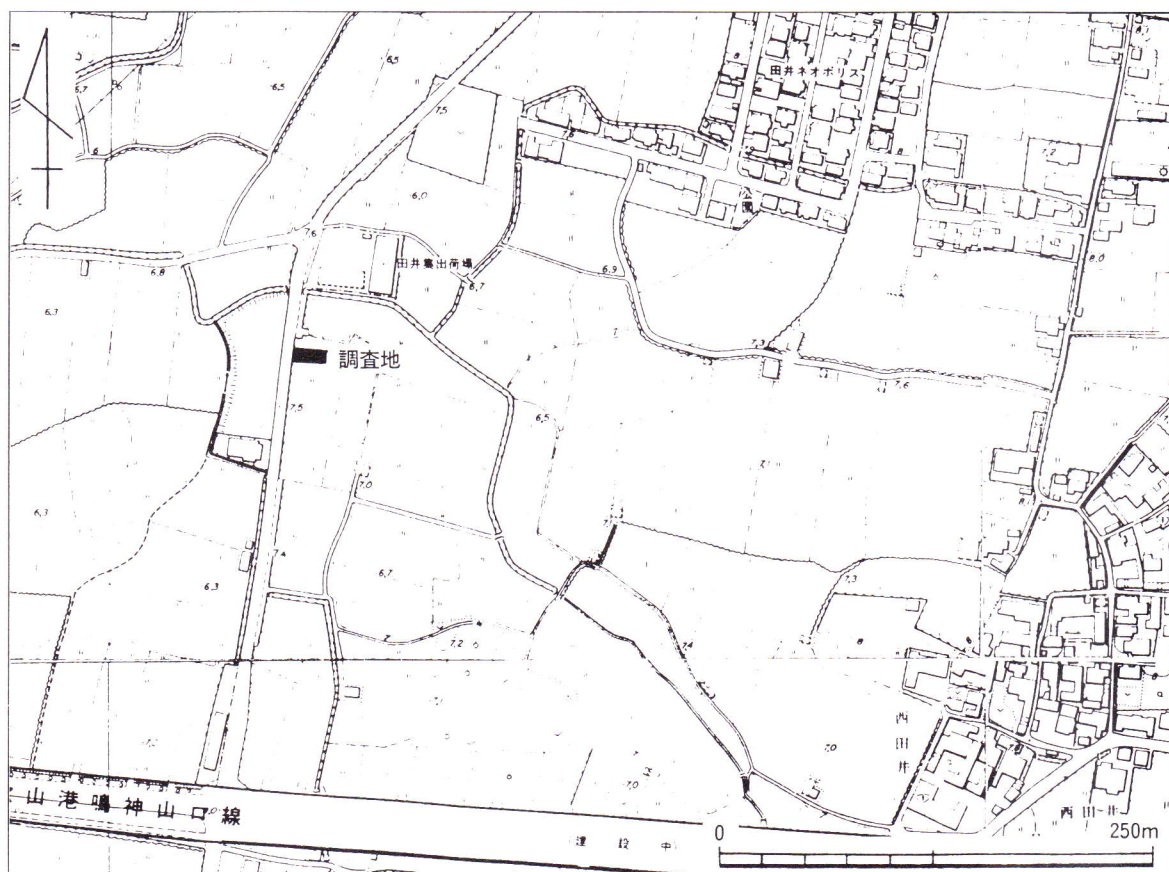
調査内容

(1) 基本層序

今回の調査地の土層堆積状況は、以下のごとく5層に分層できる。

第1層 7.5Y4/1 (灰) 粗砂混シルト。近・現代の耕土。(細礫を少し含む)。

第2層 5Y6/2 (灰オリーブ) 粗砂混シルト (この層の上面は、第1層にかかわる床土状を呈している)。

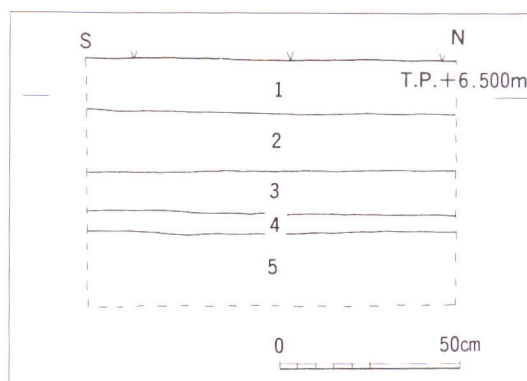


調査位置

第3層 5Y6/1 (灰) 粗砂混シルト。近世の堆積層。(第2層に類似した層であるが、第2層よりも若干シルト質で、マンガン粒が多く認められる)。

第4層 5Y6/1 (灰) 粗砂混シルト。平安期の小溝群がこの層の上面から掘り込まれている(この色調・粒径は第3層と同じであるが、第3層よりもマンガン粒が少ない)。

第5層 5Y6/3 (オリーブ黄) 粗砂混シルト。(無遺物層。古墳時代の遺構のベース層。上部にはマンガン粒が多い)。



基本層序

(2) 検出遺構

検出遺構面は、第5層のオリーブ黄色粗砂混シルト(無遺物層)をベース土とした1面のみであるが、遺構の性格、遺構埋土の色調と粒径およびそこに含まれている遺物の差異等によって、便宜的に上層遺構(平安時代中期後半)と下層遺構(古墳時代中期)とに遺構を区分し、調査を進行した。

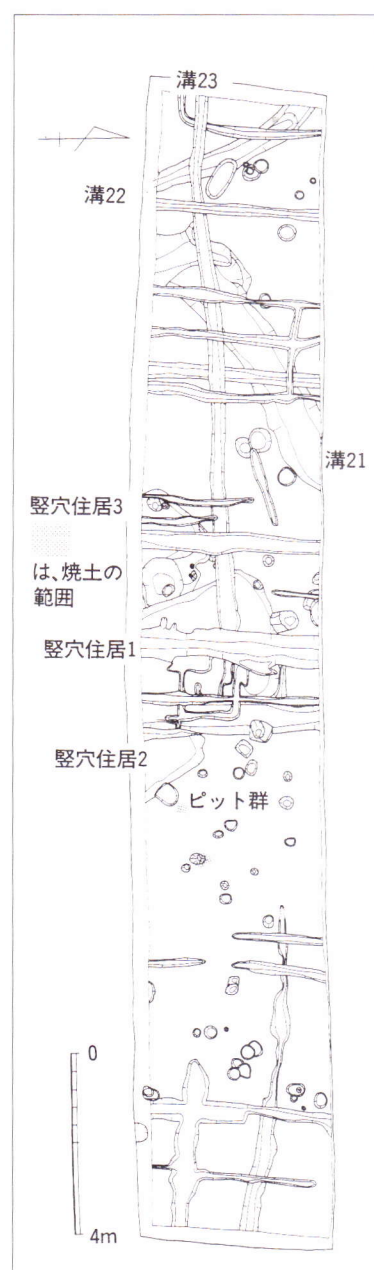
上層遺構に関しては、調査地の断面観察によってその一部が、第4層上面から掘り込まれている事実を確認したが、第4層の層厚が5cm程度であったため、機械掘削直後の上面での遺構検出は困難であると判断し、第5層上面での検出をおこなった。以下各遺構についての概要を述べてゆく。

上層遺構

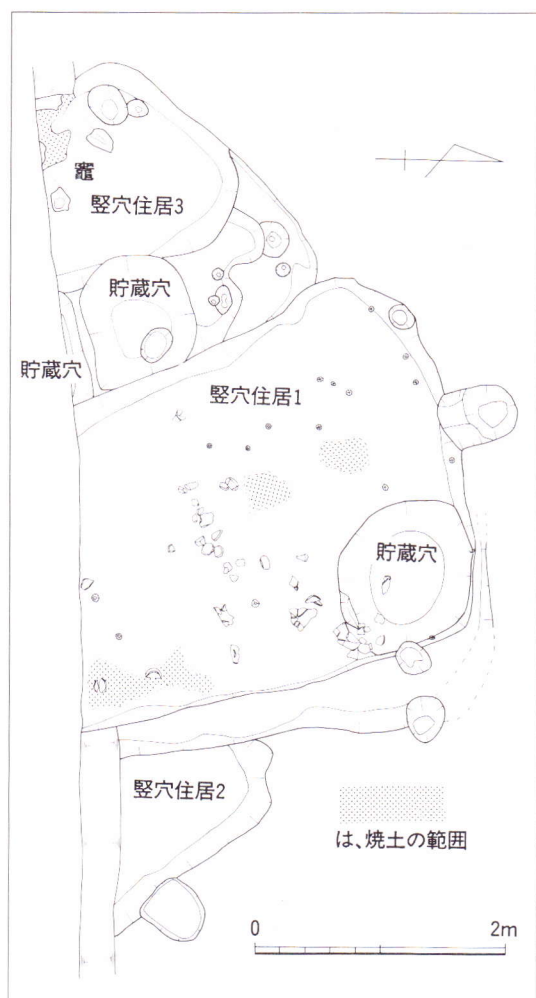
上層遺構は、主として耕作に伴うと考えられる小溝群(溝1~20)で、埋土は全て類似し、2.5Y6/4(にぶい黄)を呈する粗



遺構完掘状況(東から)



遺構平面実測図



縦穴住居平面実測図

た後に、縦穴住居 1 が構築されている。また、住居の内部施設として、縦穴住居 3 内から造り付け竈の崩落したものを検出し、また縦穴住居 1・3 内からは貯蔵穴を検出した。溝に関しては、溝 21 が自然流路と考えられ、溝 22 は人工的な溝で、溝 23 は縦穴住居の周溝の可能性がある。以下、各遺構の概要について述べてゆく。



縦穴住居完掘状況（北から）

砂混シルトである。

このうち溝 1～3・5～11 は、南北方向の小溝で、溝 4・12～20 は、東西方向の小溝である。

これら小溝が掘削された時期は、遺構の重複の状況によって大きく 3 時期に区分できるが、その時期差はそれぞれの遺構埋土が共通することや、遺構の規模もほぼ等しいことなどから大きくひらくものではないと考えられる。推定の指標としては、溝 14 内から黒色土器 A 類が出土しており、B 類や瓦器の出土がなく他の小溝からも黒色土器 B 類や瓦器等が出土しないことから、平安時代中期後半頃と考えられる。

また、これら小溝群のほかにピット数基を検出した。特にピット 49 に関しては、埋土が 2.5Y6/2 (灰黄) の粗砂混シルトで、中から土師器皿が出土した。その他の柱穴群は遺物の出土がないために、時期の不明なものが多いが、遺構埋土の特徴から上層遺構に属するものが主体と考えられる。

下層遺構

下層遺構には、縦穴住居 3 棟と溝 3 条がある。3 棟の住居は重複しており、縦穴住居 2・3 が埋没し

〔縦穴住居 1〕 東西 2.6m、南北 3.1m 以上の南北に長い方形の平面プランを呈する。深さは約 20cm を測り、埋土は以下のよう

- 第 1 層 2.5Y6/1 (黄灰) 粗砂混シルト
- 第 2 層 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂混シルト
- 第 3 層 7.5Y3/1 (オリーブ黒) 細砂混シルト (炭・焼土層)

第3層の層厚は最大約10cmあり、多数の遺物を包含する。このことから竪穴住居1は、焼失住居と考えられる。また貯蔵穴に関しては、直径1.0m、深さ約25cmを測る。埋土は、以下のように2層に分層できる。

貯蔵穴1層 5Y5/2 (灰オリーブ) 粗砂混シルト

貯蔵穴2層 (N2/0) (黒) 粗砂混シルト (炭化層)

また南東隅の壁面に沿って、奥行き1m、幅40cmを測る範囲に焼土塊を検出した。平面は不定形を呈するが、厚さは20cmを測り、非常によく火を受け焼けている。これは竈の痕跡と考えられる。その他に床面では杭跡も検出した。

[竪穴住居2] 一辺2.0m以上の方形を呈する住居で、その北東隅部分を検出した。深さは、約15cmを測る。埋土は以下のように大きく2層に分層できる。

第1層 5Y5/1 (灰) 粗砂混シルト

第2層 5Y6/2 (灰オリーブ) 粗砂混シルト

この住居は、竪穴住居1が構築される際に大半を破壊されている。

[竪穴住居3] 一辺2.5m以上の方形を呈す。深さは約25cmを測り、埋土は2層に分層できる。

第1層 2.5Y5/1 (黄灰) 粗砂混シルト

第2層 2.5Y4/2 (暗灰黄) 粗砂混シルト

この住居に伴う貯蔵穴は、南北に並んで2基検出した。北側のものは直径1.0m、深さ約25cmを測る。この貯蔵穴の中心からやや東よりで、長辺30cm、短辺20cmの楕円形を呈する柱穴を検出した。貯蔵穴内の堆積層は、以下のとおりである。

貯蔵穴1層 2.5Y5/2 (暗灰黄) 細砂混シルト

貯蔵穴2層 2.5Y6/1 (黄灰) 細砂混シルト (炭混じり)

南側の貯蔵穴に関しては、大半が調査区外に存在すると思われ、ごく一部を確認したにすぎない。よって規模その他のことは不明である。これら2基の貯蔵穴の位置は、住居の東側壁面のほぼ中央部に設けられている。また、この貯蔵穴に隣接する床面の北東隅には、周囲より18cm程度の比高差をもつテラス状の部分を確認した。

竈に関しては、住居西側壁面のほぼ中央部、貯蔵穴とは対峙する位置に設けられている。上部構造の崩落・削平が著しく、裾部の一部のみを検出した。その平面は馬蹄形を呈し、焚口を北東に向けている。煙道は焚口の延長線上、即ち南西方向に延びるものと推定できる。この竈本体の構築に用いられた粘土は赤く焼き締まっており、その色調は2.5Y4/1 (黄灰) を呈する粗砂混シルトである。また、焚口部の堆積土は、5Y5/2 (灰オリーブ) を呈するシルトである。

以上、竪穴住居3棟の概要を述べたが、これら住居の時期は、竪穴住居1内3層出土須恵器の年代観が5世紀末葉(TK23~47)に求められることから、竪穴住居1はこの時期に構築されたと考えられ、竪穴住居2・竪穴住居3はこれよりやや遡るものと考えられる。

次に溝について述べてゆく。

[溝21] 北東から南西方向の溝で、幅約1.0m、深さ約25cmを測る。埋土は3層に分層できる。

第1層 2.5Y6/2 (灰黄) 粗砂混シルト

第2層 2.5Y5/2 (暗灰黄) 粗砂混シルト

第3層 2.5Y4/1 (黄灰) 粗砂混シルト

第3層からは須恵器および土師器が出土し、これら遺物の年代観や遺構埋土の特徴などから堅穴住居1に近い時期の溝と考えられる。

[溝22] 北西から南東方向の溝で、幅約60cm、深さ約30cmを測る。埋土は以下のように3層に分層できる。

第1層 5Y5/2 (灰オリーブ) 粗砂混シルト

第2層 5Y4/2 (灰オリーブ) 粗砂混シルト

第3層 5Y6/2 (灰オリーブ) 細砂混シルト

[溝23] 調査区の西端で検出したL字状の溝である。その規模は、幅約20cm、深さ約5cmを測る。埋土は2.5Y5/2 (暗灰黄) 粗砂混シルトである。この溝は形態から、堅穴住居の周溝の一部である可能性が考えられる。

その他に、調査区の中央からやや東寄りのところで直径約30cmの焼土が充填されたピット1基と、直径約20cmの範囲の焼土面を2箇所確認した。これらの遺構の周囲には、柱穴とみられるピット群があり、堅穴住居の痕跡である可能性も考えられる。

(3) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の種類には、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器 (内黒=A類) 等がある。量においては、土師器が主体を占めるが、製塩土器片も比較的多く出土している。しかし出土遺物はいずれも細片が多く、図化できるものは少ない。ここでは、今回の調査の主な成果である住居址 (堅穴住居1) から出土した主要な遺物などを掲げる。

1は須恵器蓋である。口径11.8cm、器高は4.7cmを測る。胎土はやや粗く、直径0.5～6mm大の白色砂粒を多く含む。調整は、全体にナデ調整を施すが、外面天井部には篋削り痕が認められる。焼成は良好で、色調は、外面が淡灰青色、内面は淡青灰色を呈する。

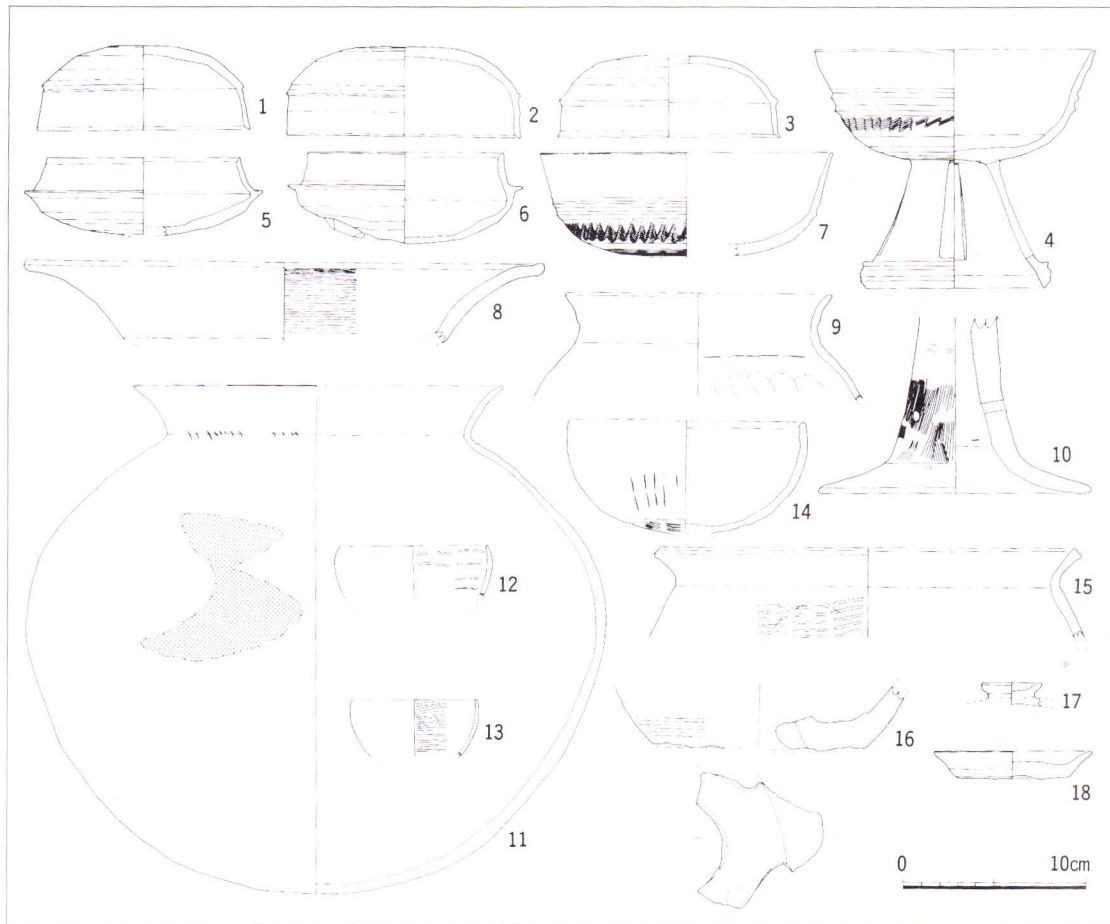
2も須恵器蓋である。口径12.8cm、器高は4.9cmを測る。胎土は密であり、直径1～2mm大の白色砂粒を若干含む。調整は、全体にナデ調整を施すが、外面天井部には篋削り痕が認められる。焼成は良好で、色調は外面が青灰色、内面は淡青灰色を呈する。

3も須恵器蓋である。口径は12.4cmで器高は4.5cmを測る。胎土は密であるが直径0.5～3mm大の白色・黒色砂粒を多く含む。調整は、外面天井部から体部にかけて篋削り痕があるが、その他の部分にはナデ調整が認められる。焼成は良好で色調は外面が淡灰青色で内面は青灰色を呈する。

4は、須恵器高坏である。口径15.6cm、底径9.8cm、器高は13.2cmを測り、このうち坏部は高さ6.1cmを測る。胎土は密で、直径0.5～2mm大の白色砂粒を多く含む。調整は、全体に丁寧なナデ調整を施すが、坏部外面底付近には、篋削り痕が認められる。焼成は良好で、色調は、外面が暗青灰色、内面は暗灰青色、断面は暗褐灰色を呈する。ただし坏部内面には明灰青色を呈する円形の部分があり、重ね焼きのおこなわれていた事が推定できる。

5は須恵器の坏身である。口径10.6cmで器高は4.3cmを測る。胎土は密で、直径0.5～3mm大の白色砂粒を少量含む。調整は、底部外面に篋削り痕が認められるほかは、全体にナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は外面が灰青色を呈し、内面は淡灰青色を呈する。

6も須恵器の坏身である。口径10.8cm、器高は5.0cm、深さは4.7cmを測る。底部付近に別個体の



遺物実測図

破片が融着している。胎土は密で、直径2～5mm大の白色砂粒を多く含む。調整は、全体的にナデ調整を施すが、底部外面には篋削り痕が認められる。焼成は良好である。色調は、外面が暗灰白色を呈し、内面は淡青灰色を呈する。

7は、須恵器高坏の坏部である。口径16.0cmで残存高は5.7cmを測る。胎土は密であるが、直径0.5～3mm大の白色砂粒を多く含む。調整は、体部外面に篋削り痕が認められる。また底部外面付近にはカキメ調整を施し、その他の部分にはナデ調整を施す。紋様は、体部外面に櫛描波状紋を施す。焼成は良好で、底部内面には自然釉が認められる。色調は、内外面ともに暗青灰色を呈し、また自然釉は暗緑灰色を呈する。

8は、土師器高坏の坏部上半である。口径は28.6cmで、残存高は4.4cmを測る。胎土は粗く、直径0.3～3mm大の白色・褐色・黒色砂粒を多く含む。内面には刷毛目調整が施されており、口縁端部に強いナデ調整が認められるが、外面は磨滅・剝離が著しく調整痕は観察できない。焼成は良好である。色調は外面が淡黄褐色から淡黄灰色を呈し、内面は淡灰褐色から淡灰白色を呈する。

9は、土師器の壺である。口縁部から肩部にかけて残存する。口径は14.6cmで残存高は5.8cmを測る。胎土は密であり、直径0.5～2mm大の白色・褐色砂粒をやや含む。器壁内面において頸部と肩部の接合痕が認められる。調整は、外面においては全体的にナデ調整が施されており、特に口縁部に強いナデ調整痕が認められる。また内面には指頭圧痕が認められる。焼成は良好で、色調は、外面が明黄褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

10は土師器高坏の脚部である。底径15.0cm、残存高は9.7cmを測るが、上部はやや歪んでいる。胎土は密で、直径0.5～2mm大の褐色砂粒・結晶片岩粒を多く含む。調整は、器表面全体に刷毛目調整が施されている。焼成は良好である。色調は外面が明赤褐色で、内面は明褐色を呈する。

11は、土師器の甕である。口径20.4cm、器高は28.0cmを測る。胎土は密で、直径0.5～2mm大の白色・褐色・黒色砂粒を多く含む。器表面は磨滅・剥離が著しく口縁部下端にわずかに叩き成形痕が認められる。また内面には粘土紐の接合痕が観察できる。焼成は良好で、体部中位に黒斑が認められる。色調は、外面が淡灰褐色で内面は淡灰白色を呈し、黒斑は暗灰黒色を呈する。

12は製塩土器である。型式は、丸底Ⅱ式と考えられる。口径は8.2cmで、残存高は2.9cmを測る。胎土は密で、赤色粒をやや含む。内面には貝殻条痕紋が認められる。焼成は良好である。色調は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。

13も、製塩土器である。型式は、丸底Ⅱ式と考えられる。口径は7.0cmで残存高は3.1cmを測る。胎土は密である。内面には貝殻条痕紋が認められる。焼成は良好である。色調は外面が灰白色を呈し、内面は淡灰白色を呈する。

14は、土師器の坏である。口径13.0cm、器高は6.3cmを測る。胎土は密で、直径0.5～2mm大の白色・灰色・褐色砂粒を多く含む。叩き成形の痕跡が体部外面に認められる。調整は、内外面ともにナデ調整を施し、特に口縁部には強いナデを施す。焼成は良好である。底部には黒斑が認められる。色調は、外面が明赤褐色で内面は淡赤褐色を呈し、黒斑は淡茶灰色を呈する。

15は、土師器の甕である。口縁部付近のみ残存している。法量は口径が23cmで残存高は4.5cmを測る。胎土は密であり、直径0.5～2mm大の白色・灰色・褐色砂粒をやや含む。調整は全体的にナデ調整を施しているが、外面の一部には叩き成形痕が残存している。焼成は良好で、外面の一部に黒斑がある。色調は、外面が淡黄褐色で内面は明赤褐色を呈し、黒斑は黒灰色を呈する。

16は、土師器甕の底部である。3ヵ所に穿孔されている。胎土はやや粗く、直径0.5～3mm大の白色・褐色砂粒を多く含む。調整は、一部に粗い刷毛目調整の痕跡が認められる。焼成は良好である。色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。

17は、須恵器蓋のつまみ部である。最大径3.3cmを測り、高さは0.9cmを測る。胎土は緻密である。調整は全体にナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は淡灰青色を呈する。

18は、土師器の小皿である。口径8.8cmで器高は1.5cmを測る。手づくねによって成形されており、全体にナデ調整が施されている。胎土は密で、直径1～5mm大の灰色・褐色砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は、外面が淡黄褐色で内面は淡灰褐色を呈する。底部外面は火を受けており、淡黒褐色を呈している。

以上の遺物を概観すると、1～17は住居址（堅穴住居1）から出土したものであり、その年代観は、概ね5世紀末葉から6世紀前半（須恵器編年のTK23～MT15期）に求められる。よって堅穴住居1の消失した年代は、この頃に求めることができる。また、18の土師器皿はピット49内から出土したものであり、その時期は中世である。

まとめ

西田井遺跡は、紀ノ川北岸の微高地上に立地しており、遺跡が営まれた期間は縄文時代から中世にまでわたる。今回の調査では、主として古墳時代と平安時代の堆積層に多く人間活動の痕跡が残されているのを確認した。

今回の調査で得られた成果のうち、注目すべきものに古墳時代中期に該当する竪穴住居3棟の検出があげられる。これら住居が立地する空間は、当時すぐ西方に海岸線が存在していたと推定でき、紀ノ川の河口部にも近く、海水・汽水・淡水産の魚貝類に恵まれており、また北方には和泉山脈がせまって山地産の食物類にも恵まれていたことであろう。さらに紀ノ川の氾濫原にも近く、その肥沃な土壌は耕地としても利用されていたものと考えられる。このように西田井遺跡は、人間が居住し活動するうえにおいては自然環境的に恵まれた空間にあったのではないだろうか。

西田井遺跡に関係するような周辺の遺跡を眺めてみると、北方に北田井遺跡、西方に田屋遺跡、北東に宇田森遺跡、北西に約3km隔てた地点に六十谷古墳群がある。このうち北田井遺跡は、弥生時代中期のうちでも前半から営まれる大規模な集落遺跡で、この北田井遺跡と西田井遺跡は本来同一集落であった可能性が考えられる。両遺跡は、紀ノ川北岸下流域において中心的位置を占める拠点集落であったと考えられる。また田屋遺跡は、主として古墳時代に営まれた大規模な集落遺跡で、ここからは、全国的に見ても古い段階の造り付け竈をもつ竪穴住居が検出されている。

宇田森遺跡からは、弥生時代中期の竪穴住居・土坑・土壇墓・溝などが多数検出された。六十谷古墳群は、1984・88年の2回にわたる発掘調査の結果、5世紀前葉を中心とした時期に営まれたことがわかった⁽²⁾。

今回確認した遺構は、西田井遺跡・田屋遺跡の初現よりも時期的には降るが、ちょうど両遺跡の隣接部にあたり、検出される遺構・遺物等にも共通性が認められることから、西田井遺跡の集落が古墳時代にはいって拡大したものとも推定できる。

西田井遺跡は、古墳時代中期を中心とした紀ノ川北岸における中心的集落のひとつとして考えられてきた。今回の調査においてもこの期の良好な住居と、それに伴う施設（貯蔵穴・造り付け竈）などを検出することができた。また平安時代後期の小溝群も、規則正しく平行あるいは直交しており、この付近の条里制土地地区画との関係を考えるうえで貴重な資料となるであろう。（木建正宏）

(注1) 和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（1989）

(注2) 和歌山市教育委員会『六十谷古墳群発掘調査報告書』（1991）

3. 和歌山城跡 第3次調査

調査地 和歌山市岡山下4番地

調査面積 30m²

位置と環境

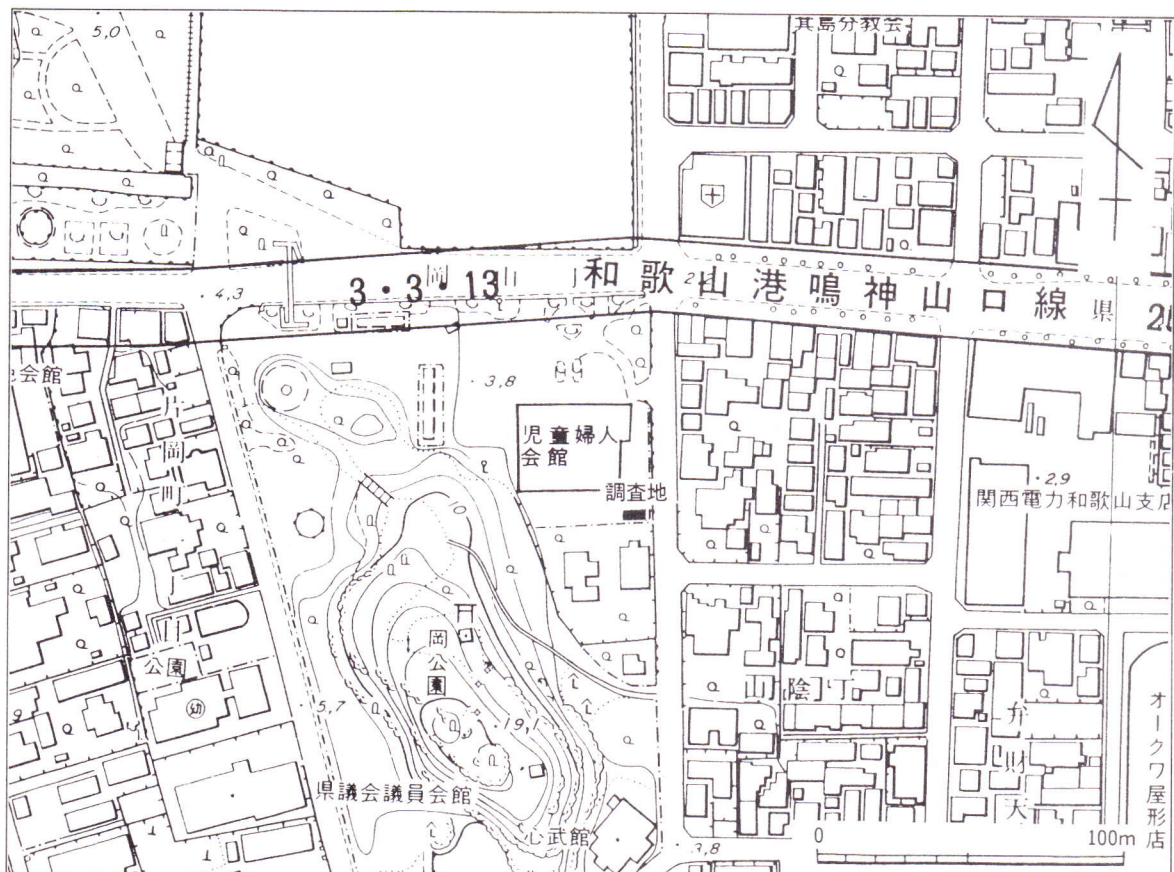
和歌山城は、紀ノ川の河口南岸の小丘(虎伏山)上に位置している。今回の調査地は、国の史跡である和歌山城の南側に近接する和歌山市立児童婦人会館の敷地内に位置する。

この地は、江戸時代の和歌山城を中心とする城下町の一角であり、江戸時代末期に描かれた『和歌山城下町図^(注1)』より百間長屋が存在したとみられる地点である。調査は、当会館の車両専用出入口としてスロープ造成工事が実施されることとなり、この工事に先だてて遺跡の実態を解明し、記録保存が必要となり、実施したものである。

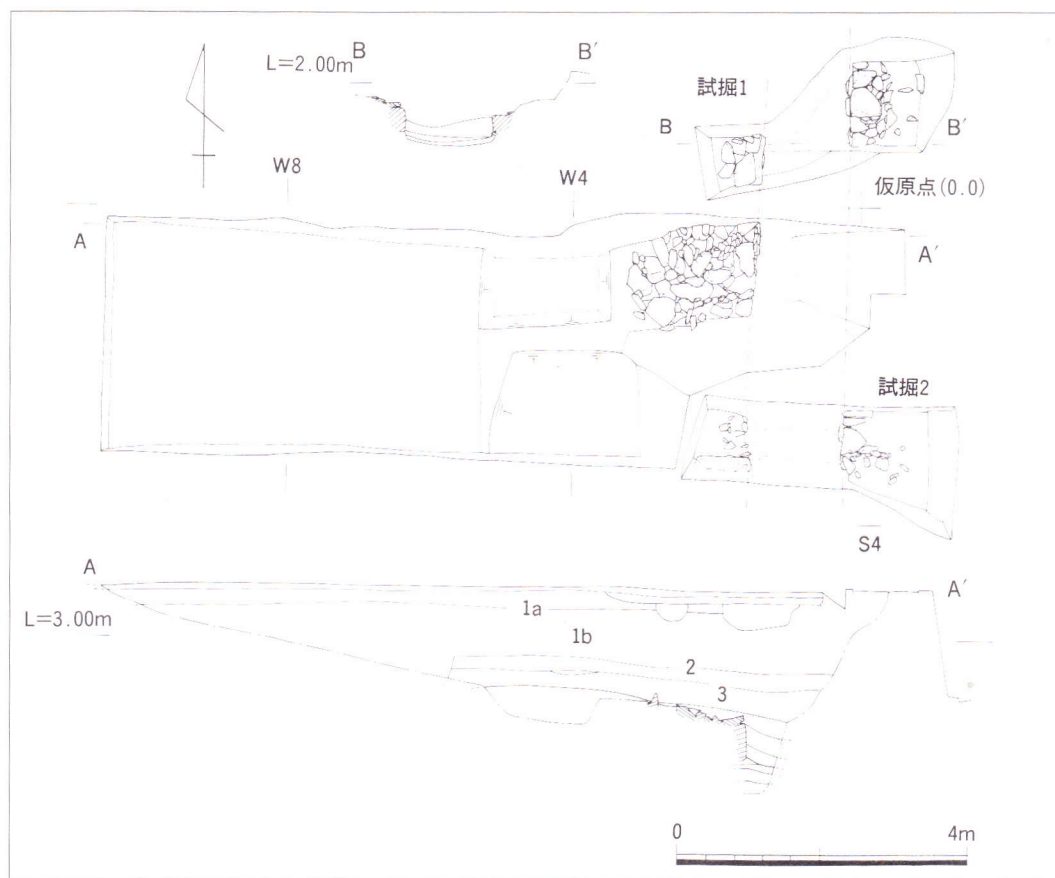
調査の内容

調査は、表土および昭和期の整地層をパワーショベルによって工事計画に基づきスロープ状に掘削した。このため、明治時代以前の堆積層は東側でのみ検出され、この東側を中心に人力掘削によって調査を行った。また、当事業団以外に和歌山市教育委員会が同敷地内で隣接する部分において試掘調査を行っていることから、この調査に同成果を盛り込むこととする。

今回の調査地における堆積(土層)の状況は、大きく3層に分けられる。まず上層の1・2層は、昭和期の堆積であり、戦災の焼土層等がみられた。3層は、厚さ20~40cmを測り、包含されている遺物から明治時代の堆積とみられる。この層の上面において石組遺構を検出している。この3層の



調査位置図



遺構平面図及び断面図

下面において江戸時代の石垣を検出した。石垣面の石材は約30～80cm大の和泉砂岩と緑色片岩を巧みに組み合わせ積み上げている。石垣の高さは80cm以上を測り、裏込め石は緑色片岩を用いている。この石垣は、教育委員会の試掘調査より幅1.2mを測る石組みの溝であることが確認されている。

まとめ

今回の調査範囲は小規模であっ



石垣検出状況

たため遺跡の実態を明確にすることはできなかった。しかし、調査区東端において江戸時代の石垣を検出することができ、また試掘調査より石組みの溝であることが明確となった。この江戸時代に構築されたとみられる石組み溝は、江戸時代後期に描かれた『紀伊国名所図會』^(注2)では百間長屋とみられる建物を区画する石垣が描かれ、さらに石垣直下に溝が配されている状況が得られる。このことから、今回の調査で検出した石組み溝は、絵図に描かれたものであると考えられる。(井馬好英)

(注1) 紙本着色 野際蔡真画 安政2年(1855)

(注2) 紙本墨刷 岩瀬広隆他画 和綴本 文化8年(1811)～嘉永4年(1851)

4. なるかみ 鳴神IV遺跡 第5次発掘調査

調査地 和歌山市鳴神960-1他

調査面積 4m²

位置と環境

鳴神IV遺跡は、岩橋千塚古墳群の所在する岩橋丘陵の西側の平地に立地する遺跡である。和歌山県教育委員会による昭和52～54年の国道24号バイパス工事に伴う発掘調査の際には、古墳時代の前期の溝、中期とみられる方形竪穴住居・井戸、平安時代後期の自然流路等が検出されている。^(注1) また、和歌山市教育委員会関係の調査として第1～4次調査が実施され、古墳時代後期の溝・土坑、平安時代の遺物を多く出土する地点が確認されている。^(注2) 今回、遺跡推定範囲の中央部付近での個人住宅の建築計画に対処するため、確認調査を実施した。

調査内容

幅0.6m、長さ7mのトレンチを南北方向に設定し、調査を行った。地表から約20cmは整地土であり、その下層には厚さ20cm程度の旧耕作土、厚さ5cmの床土がみられた。床土の下には厚さ10～20cmの灰褐色砂質土の遺物包含層が確認され、須恵器、土師器、製塩土器が出土した。トレンチの中央よりやや南側では、包含層下面において直径2m前後、検出面からの深さ約50cmの円形もしくは楕円形の土坑の一部が確認された。炭混じりの灰茶褐色砂質土を埋土とするこの土坑からは、須恵器、土師器のほか製塩土器や土錘も出土した。

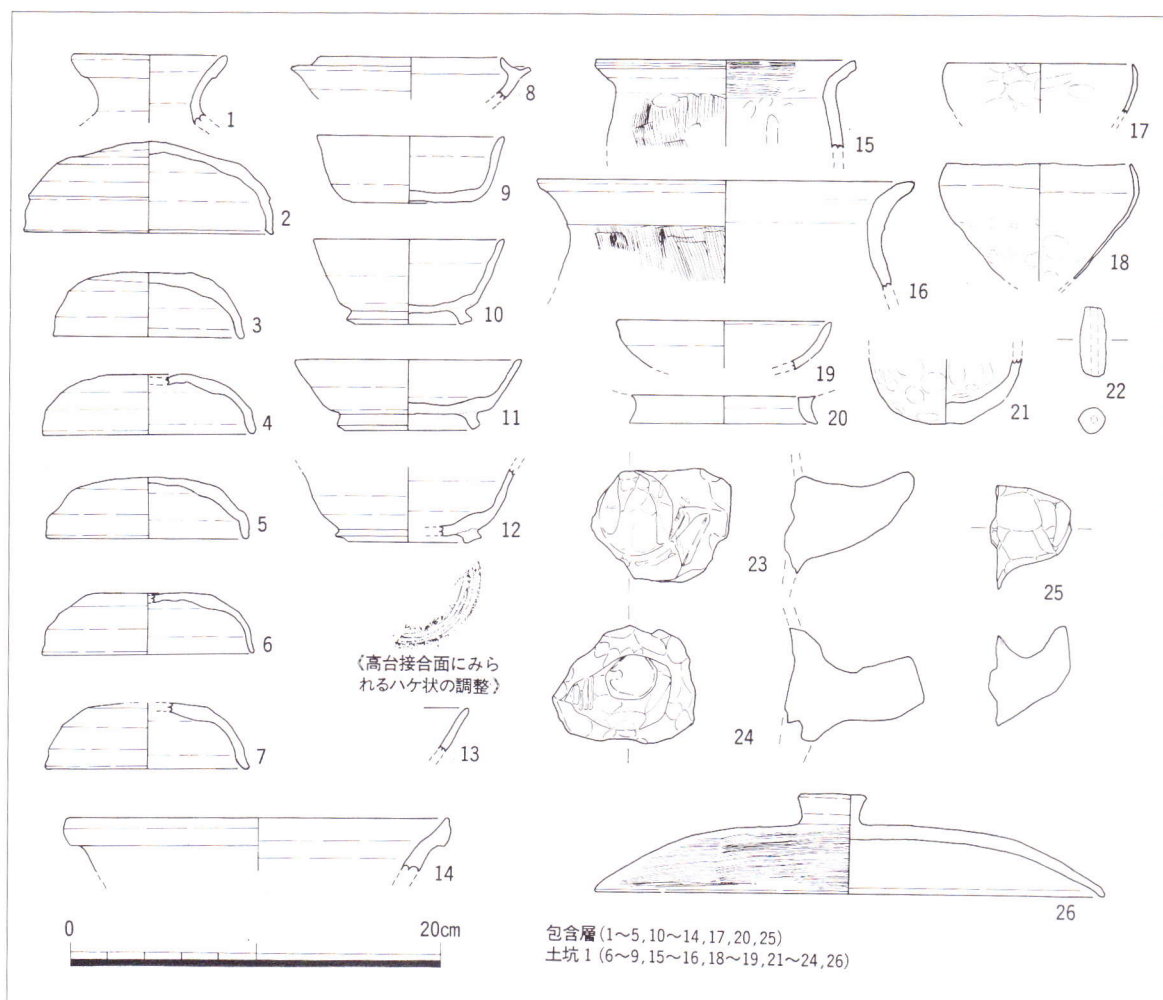
出土遺物のうち1～14は須恵器で、1は提瓶、2～12は杯、13は高杯、14は甕である。杯蓋の大半が淡灰色で焼成のあまいものであることが特徴的である。12の底面には高台接合面にハケメ状の調整



調査位置図



調査区（南から）



遺物実測図

が観察された。15・16は土師器甕、17・18は製塩土器、19・20は土師器杯、21は土師器の小型壺、22は土鍾、23~25は土師器把手、26は土師器蓋である。時期の判明するものとしては、1・2が6世紀中葉前後、3~8は6世紀後半から7世紀前半、9~12は7世紀中頃から7世紀第3四半紀、26は8世紀後半と推定される。24は5世紀代、23・25は6~7世紀、17・18は7世紀代の所産であろうか。

まとめ

調査により古墳時代後期から奈良時代の包含層と土坑1基が確認された。土坑1は、円形もしくは楕円形の大振りな形態であり、性格は不明であるが、遺物を多く包含していた。土坑内の堆積は、土層や遺物よりみて、層位的に期間をおいて堆積したものではなく、一気に堆積したものと判断された。包含層の形成時期がある程度限定されることよりみても、調査地点の近接地に当該時期の居住区が存在する可能性が高い。

(前田敬彦)

(注1) 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会(1984)

(注2) 「11.鳴神IV遺跡発掘調査」「12.鳴神IV遺跡第2次・鳴神V遺跡第1次調査」「20.鳴神IV遺跡第3次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』(財)和歌山市文化体育振興事業団(1992)

「1.鳴神IV遺跡第4次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報2』(財)和歌山市文化体育振興事業団(1994)

5. ^{ひらお}平尾遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市平尾

調査面積 320m²

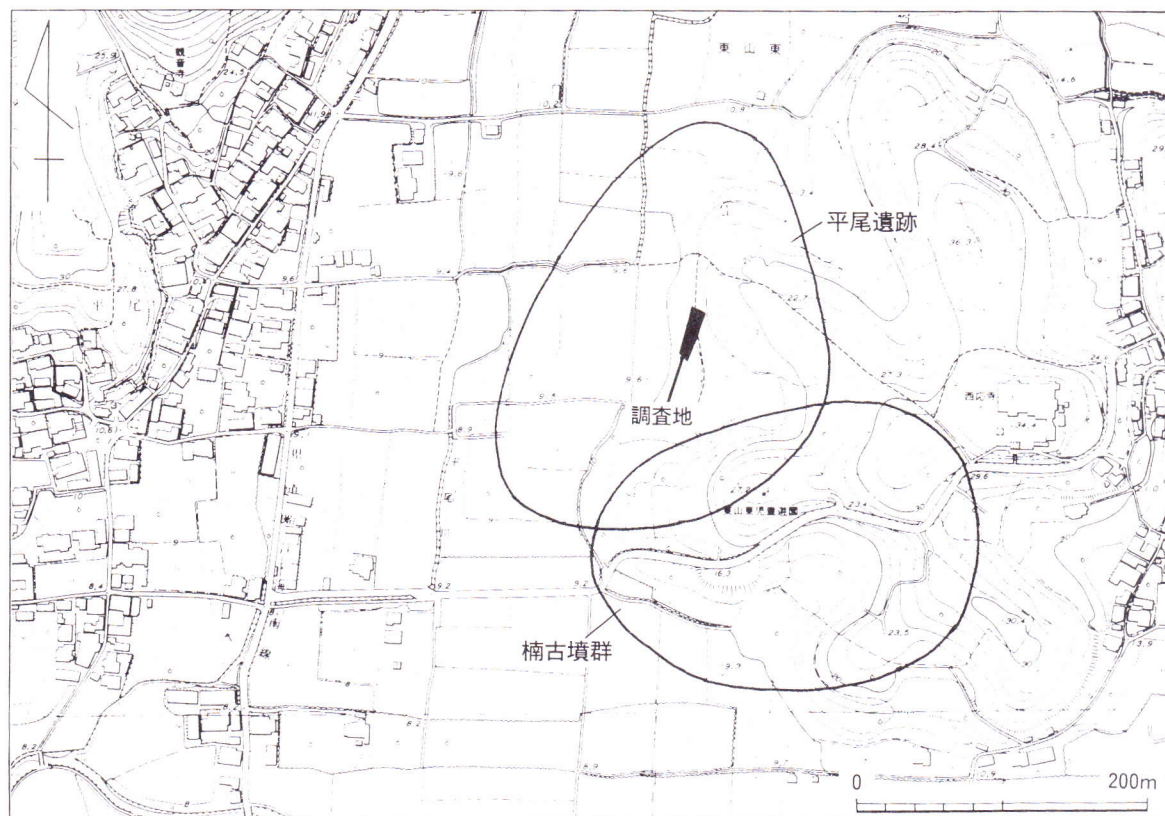
位置と環境

遺跡の立地する紀ノ川南岸では、紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野部の南端を取り囲む形で竜門山脈から派生したいくつかの丘陵が断続的に存在する。平尾遺跡はその和歌山県和歌山市平尾字芝崎に所在する新発見の古墳時代の集落遺跡である。平尾地区は竜門山系の独立丘陵中の盆地にあり、本遺跡は丘陵の麓、盆地との境に立地する。

古墳時代には遺跡の周辺では岩橋古墳群をはじめとする古墳群が、四方を取り囲むようにして数多く営まれる。岩橋千塚古墳群は標高約200mの丘陵上にあり、中期から後期にかけて連綿として築造される。総数約700基にも及び、そのほとんどが横穴式石室であり独自の石室構造をもつものである。これまでに、平尾地区周辺では古墳が多く確認されていたが、古墳時代の明確な集落遺構は確認されていなかった。



調査地近景(西から)



調査位置図

調査内容

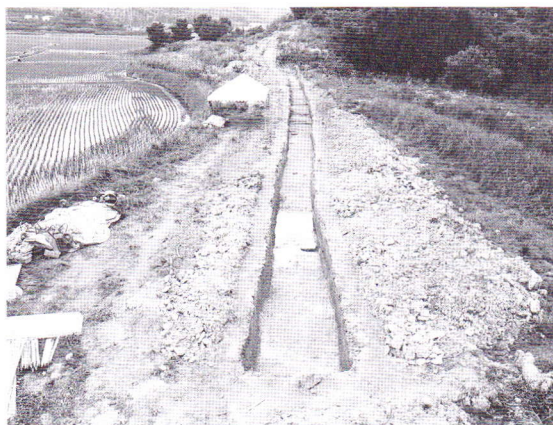
調査の便宜上、調査地の南側には幅約2m、延長40mのトレンチ調査区(A区)を設け、遺構の特に濃密であった北側には幅約8m、延長30mの調査区(B区)を設けて南側から順次行った。

A区で検出した遺構は、まずA区のほぼ中央より南側に位置する谷地形があり、ここに存在した溝状遺構を溝1としたが、本来谷地形に存在した自然流路であったものが、古墳時代に溝の役割を果たしていたものとみられる。この溝の堆積は、細かく数層にも分けられたが、主として上層は暗灰色を主体とする粘土層で埋没し、下層は黒灰色粘土と淡灰黄色礫層が相互する状況が得られた。また出土した遺物から上層には中世の瓦器が含まれているが、下層は古墳時代の遺物だけであり、この土層堆積状況から溝1は古墳時代に機能していたものがそれ以降徐々に埋まり、中世に完全埋没したことを推定できる。

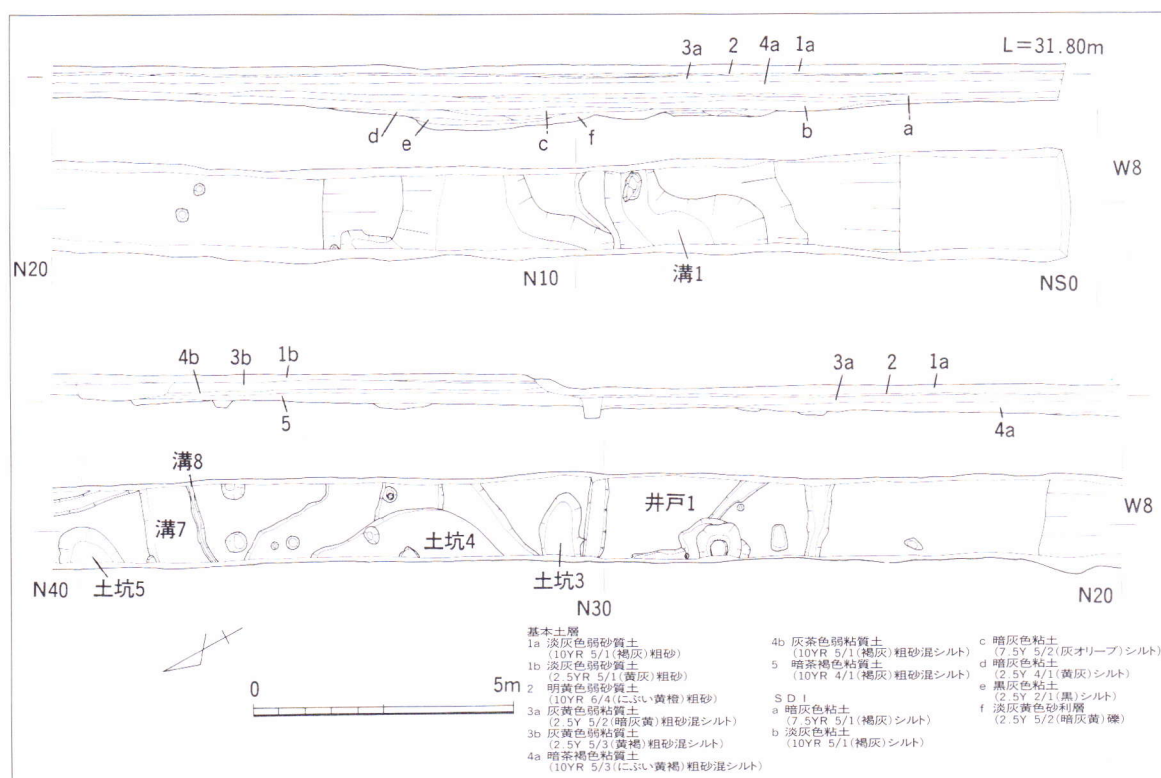
次に中世の遺構では井戸1がある。この遺構は検出面より約70cm掘り込まれ、底部に桶を埋設していた痕跡が残る。

B区は試掘調査の結果、遺構が集中するとみられた地点である。この調査区は北東側から南西に向け傾斜をもった地形を成している。

検出遺構はほとんどが古墳時代のものであり、中でも中心的な遺構は竪穴住居跡である。竪穴住居はすべて方形のプランを呈するもので、古墳時代中期から後期にかけてのものが13棟検出された。竪穴住居以外の遺構では、溝状の遺構やピットが多く検出され、中でもピットには出土遺物や重複



A区全景(南から)



A区遺構全体実測図

から古墳時代のものと平安時代のものがある。

竪穴住居1は調査区の北西隅で検出したもので比較的多くの遺物を包含している。この住居は壁溝をもたないタイプのもので、支柱穴は深さ5cmを測る浅いものである。

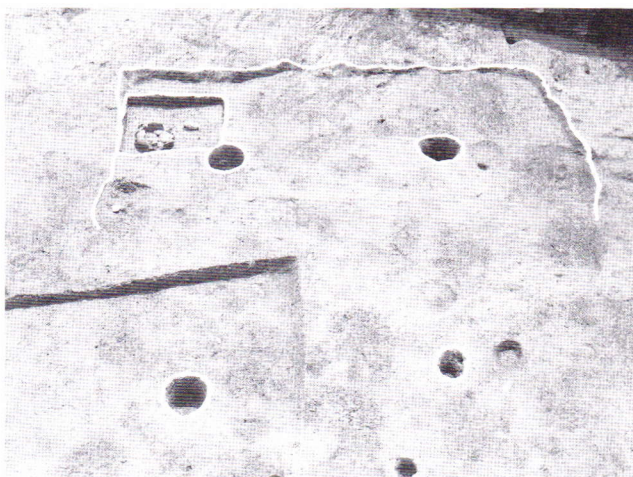
竪穴住居2は調査区ほぼ中央部で検出した竪穴住居である。住居中央から西半部の床面が削平のため失われており、正確な規模は不明であるが、南北4mを測り、深さ約35cmを測る4本の支柱穴をもち、壁溝をもたないものである。また、北壁のほぼ中央には造り付けのカマドがみられ、カマドはドーム状になるとみられる上部が削平を受け基底部が残存している。カマドの内部は焼土及び炭が多く含まれている。今回の調査で検出した明確なカマドはこの住居の一基だけである。カマドの東側には95cm×80cmの方形を呈した貯蔵穴があり、この貯蔵穴から完形の須恵器横瓶が出土した。

竪穴住居3は、竪穴住居2・4・5・7・8とそれぞれ重なりをもち、なおかつ竪穴住居3bの拡張と考えられる。この住居は、一辺4.6m強の規模を測り、壁溝は周壁に沿って全周する。また、東端と西端の床面の比高差が約25cmもあって床面がかなり傾斜している。この住居では支柱穴がみられず、またカマドや床面における明確な焼土は検出できなかった。竪穴住居3bは竪穴住居3の床面において検出された住居であり、一辺3.3m前後の比較的小さな住居で、その方向性等から竪穴住居3の拡張以前の住居とみられる。壁溝が全周し、床面がほぼ同様の傾斜をもつ。支柱穴は4本であり、床面からの深さは4cm前後と極めて浅い。この住居においても明確なカマドは検出できなかったが、東壁周溝の内側床面には焼土溜まりを検出した。竪穴住居4は、竪穴住居3・3bと重なりをもち、その重なりからこれらの住居より古い時期のものである。東西が3.8mを測るとみられ、西辺部は削平のため不明である。支柱穴は北東隅部分に確認できたが、この柱穴においても深さ8cmと浅いものである。また、壁溝や柱穴からは炭が多く出土していることから焼失家屋の可能性が考えられる。

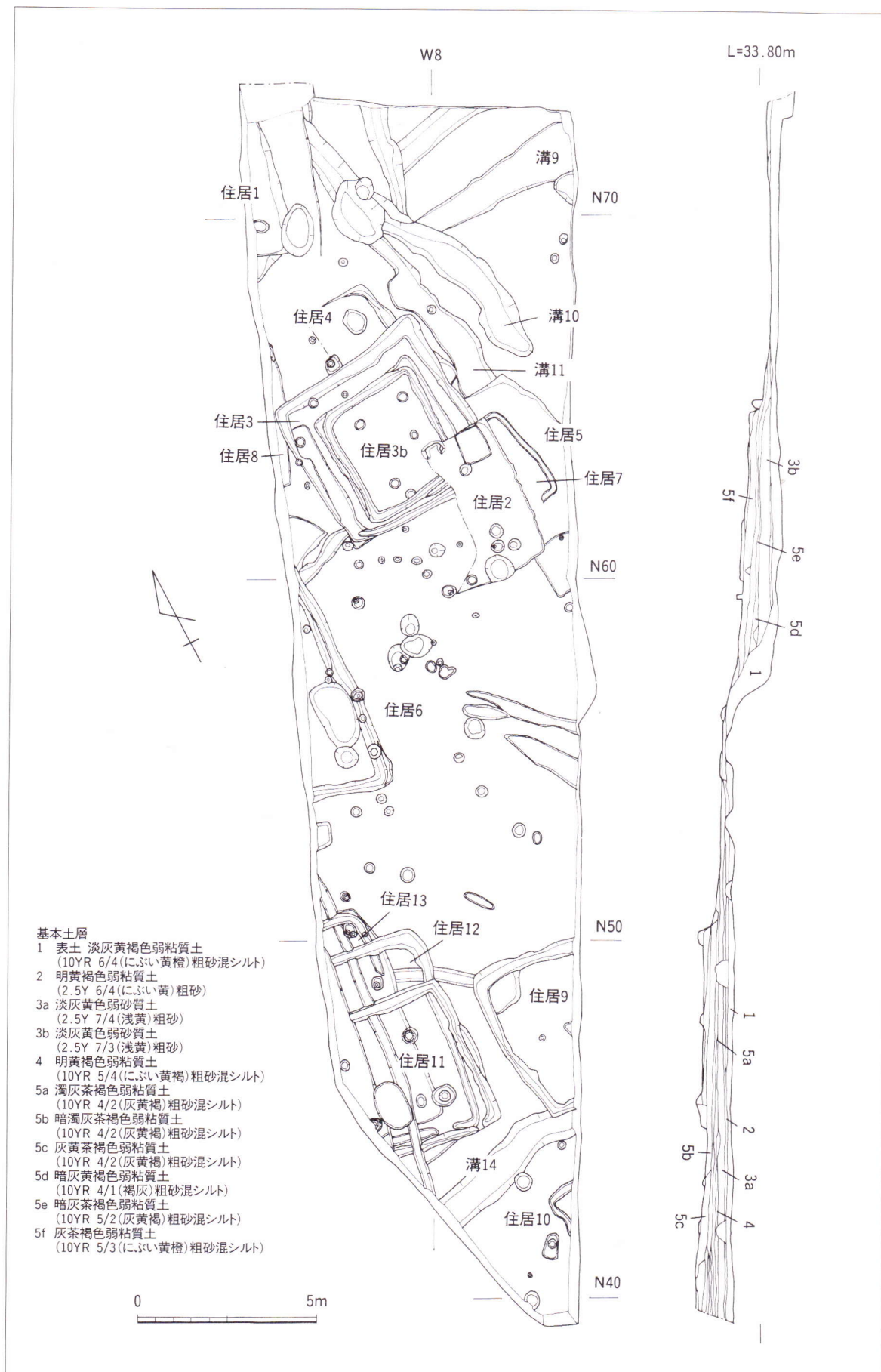
竪穴住居5・7は竪穴住居2の東側で検出した竪穴住居である。竪穴住居5は残存している東壁が調査区外に至るため正確な全体の規模を探るのは不可能であるが、竪穴住居2に切られている方形の土坑がその覆土と方向性からSB5の貯蔵穴であることが推察でき、この貯蔵穴が南壁直下に構築されていると仮定すると南北が6mの規模をもつものと考えられる。竪穴住居7は竪穴住居5の内側に検出できたもので壁溝が残存する。この壁溝から住居の東壁は3m程



B区全景（北から）



B区（竪穴住居2）（西から）



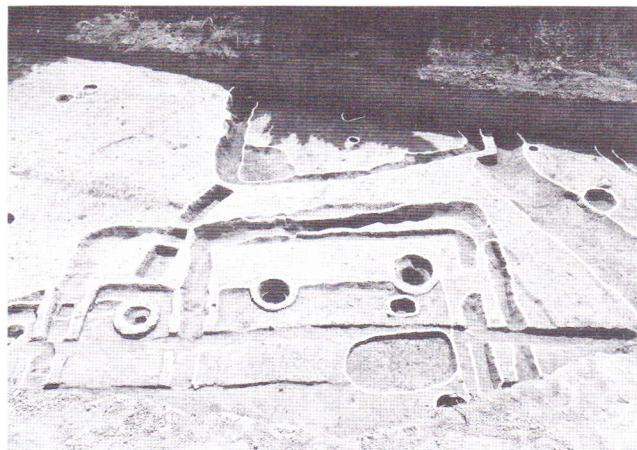
B区遺構全体実測図

度を測る。

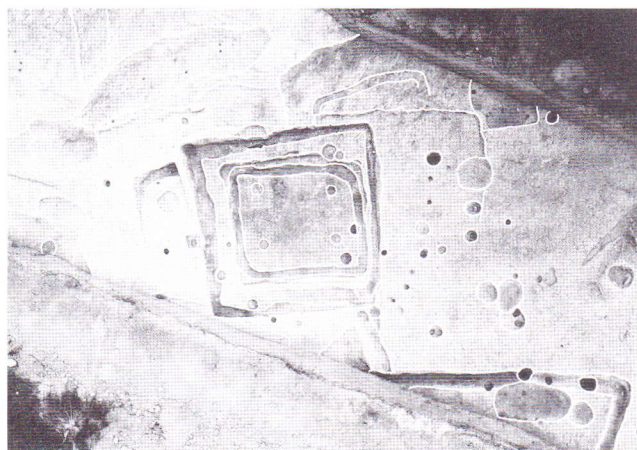
竪穴住居 6 は調査区ほぼ中央の西壁付近で検出したもので、南北は6m以上の規模を測る。検出面から床面までの深さは約10cmと浅く、灰茶褐色粘質土によって埋まる。また、壁溝は比較的深く床面から20cm程掘り込まれている。住居南東の支柱穴は径約60cmを測り、深さは床面から10cmである。柱穴の北側には南北1.9m、東西1mの楕円形を呈した深さ20cmの貯蔵穴を検出した。

竪穴住居 9 は南北4.5mを測るものである。南西隅部分に一辺1m強深さ15cmの貯蔵穴をもつ。また床面は平滑で表面が固く締まっている。

竪穴住居11～13住居は調査区西端で検出したものであり、それぞれに重複する。これらの住居は検出面から床面までの深さは10cm以内であった。竪穴住居11は3棟の中では最も新しい住居で、床面に4本の支柱穴を検出した。支柱穴の深さは比較的深く、床面より40cm程度掘り込まれている。壁溝は約30cmの幅をもち残存部ではほぼ全周し一辺4.4m強の規模を測る。竪穴住居12は竪穴住居11の下面において検出した住居である。検出した2本の支柱穴から本来4本柱の住居であることが考えられ、その規模は一辺5.8mを測る。この住居の支柱穴の深さは、竪穴住居11住居より浅く、床面より20cmまでである。竪穴住居13は、東壁で判断するならば一辺が6mをこえる規模の大きい住居である。この住居の壁溝は東壁の一部と北壁に検出できたが、他は検出できず南壁に取り付く状況で貯蔵穴が確認できた。貯蔵穴は、南北1.3m、東西0.8mの楕円形を呈し、その底部は平滑で残存する床面から15cmの深さを測る。



B区 竪穴住居3周辺（左が北西）



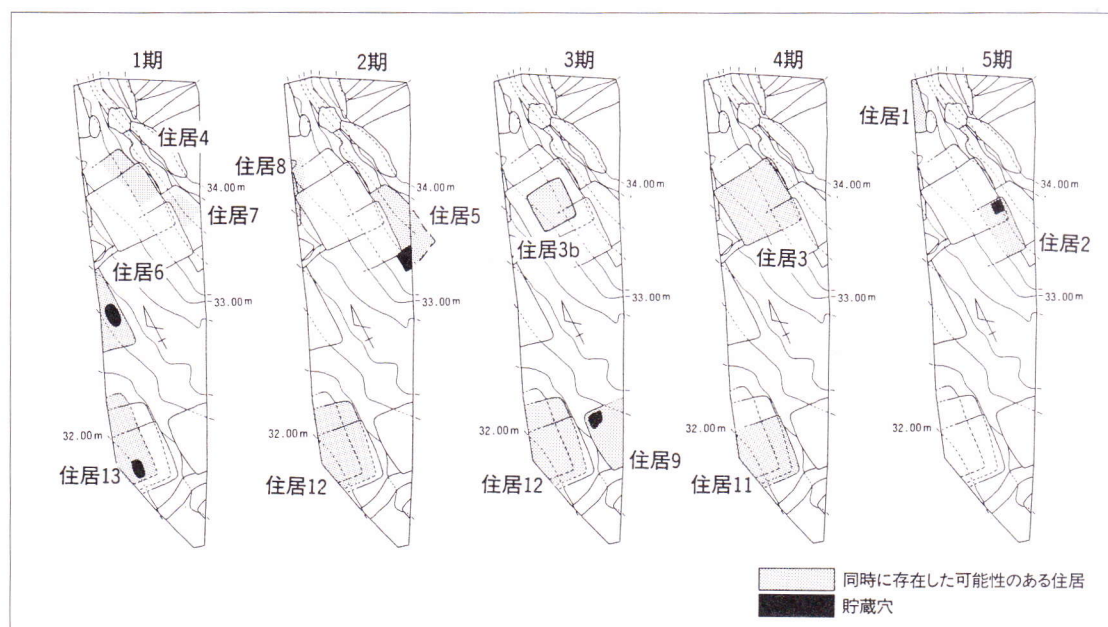
B区 竪穴住居11周辺（左が北西）

まとめ

今回の調査で、最大の成果は竪穴式住居14棟からなる古墳時代の集落を検出できたことである。

竪穴住居跡は、B区においてやや不明確なものを含め14棟を検出した。これらの住居の平面形は方形のプランを呈するもので、一辺の規模が2.9～6.2mの範囲である。住居の主軸は磁北からおおむね10°以内の振りの方向に収まることから、竪穴住居の方向性は東側に展開する丘陵の地形的な制約を受けたものと考えられる。住居はその切り合い関係から住居4・7⇒住居5⇒住居3b・3⇒住居2、住居8⇒住居3、住居13⇒住居12⇒住居11の新旧順位を確認することができる。住居3b⇒住居3は住居の拡張とみられ、住居13⇒住居12⇒住居11の変遷は住居の建て替えであると考えられる。

次に出土遺物から竪穴住居の時期を考える。遺物はTK23～MT15型式並行期の須恵器などが住居



平尾遺跡における竪穴住居の変遷推定図

跡覆土から出土している。これらの遺物の時期から竪穴住居群は5世紀末から6世紀前半の集落であると考えられる。住居6からはTK23型式、住居3b・5はTK23～TK47型式、住居3・9はTK47型式、住居1・2からはMT15型式にそれぞれ併行する須恵器が出土した。

以上、住居の遺構切り合いの検討からの新旧関係、及び住居跡覆土出土遺物の年代観から平尾遺跡における竪穴住居の変遷を5期に設定し以下説明する。なお、各期の設定は須恵器の型式に対応させるならば、1期をTK23型式併行期のやや古い段階(5C末)、2期をTK23型式併行期(5C末～6C初)、3期をTK23～TK47型式併行期(6C初)、4期をTK47型式併行期(6C前のやや新しい時期)、5期をMT15型式併行期(6C前)と考えた。

1期は住居4・6・7・13の4棟が考えられ、住居の面積規模は大小差が著しい。全ての住居は壁溝を巡らし、住居4・6は支柱穴をもつ。2期は住居5・8・12の3棟が考えられる。住居12のみ壁溝・支柱穴をもつ。3期は住居3b・9及び住居12の3棟が考えられる。住居12は2期から引き続き建っていたとみられる。住居3b・9共に壁溝を巡らす。住居3bは支柱穴をもつ。4期は住居3・11の2棟が考えられる。住居3・11共に壁溝を巡らし、住居11は支柱穴をもつ。5期は住居1・2の2棟が考えられる。双方とも壁溝は無く、支柱穴をもち、住居の面積規模は近似する。

検出した平尾遺跡の古墳時代中期後半～後期前半の集落について、竪穴住居は標高34.00～31.80mの間で丘陵縁辺部の地形に沿って展開することが確認された。和歌山市教育委員会の試掘成果及び現況の周辺地形で等高線を追うならば、北側の急傾斜と南側の谷状地形に掘削されたSD-1に挟まれた南北約80m、東西約15mの集落面積約1200㎡の範囲を推定することができる。

以上、平尾遺跡で検出した古墳時代中期後半～後期前半の竪穴住居及び集落について報告したが、和歌山平野においては当概時期の古墳時代集落は余りみつかっておらず、貴重な資料を得ることができた。遺跡周辺では平尾遺跡の東に隣接し展開する楠古墳群と当調査において検出した古墳時代の集落との関係が重要であり、今後注意が必要であろう。(北野隆亮)

参考文献

『平尾遺跡 ―市道矢田平尾建設に伴う調査報告―』(財)和歌山市文化体育振興事業団(1994)

6. 鷺ノ森遺跡 第5次調査

調査地 和歌山市鷺ノ森2

調査面積 225m²

位置と環境

鷺ノ森遺跡は、和歌山市鷺ノ森周辺に所在する中世末期に創建された本願寺別院鷺森御坊および近世和歌山城下町の遺構を中心とした遺跡である。^(注1)

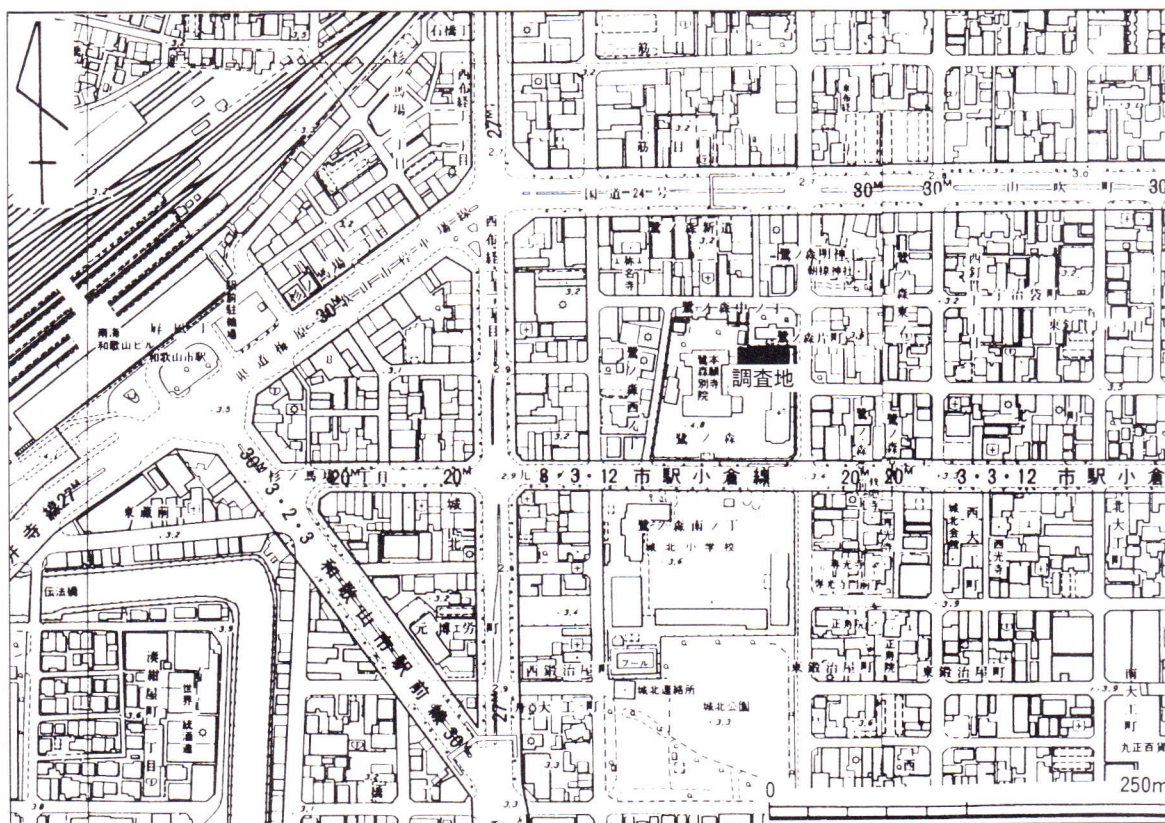
今回の調査地点である鷺ノ森御坊（本願寺跡）は、永禄6年（1563）に浄土真宗の御坊として開創されたのにはじまり、以後天正8年（1580）には本願寺となって真宗教団の中心的役割を果たした。天正11年（1583）に本願寺が貝塚に移された後も、この御坊は本願寺別院となり、寛文4年（1664）には輪番がおかれ、紀州真宗教団の中心寺院として現在に至っている。

調査内容

(1) 基本層序

鷺ノ森遺跡第5次調査地点における基本的な土層の堆積状況は以下のとおりである。

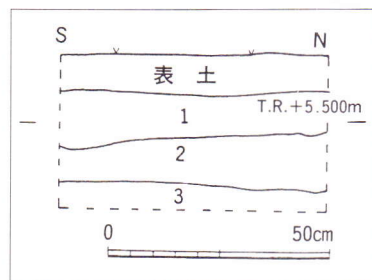
なお堆積層の土色および出土物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠り、土壌の粒径区分に関しては地質学的区分を参考に、馬頭大、人頭大、拳大の礫・大礫・中礫・小礫・細礫・極粗粒砂・粗粒砂・中粒砂・細粒砂・極細粒砂・シルト・粘土の区分を単独又は複数の組み合わせによって表現した。



A区遺構全体実測図

基本層序

- 表 土 第二次世界大戦後の堆積層。
- 第1層 にぶい黄褐色（5 Y R 6 / 4）粗粒砂から細粒砂。
和歌山大空襲による焼土。
- 第2層 灰オリーブ色（5 Y 4 / 2）細粒砂（粗粒砂を多く含む）。第1遺構面のベース層。江戸時代中期以降に堆積。
- 第3層 灰白色（5 Y 7 / 2）細粒砂（細礫を多く含む）。第2遺構面のベース層。江戸時代中期以前に堆積。



基本層序

(2) 検出遺構

遺構面は、第Ⅰ区において2面、第Ⅱ区においては1面を確認した。以下地区別に記述する。

第Ⅰ区

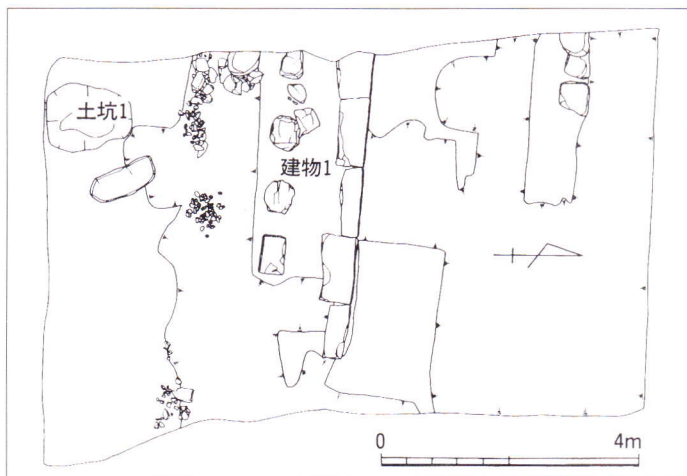
第1遺構面

〔建物Ⅰ〕 東西3間以上、南北1間以上の建物で、1間の平均距離は礎石中心間で約1.0m（3尺）を測る。建物の北側は廂または縁をもつと推定できる。

この建物は、高さ33cm（1尺）の基壇上に構築されている。基壇の北辺には、長辺1.0m、短辺60～20cm、高さ33cm（1尺）の規模をもつ砂岩の切石を東西方向に並べて基壇縁石としている。建物の礎石は2種に分類できる。まず上述の基壇縁石から南へ約90cm（3尺）の地点に、縁石に平行して4基の緑色片岩の礎石列がある。規模は約50×30cmで矩形を呈し、割石を用いている。この礎石列は、その規模から廂または縁の束柱をうけるものと推定できる。建物本体の主柱をうける礎石は、調査区西端の基壇縁石から南へ約1.8m（1間＝6尺）の地点で1基確認した。直径は約50cmで、石材は砂岩である。この礎石を据えるために、砂岩の割石を根石としてもちいている。

基壇内部の土層は1層のみで、版築がおこなわれた状況ではない。色調は灰オリーブ色（5 Y 5 / 3）を呈し、粒径は主として細粒砂で極粗粒砂から中粒砂を多く含んでいる。

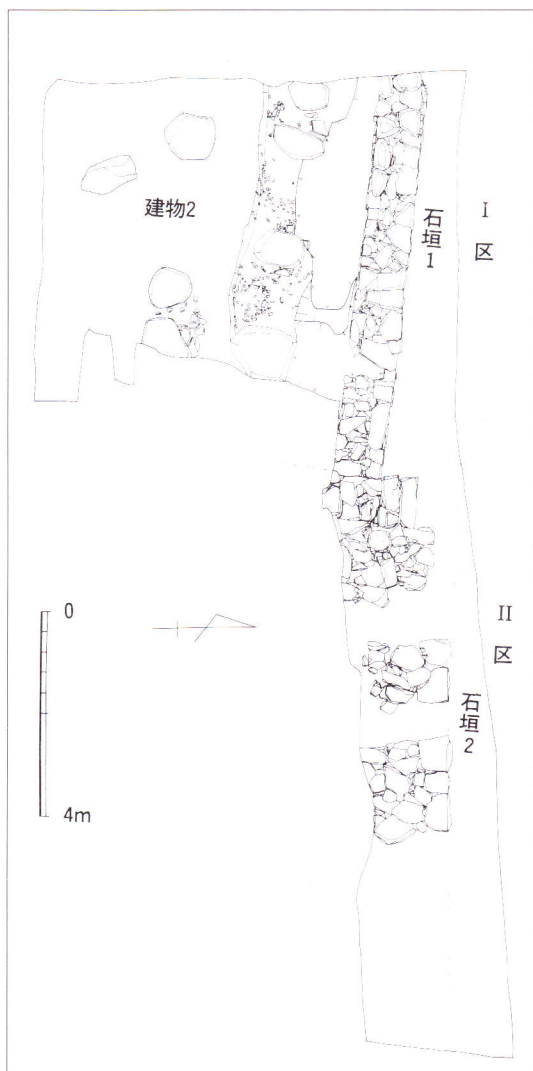
以上の基壇縁石・礎石群・基壇土は、



第Ⅰ区 第1遺構面実測図



第Ⅰ区 第1遺構面完掘状況（東から）



第2遺構面実測図

上面が全て熱を受けて焼けており、遺構を覆っている堆積層が昭和20年の空襲による焼土であることから、この建物は昭和20年に焼失した対面所であると考えられる。

〔土坑1〕 直径約1.1m、深さ約20cmを測る。埋土は5層にわかれる。まず最初に、にぶい黄色(2.5Y 6/4)を呈する中礫混りの粗粒砂混細粒砂が堆積し、その後に灰色(5Y 5/1)の細粒砂混シルト、にぶい黄色(2.5Y 6/4)を呈する炭混じりのシルト混細粒砂、灰色(5Y 5/1)細粒砂混シルトが堆積して、最後に黄褐色(2.5Y 5/3)を呈する炭・焼土混じりの中粒砂混極細粒砂(基本層序第1層と類似)が堆積した。

この遺構の廃絶時期も、焼土が最後の段階で堆積していることから、昭和20年頃と考えられる。

第2遺構面

〔建物2〕 東西2間以上、南北1間以上の建物で、1間の平均距離は礎石中心間で約1.8m(1間=6尺)を測る。

礎石は全て砂岩製で8基確認した。うち5基は原位置を保っていると考えられる。その直径は平均70cmである。

検出できたこの建物の基壇は、高さ約16cmである。

しかし基壇外周の化粧石がすでに失われており、第1遺構面が形成される段階か、それ以前に削平をうけている。当初はもう少し比高差があったと考えられる。

〔溝1・2〕 建物2の礎石を据えるために設けられた溝で、東西方向にならんで2条確認した。規模は幅・深さともに約1.0m(3尺)を測る。これら溝の埋土は、溝1が灰オリーブ色(5Y 6/2)を呈する細粒砂で、溝2は、オリーブ褐色(2.5Y 4/3)を呈するシルト混細粒砂である。いずれの溝も人頭大の礫から中礫を非常に多く含んでいる。このうち溝1内から江戸時代中期(18世紀前半)の染付碗の細片2点が出土した。



第I区 第2遺構面完掘状況(東から)

2)を呈する細粒砂で、溝2は、オリーブ褐色(2.5Y 4/3)を呈するシルト混細粒砂である。いずれの溝も人頭大の礫から中礫を非常に多く含んでいる。このうち溝1内から江戸時代中期(18世紀前半)の染付碗の細片2点が出土した。

以上のことから、この溝は江戸時代中期のものと考えられ、したがって建物2が構築されたのはこの頃と推定で

きる。そうすると建物2は江戸時代中期の享保8年(1723)3月に御堂が^(注2)再建され、それまでの旧御堂を対面所に改めたとする鷺森御坊の「本堂再興記」の記述に一致する。

〔石垣1〕 鷺森御坊旧敷地の北端を示す石垣である。この石垣は第Ⅰ区北端で検出したが調査地外にまで延びる。検出した総延長は5.7mで、残存高は最高所で1.5mを測り、幅は1.1mである。主軸はN-60°-Eを示し、和歌山城下町の形成時に行なわれた地割(ほぼ磁針の示す方位に一致)以前の中世段階の地割を示すものと考えられる。

石垣の東端(ちょうど第Ⅰ区と第Ⅱ区との境界)は面をもっており、その一部で階段状に石材が組み込まれているのを確認した。階段の痕跡である可能性が考えられる。そうすると石垣1は、この階段状の部分で南に折れ曲がり、南進する可能性も考えなければならない。後述する石垣2は、この階段状部分に取り付くようにあとから構築され、石垣1を東へ延長しているものである。

石垣1を形成している石材は、緑色片岩の偏平な割石であるが、後の時代(おそらく第1遺構面の形成された時期かそれより以降)にさらに積み上げられており、この時点で用いられた石材は砂岩および花崗岩の丸石で、明確にその差異を認めることができる。

第Ⅱ区

第1遺構面

〔石垣2〕 第2区は、鷺森幼稚園旧園舎の基礎で遺構面以下にまで全面にわたって、大規模な攪乱を受けている。この石垣2は、頑強な造りであったためか、かろうじて攪乱からのがれて検出できたものである。

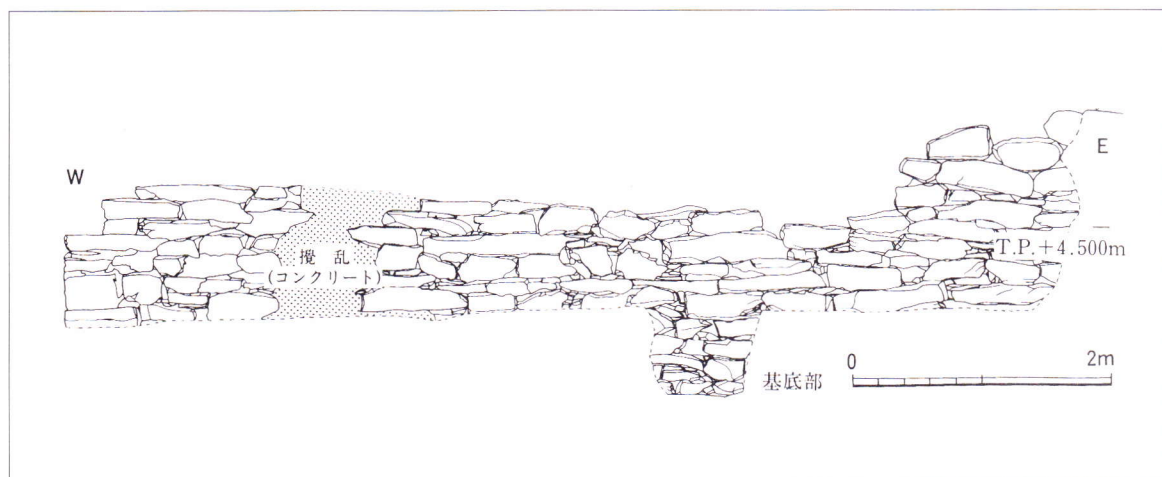
規模は東西方向の総延長が約15mで幅1.6m以上、残存高は最高所で92cmを測る。主軸はN-55°-Eを示し石垣1の方向性とは若干相違する。しかし和歌山城下町に伴う地割がほぼ磁針の方位に一致していることから、この石垣2も中世段階の地割を踏襲していると考えられる。

石垣に用いられた石材は、北側の化粧石に砂岩の切石が使用され、裏込めには片岩の割石が用いられている。

時期は、大規模な攪乱によって近世初頭から現代にまで及ぶ遺物が混在した状況で出土するため特定しがたいが、第Ⅰ区第1遺構面に対応するものと思われる。

(3) 下層の状況

第Ⅰ区第2遺構面の調査終了後に下層を確認するためのトレンチを設定した。その結果第2遺構



石垣1 北面実測図



第Ⅰ・Ⅱ区 石垣完掘状況（西から）

面以下の堆積は、人工的な粘土混細粒砂と細礫混中粒砂層の薄い互層を呈していることがわかった。第2遺構面の時期を享保8年（1723）と考えると、この土盛りが行なわれたのは「鷺森田事記」や「本堂再興記」の記す天正2年（1574）の造作以降で享保8年以前^{（注3）}ということも考えられる。

（4）出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち図化できたものの概略について述べる。

1は陶器の燈明皿である。口径10.3cm、底径2.9cm、器高は2.0cmを測る。胎土は緻密である。釉薬は内面のみ施されており、外面は素地土のままである。色調は外面が明灰黄色を呈し、内面は明黄灰色を呈する。内外面の口縁端部には煤が付着している。時期は近世のものと考えられる。

2は、陶器の燈明皿である。口径8.6cm、底径3.1cmで器高は1.8cmを測る。胎土は緻密である。釉薬は内面全域と外面口縁端部に施す。色調は、施釉部分が淡黄白色で、素地土は淡黄灰色を呈する。内外面の口縁端部には煤が付着している。時期は近世のものと考えられる。

3は、陶器の燈明皿である。口径10.4cm、底径4.2cm、器高は2.3cmを測る。胎土は緻密である。釉薬は内面全域と外面上部3分の1の範囲に施す。色調は、施釉部分が淡灰緑色を呈し、素地土の部分は明灰白色を呈する。時期は近世のものと考えられる。

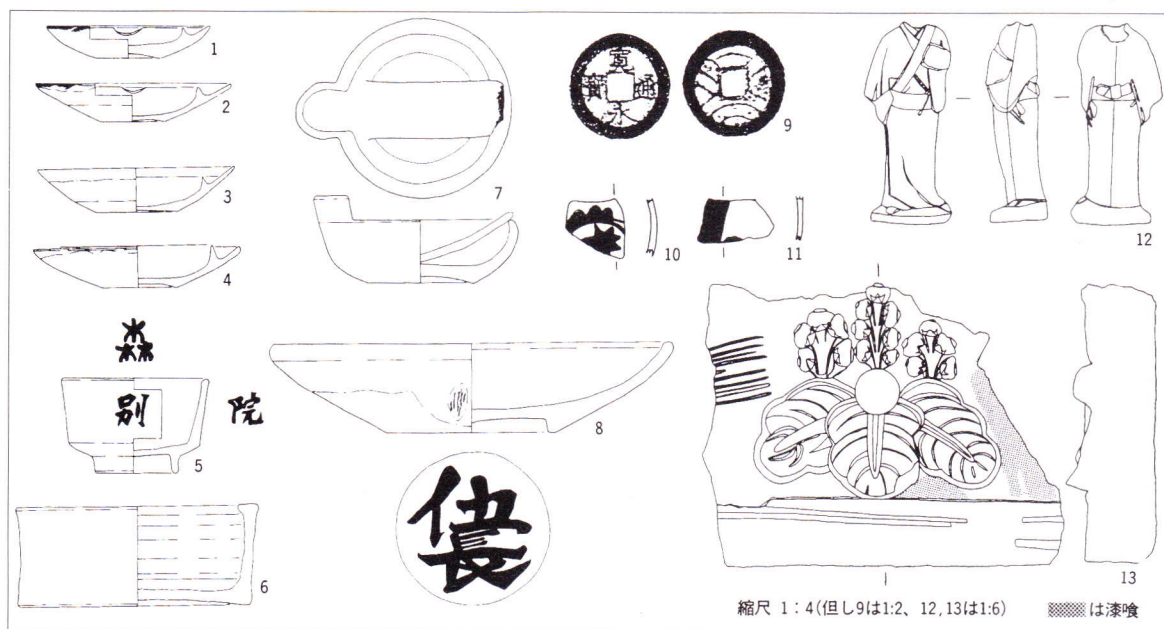
4は、陶器の燈明皿である。口径10.9cm、底径3.9cmで器高は2.2cmを測る。胎土は緻密である。釉薬は内面のみ施されており、外面は素地土のままである。色調は、外面が暗黄褐色を呈し、内面は暗緑褐色を呈する。時期は近世のものと考えられる。

5は、陶器の碗である。口径7.5cmで底径は4.2cmを測る。器高は5.0cmであるが、うち高台部分が0.9cmを占める。釉薬は高台部分を除いて全面に施されている。色調は、施釉部分が淡乳白色を呈し、素地土部分は淡黄灰色を呈する。施釉前に淡灰青色の呉須で内面見込部に「森」、外面に「別院」と記す。時期は幕末から近代にかけてのものと考えられる。

6は備前焼の茶器（建水）である。口径12.7cm、で器高は5.3cmを測る。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈する。時期は近世のものと考えられる。

7は陶器の燈明皿である。口径10.2cmで、器高は3.7cmを測る。燈芯を据える部分はスロープ状に作っており、その先端には煤が付着している。胎土は密である。焼成は良好で、色調は外面が淡灰褐色を呈し内面は灰白色を呈する。時期は近世のものと考えられる。

8は陶器の皿である。口径21.0cm、底径8.5cmで器高は4.7cmを測る。胎土は密であり、その中に径0.5から2mm大の白色砂粒を多く含む。釉薬は内面全域と外面上半部に施し、外面下半部は素地土のままである。焼成は良好である。色調は施釉部分が淡黄褐色を呈し、素地土部分は明黄灰色を呈する。外面には施釉時における製作者の指頭圧痕とこれに伴う釉の乱れが認められる。底部外面に墨書で「伍長」と記されている。時期は近代にはいつてからのものと考えられる。



遺物実測図

9は銭貨である。種類は寛永通宝である。直径2.8cm、内区径は2.1cmを測る。裏面には十一の波紋を施している。このことから、四文銭であることがわかる。字体の特徴等から、明和6（1769）年、江戸深川千田新田で鑄造されたものに類似する。

10・11は肥前系染付磁器の破片である。溝1から出土した。ともに淡青灰色の呉須によって紋様を描く。細片であるために、紋様全体の図案は不明である。時期は、18世紀前半と推定できる。

12は、侍を象った土人形である。頸部より上位を欠く。残存高15.8cm、最大幅は6.3cmで厚みは3.9cmを測る。中空である。焼成は良好で、色調は淡灰褐色を呈する。時期は近世と考えられる。

13は鬼瓦である。瓦当面に桐紋を表わす。法量は、残存高22.2cm、残存幅26.8cmで厚みは7.2cmを測る。胎土は密である。焼成は良好で、色調は瓦当面が暗灰色を呈し、裏面は暗灰白色を呈する。瓦当面の一部に漆喰が付着している。時期は近世のものと考えられる。

まとめ

今回の調査においては、第Ⅰ区第1遺構面で昭和20年の空襲で焼失した対面所の遺構と焼土を確認することができた。また第2遺構面では、享保8年の建立と考えられる対面所の遺構と寺域の北限を示す石垣（石垣1）を検出することができた。この御坊の範囲を示す遺構は、今回の調査で初めて確認できたものである。この石垣は、先述のように和歌山城下町の地割には一致せず、それよりも古い中世段階の地割を示すと考えられる。

第Ⅱ区における石垣2も、方向的にはほぼ中世の地割を踏襲するもので、この石垣は昭和20年の空襲まで存在したようである。

（木建正宏）

（注1） 和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（1989）

（注2） 『和歌山市史』第1巻「自然・原始・古代・中世」（1991）

（注3） 注2文献に同じ

参考文献

『鷲森本願寺の歴史と寺宝』（1990年度春季特別展図録）和歌山市立博物館（1990）

7. 和歌山城跡 第4次調査

調査地 和歌山市十二番丁

調査面積 60m²

位置と環境

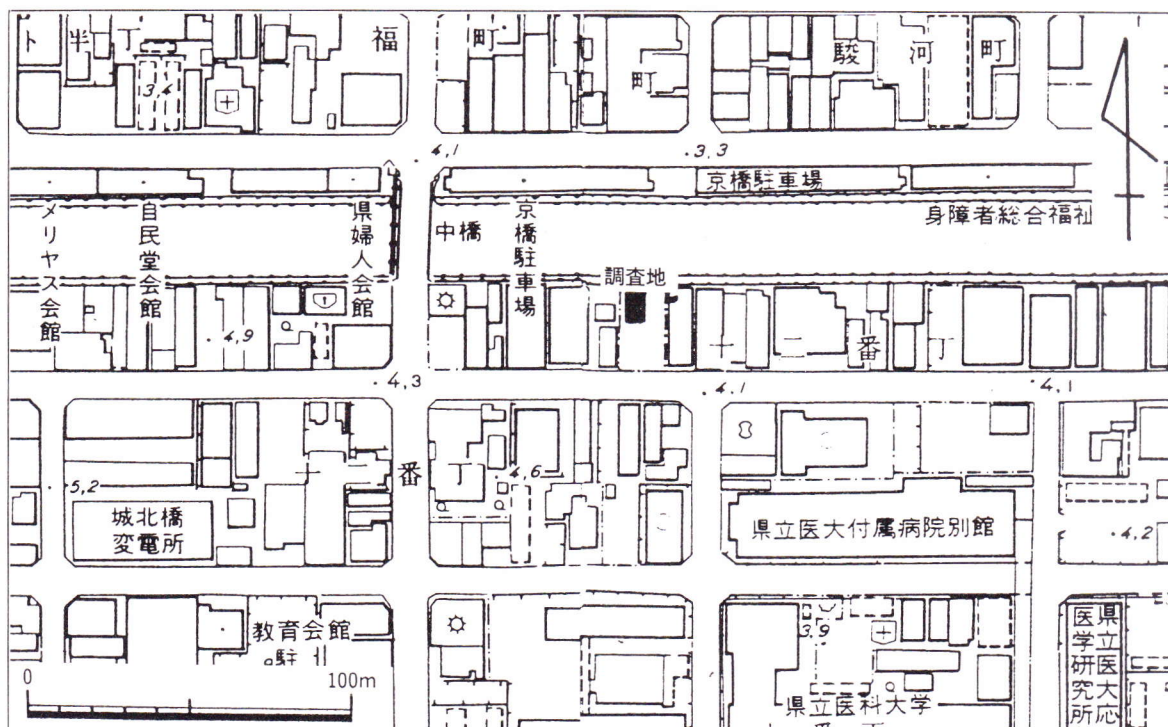
調査地は、紀ノ川河口部から約3km上流の南岸に位置し、独立丘陵である若山を中心に範囲をもつ和歌山城跡に相当する。また特に調査地は、和歌山城北方の防御と水運のために、紀ノ川と和歌川を人工的に開削した市堀川の南岸にあたり、武家屋敷が建ち並ぶ三の丸跡として重要な地域である。現況は駐車場であり、現在の地表の標高は4.5mを測る。

調査内容

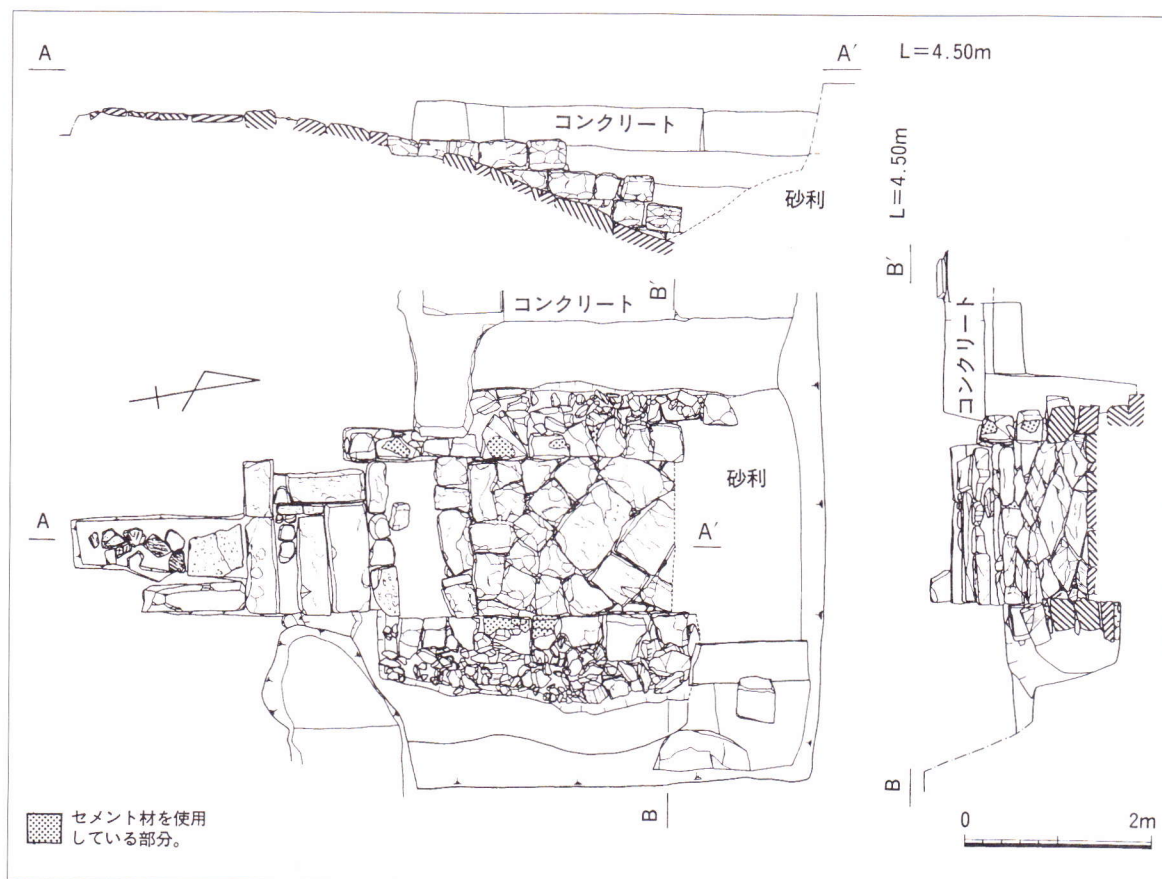
今回検出できた主な遺構は、明治時代以降、戦前までのものであり、調査地の北方を西流する市堀川に向かってスロープ状に下降する石敷および、それに伴う石垣（以下、石敷遺構という）と、礎石建物1棟である。

石敷遺構は調査区の北半部で検出したもので、1.8mの幅で石敷が構築され、その両側に石垣がとりつくものである。石敷は、21°の傾斜をもつスロープの部分と平坦部分とにわかれ、また石の組み方も異なる。スロープの部分では、下半分には60×80cmの巨石を、上半分には40×40cmの正方形の石材を使用し、斜格子状に積みあげ目地が対角をなす。石材の材質はほとんどが砂岩であり、目地の隙間には緑色片岩の割石やセメント材を使用している。平坦部分においては約40×120cmの砂岩を横長に配列した部分と、20×20cmの小振りの砂岩を使用した部分がある。石垣は一部削平されているものの、約30×50cmの砂岩によって1から4段に積み上げている。

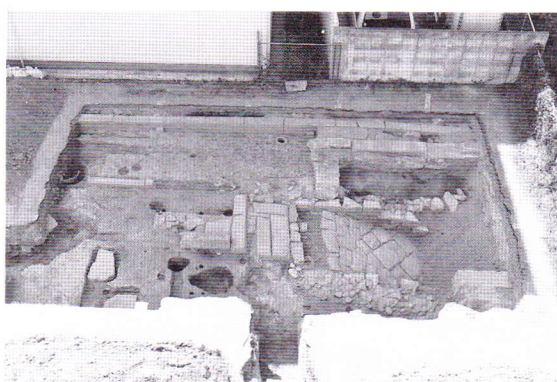
礎石建物は、約20cm程の高さをもつ基壇上に構築されたものであり、その東辺を検出している。基壇には約20×130cmの砂岩製の縁石が伴い、それに平行して東側には20cm四方の礎石が2つ並ぶ。



調査位置図



石敷遺構実測図



調査区全景（東から）



石敷遺構（北東から）

庇もしくは縁のつく建物とみられる。これは石敷遺構以前に構築されたものである。

まとめ

近世において和歌山城三の丸として栄えたこの地域も、明治維新以降、武家屋敷一帯はさびれてゆき、近代化とともに次第に商家が建ち並んでいったとみられる。おそらく石敷遺構は、市堀川の水運を利用し、そういった物資の上げ下ろしを行うためにつくられたものと考えられる。また、近世の遺物が若干出土しているものの、近世の遺構を検出することができなかったが、調査地が三の丸の範囲の北限にあたるためとみられる。幕末までのこの地域の様子は、絵図等から伺い知ることができるが、それ以降昭和に至るまでの状況は意外に明らかにされていない。今回の調査では、それを知り得る一資料を得たといえる。

（栗本美香）

8. 友田町^{ともだちょう}遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市友田町4-71

調査面積 24m²

位置と環境

調査対象地は、JR和歌山駅の西北約300mの市街地の一角であり、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（平成元年、和歌山県教育委員会）による奈良時代の「吉田窯跡」の近接地に該当する。今回、対象地に個人住宅が建築されることとなったため、確認調査を実施した。後述するように、調査の結果、窯跡とは別の古墳時代後期の遺構が検出されたことにより、新規発見の「友田町遺跡」として取り扱うこととし、届出を行なった。

調査内容

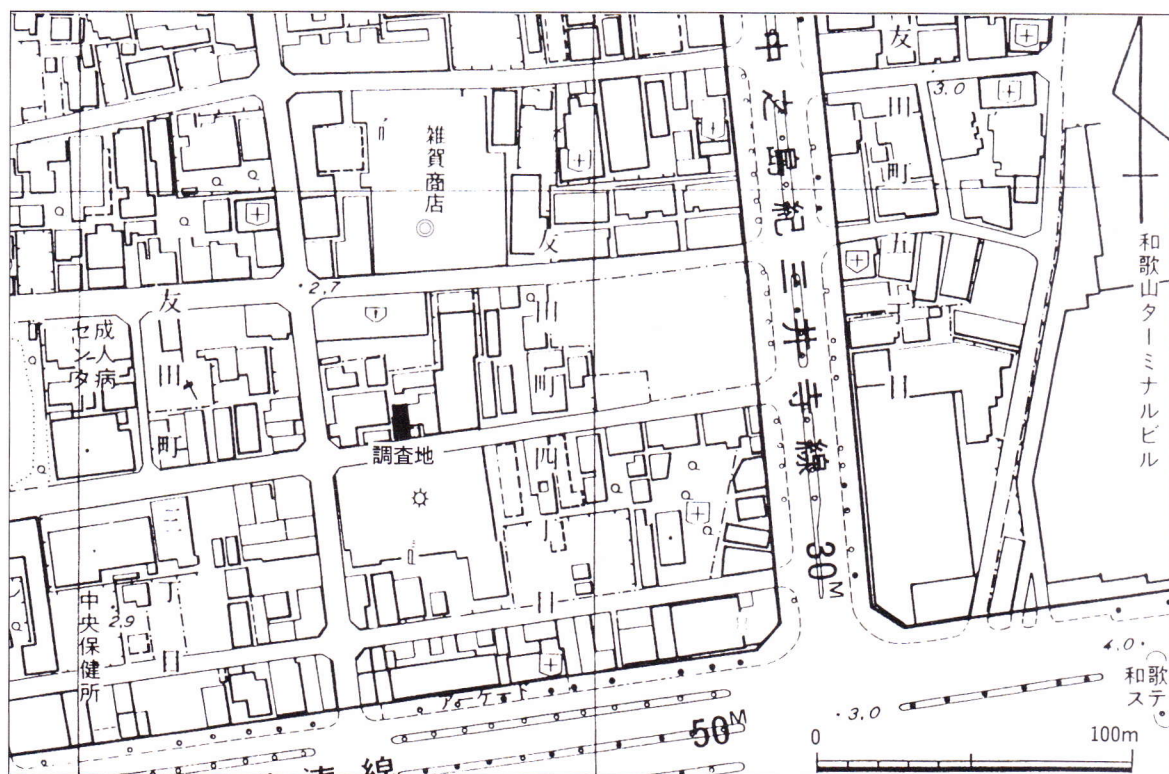
建物基礎の工事予定地に、2m×2mのトレンチを6ヶ所に設定し、調査を実施した。

(1) トレンチ1～2、4～6

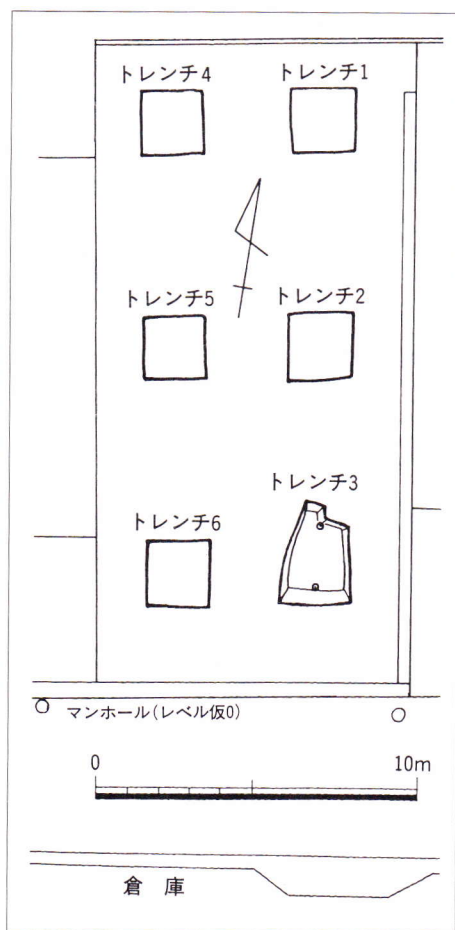
地表から50～60cmの掘削であったが、いずれも30～40cm程度の盛土や近代以降の瓦片、スレート、石炭がらを包含する攪乱土坑が確認されたのみであり、遺構面は確認されなかった。

(2) トレンチ3

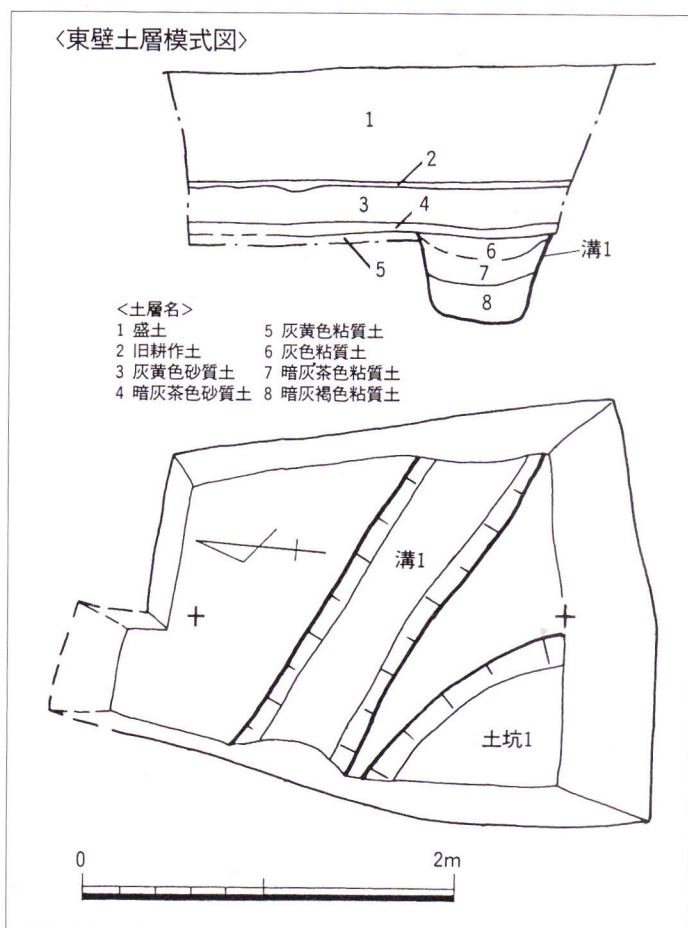
掘削が深く及ぶ可能性があったため、地表から60cm以下まで掘削を進め、遺構の調査を行った。基本土層としては5層からなる。1層は厚さ60cm前後の盛土、2層は厚さ3cm前後の旧耕作土、3層は厚さ20cm前後の灰黄色砂質土、4層は厚さ4～5cmの暗灰茶色砂質土、5層は灰黄色粘質土からなる。2層の旧耕作土が極端に薄いのは、後世の削平によるものであり、本来は20cm前後はあったものと推定



調査位置図（◎印は昭和5、9年の土器出土の推定地）



調査地区配置図



トレンチ3 実測図

される。3層は、ほとんど遺物を含まない灰黄色系の堆積土であり、根拠は乏しいが中世以降の水田耕作に伴う床上げにより形成された土層であると推定された。4層は、古墳時代から平安時代までの遺物包含層であり、無遺物層とみられる5層の上面が遺構面となる。今回、特に絶対高を求めているが、地図等によると周囲の道路面の標高は2.7m前後とみられることから、遺構面の標高は1.8～1.9mであるとみられた。

検出された遺構は、溝と土坑である。溝1は、調査区の南東から北西方向に斜めに横切るように検出された。溝の幅は約60cmで、検出面からの深さは40cm前後である。溝の断面形は逆台形を呈しており、溝の幅の割には深い形態をとる。溝底面のレベルは、わずかに西端が1～2cm程度低い傾向が観察された。溝の埋土は、3層に分層され、上層は厚さ10cm程度の灰色粘質土、中層は厚さ10cm程度の暗灰茶色粘質土、下層は厚さ20cm程度の暗灰褐色粘質土が堆積していた。上層には土器の細片が多く、中層にはやや大振りの土器が検出され、下層にはほとんど遺物がみられなかった。

土坑1は、調査区の南西隅で検出された浅い土坑状遺構である。灰褐色系の埋土をもつが、遺物は検出されなかった。

遺物は、包含層と遺構より出土した。溝1からは須恵器(1～6、8・9)と土師器(10・13)が出土している。1・2は口径が14～14.5cmの杯蓋であり、2～6は口径が11～13cmの杯身である。2の蓋の口縁端部内面には擬凹線状のくぼみ部をもつ。杯身に関しては、口径が13cm前後で器高の低いグループ(3・4)と口径が11～12cmの小振りのグループ(5・6)に分かれる。8は甕の口縁部で、頸部外面にへう状工



溝1 検出状況（東から）



調査区東壁土層（溝1断面）

が、左上がりもしくは横方向のミガキと思われる調整がみられる。19は内外面に炭素の吸着がみられる黒色土器B類であり、内面に幅1～3mmのミガキ調整がみられる。

出土土器よりみて、溝1の埋没年代は、田辺編年のTK209型式、中村編年の2-6段階に相当し、6世紀末～7世紀前半頃とみられ、遺構の検出状況よりみて土坑1もほぼ同時期の埋没と推定される。最終的に包含層が形成されたのは、平安時代のことであったろう。

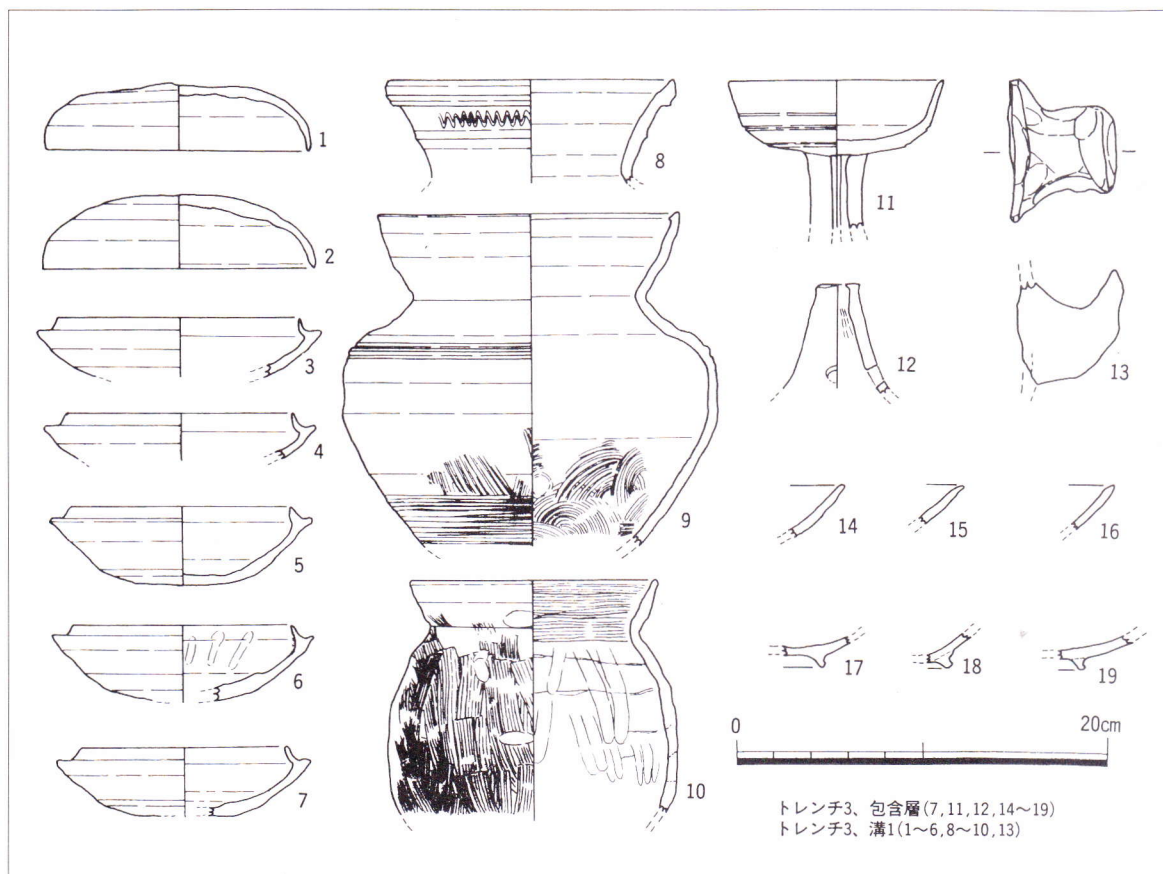
まとめ

奈良時代の窯跡の近接地での調査であったが、窯に係る遺構・遺物の出土は確認されず、予想外の古墳時代後期の溝等を確認した。岩西忠一氏の昭和10年の報告によると、昭和5年と昭和9年に今回の調査地の北約50～100mの地点（報告文よりみて調査地位置図◎印付近と推定される）で家屋建築の際の掘削により、「土師器」が多量に出土したことが知られる^(注1)。出土レベルは、地表から約

具による波状文が施文される。内外面には自然釉が観察されるが、特に内面には釉薬が垂れるようになっている。

9は口縁の内湾する壺で、胴肩部に2条の凹線がみられ、胴下半はタタキのちカキメ状の調整が施される。10は甕で、胴外面はタテハケ（5～6条/cm）、胴内面には明瞭に幅1.5cmの粘土紐の接合痕が観察される。口縁内面はヨコハケにより調整される。13は鍋の把手と見られ、赤褐色を呈する。

包含層の4層よりは、須恵器（7・11）・土師器（12・14～18）・黒色土器（19）が確認される。7の杯身は口径11cmである。11は長脚二段透かしをもつとみられる高杯であり、杯部の内外面には自然釉が観察される。12は高杯の脚部であり、裾部には円形透かしがみられる。14～16は杯の口縁部であり、14・15の外面には強い凹線による段がみられる。17・18は杯の底部であり貼り付けによる高台をもつ。17には確実に片岩の砂粒が観察される。16の内面は磨滅している



遺物実測図

20~70cm下層の、淡褐色粘土と黒色粘土の間よりの出土が多いとされる。図版に掲載された土器をみるとおそらく「土師器」とされたものは多条の凹線文により飾られた垂下口縁部をもつ広口壺の破片であり、第IV様式を中心とする時期の弥生土器と判断される。他に橢描直線文をもつ胴部片で、粘土を逆U字形に貼り付けた破片もみられる。「須恵器」は、口縁部が大きく開く形態の甕がみられ、古墳時代後期の6世紀後半~末頃の所産であり、今回の溝1出土の遺物群と近い時期のものである。

よって、本遺跡は、現在までの知見によると、弥生時代中期、古墳時代後期、平安時代にその存続時期が認められ、特に古墳時代後期の時期に遺跡としての発展がうかがわれることとなる。なお、前記の岩西氏は、土師器が木炭層と同じ層位で確認されたことにより「土器製作地」として報告しているが、出土土器に弥生土器と須恵器がみられる点や窯跡関連の遺構・遺物が確認されていない点、およびその立地等より判断して集落遺跡の性格をもつものと考えるのが妥当とみられる。

JR和歌山駅の東側には、弥生時代に始まる大規模遺跡である太田・黒田遺跡が展開しているが、太田・黒田遺跡の西側約500mに別の弥生・古墳時代遺跡が存在していることとなり、それらの関係も今後の検討課題となる。市街地内の遺跡として今後、十分注意が必要である。(前田敬彦)

(注1) 岩西忠一「土器製作地」『和歌山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第14号、和歌山県(1935)

9. ^{なるかみ}鳴神IV遺跡 第6次調査

調査地 和歌山市鳴神

調査面積 520m²

位置と環境

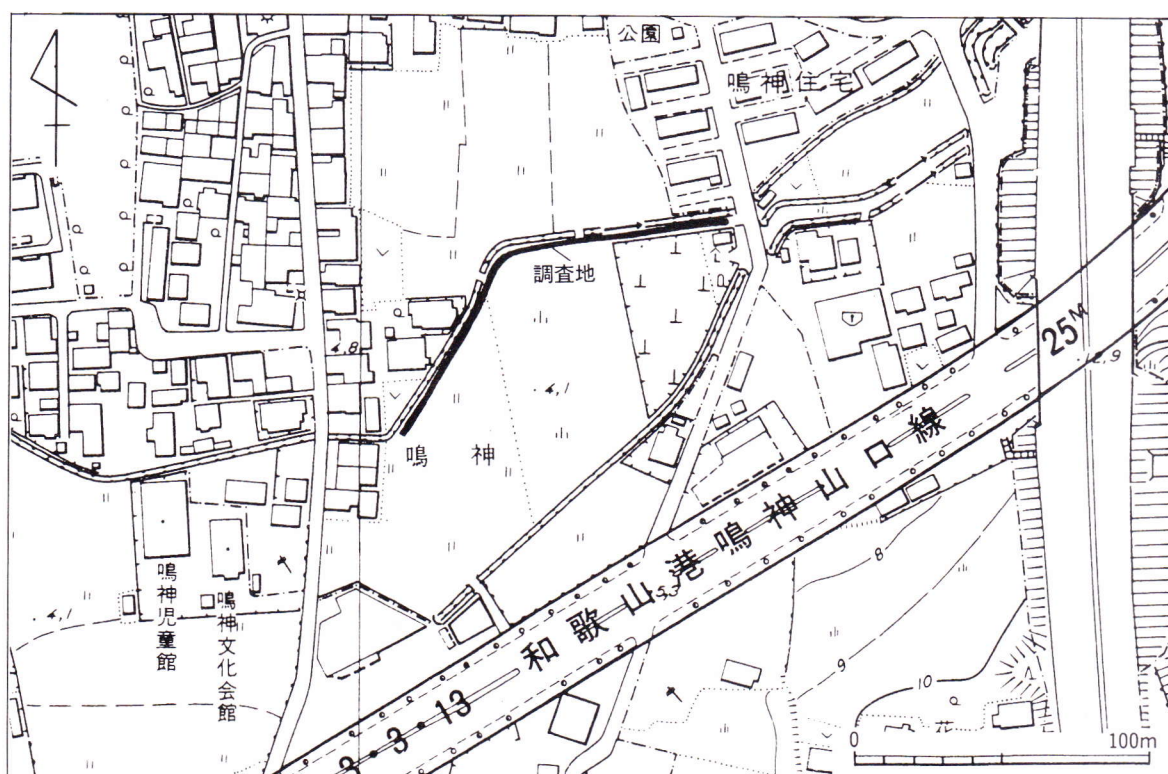
鳴神IV遺跡は紀ノ川下流域南岸の緑泥角閃岩を主体とする結晶片岩の独立丘陵である花山の西麓に広がる沖積平野に位置する。

周辺の遺跡をみると、古墳時代の集落は特に花山丘陵、岩橋丘陵の山麓付近にみられ、井辺遺跡、井辺Ⅱ遺跡、大田山Ⅰ遺跡、音浦遺跡などがある。平野部中央にある太田・黒田遺跡、秋月遺跡にも集落がみられる。また、鳴神Ⅰ遺跡から幅7～8m、深さ3m程の用水路と考えられる大溝及び鳴神Ⅴ遺跡の前期の水田区画が検出されている。この地域の丘陵上に古墳が築造されはじめるのは4世紀末あるいは5世紀初頭であり、花山丘陵上に前方後円墳9基を含む90基あまりの古墳が確認されている。その後、周辺の岩橋山塊に7世紀初頭まで頻繁に古墳が造られるようになる。それらは岩橋千塚古墳群と呼ばれ、総数約700基を数える。平野部においては、庄内式新段階・布留式古段階から7世紀初頭まで鳴神・遺跡や秋月遺跡などで微高地上に前方後円墳、円墳、方墳などが築造される。

調査内容

古墳時代の遺構としてはA区で微低地に掘削された溝群が検出され、B・C区は微高地上に展開した中期後半から後期前半にかけての竪穴住居11棟、C区で後期後半の方墳1基などを検出した。

それ以外の時期のものは、B・C区で鎌倉・室町時代の土坑・溝、A区において近世の土坑などを検出した。



調査位置図

A区で検出した溝は古墳時代のものが主体であり、幅50cmから3m深さ30cmから60cmの範囲の規模を測るものである。

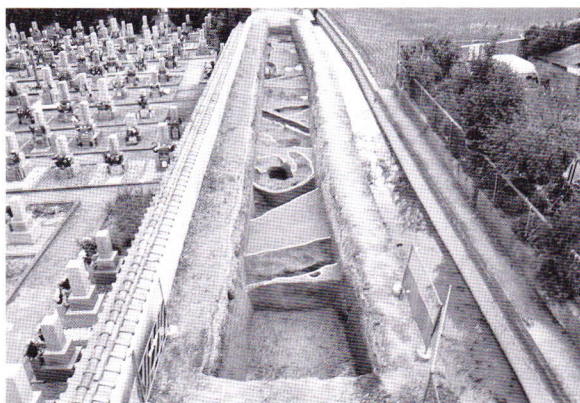
A区の西側において検出した大規模な谷状遺構は、幅約15mを測る。この遺構の堆積は、大きく4層に分けられ、灰褐色主体の砂質土で埋没しており、下層ほど砂質が強くさらに下層ほど遺物が多く含まれていた。出土遺物には、須恵器の蓋杯・甕、土師器の杯身・高杯・壺・甕・製塩土器など良好な遺物が含まれている。

このように、A区の遺構面は古墳時代において微低地にあたるとみられ、数期にわたり溝が掘削されたとみられる。この溝の分類は、その方向性から磁北より東に振る溝6・7、やや西に振る溝3・5・10・15、不定形を呈する溝4・8とに分けられ、また底面の傾斜の状況より南から北に傾斜をもつSD-3・6・8・10と北から南に傾斜をもつ溝5とに分けられる。

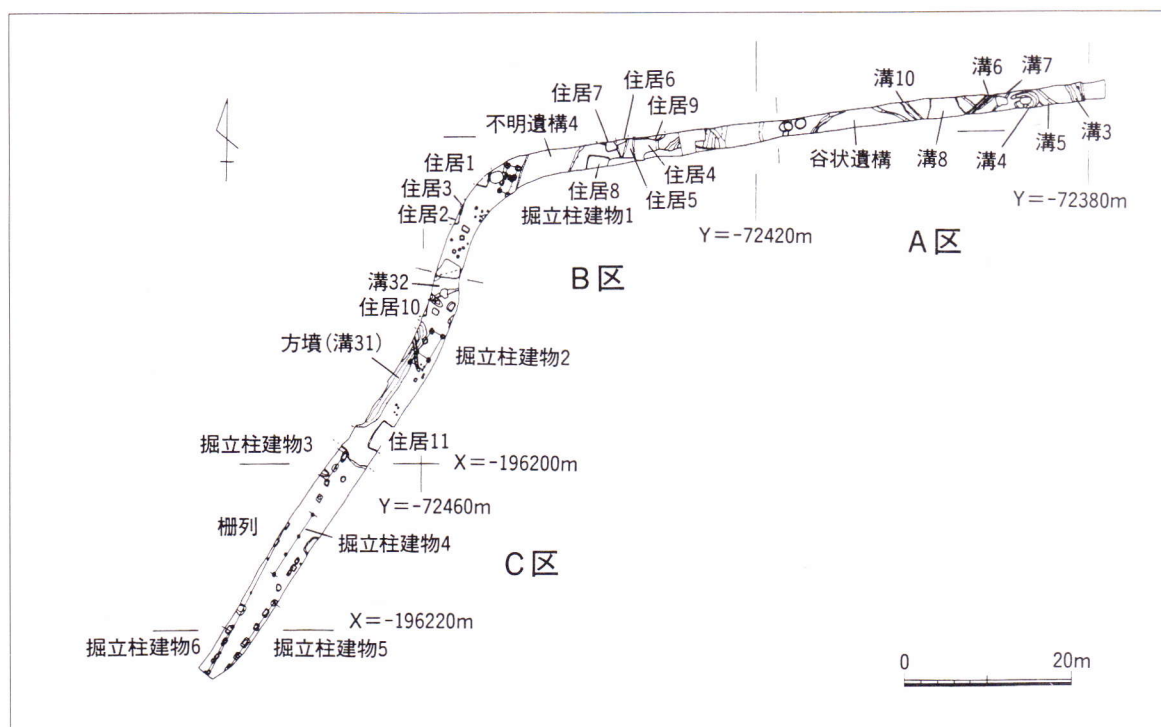
B区において9棟、C区で2棟の竪穴住居を検出した。住居はほとんど平面形が方形のものと考えられるが、竪穴住居4は確実に長方形を呈する。なお、出土遺物から5世紀後半から6世紀中頃の竪穴住居群であると考えられる。以下、まとめ毎に説明する。

竪穴住居1はB区の中央で検出したもので、東辺に壁溝をもつ。不明確ながら支柱穴とみられるピットを床面に検出した。覆土の厚さは約10cmを測る。後述する掘立柱建物1と同じ方向性をもつことなどから、同時期のものと考えられる。覆土から須恵器杯蓋、製塩土器などが出土した。

竪穴住居2・3は住居1の南西に隣接して検出したものであり、住居3を住居2が切っている。

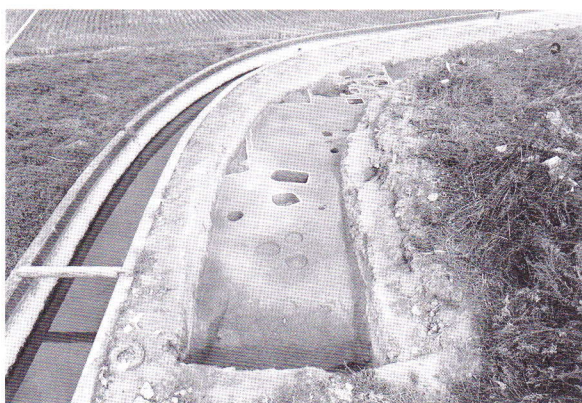


A区全景（東から）



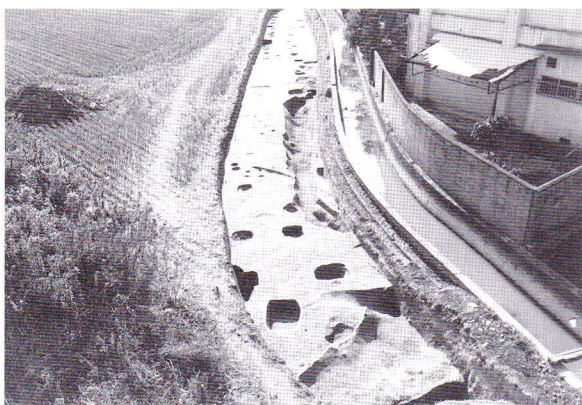
遺構平面全体図

住居2の南東隅には造り付けのカマドがみられ、カマドはドーム状になるとみられる上部が削平を受け基底部のみが残存している。カマドの内部は煮炊きによる熱によって赤変し、焼土及び炭が多く含まれている。袖部については、南東部分に作り替えがみられる。TK10型式併行期とみられる須恵器杯身、砥石などが出土した。堅穴住居2は住居3の建て替えであると考えられ、方向性が同一である。堅穴住居3は南東隅の一部を調査した。製塩土器などが覆土から出土している。



B区全景（南西から）

堅穴住居4・9はB区東端部で検出した住居である。堅穴住居4は東西2.9m南北3.0m以上の規模を測り、平面形は長方形を呈するものと思われる。覆土の厚さが75cm残存しており、上から第1層・黄褐色粘質土がブロック状に混入した褐灰色粘質土、第2層・褐灰色粘質土、第3層・灰青色粘質土が堆積している。第1層は人為的に埋めた可能性がある。滑石製模造品である白玉が3個出土しており、点数では出土遺構中で最も多く出土したことになる。その他、TK-47型式併行期とみられる須恵器杯蓋・杯身、製塩土器、土錘、刀子などの鉄製品、炭化桃核、鉈滓などの豊富な遺物が出土した。堅穴住居9は住居4の北に隣接するものであり、南東隅の部分のみ検出した。住居4に切られており、東西2.9m以上の規模を推定することができる。



C区全景（北東から）

堅穴住居5・6・7は住居4の東に展開する住居群であり、遺構の切り合いから住居7⇒住居6⇒住居5⇒住居4の順に建て替えられたものである。堅穴住居5は西辺部の一部を調査したにすぎないが、支柱穴と壁溝をもつものである。床面の柱穴からは完形の土師器碗が出土し、住居覆土からは、製塩土器、TK47型式併行期とみられる須恵器杯蓋・高坏、滑石製白玉、鉈滓などが出土した。堅穴住居6は南西辺の一部を調査した。覆土から製塩土器、フイゴ羽口などが出土した。堅穴住居7は南西隅を調査した。住居西辺のおそらく中央に造り付けのカマドがとりつくものである。ドーム状になるとみられる上部が削平を受け、基底部のみが残存している。煙道部分が住居の外にのびた状態で検出した。カマド袖部は灰黄褐色粘質土を盛土しており、高さ約10cmが残存していた。住居覆土も約10cm残存する。カマド内からTK23型式併行期とみられる須恵器杯蓋、住居覆土からは製塩土器、滑石製白玉などが出土した。

堅穴住居8は住居7の南西に隣接して、一棟の北側半分を検出した。東西2.9mの規模を測る。覆土は約10cm残存していた。遺物は須恵器・土師器の他、滑石製有孔円盤が出土した。

堅穴住居10はC区北東端に検出した。住居の南東隅の一部を調査したが、覆土が約5cm残存していた。東辺に深さ約3cmの浅い壁溝を確認し、調査区の北西壁でカマドの存在を確認した。カマド本

体は調査区外にあるものと思われるが、東辺北端部に焼土面及び北西壁面に造り付けのカマドの袖部を確認した。おそらく、北東隅にカマドがとりつくものと思われる。

竪穴住居11はC区の中央部で検出した。住居の南西側のほぼ半分を調査した。支柱穴とみられる2本のピットを検出したが、深さ約3センチと浅いものである。覆土は約5cmと浅く、製塩土器など少量の遺物が出土した。この住居は当調査で検出した竪穴住居の中では最も西側に位置するものである。

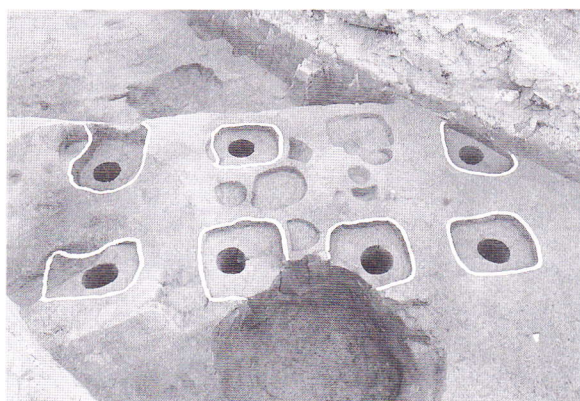
堀立柱建物はB区で1棟、C区で5棟の合計6棟分検出した。この中でもC区第4層上面から切り込む堀立柱建物3～6はそれぞれ近接しており、ほぼ同じ方向性（N-30°～35°-E）を持つ。

竪穴住居1に隣接する堀立柱建物1は、N-14°-Eの竪穴住居1と同一の方向性を持つ。南北3間(3.2m)、東西1間(1.2m)の規模を持つが東側列の南から2つ目には柱穴を欠く。柱間は南北、南から1.1m、1.1m、1.0mである。柱堀方は規格性を持ち、やや南北に長い長方形を呈する。その規模は60cm×55cm、深さ40～50cmを測り、その中央付近にそれぞれ直径約20cmの柱痕跡が確認された。埋土に含まれる遺物は土師器、製塩土器、須恵器等であり、いずれも細片であった。また、自然遺物として炭化桃核、柱材と思われる木片も出土している。

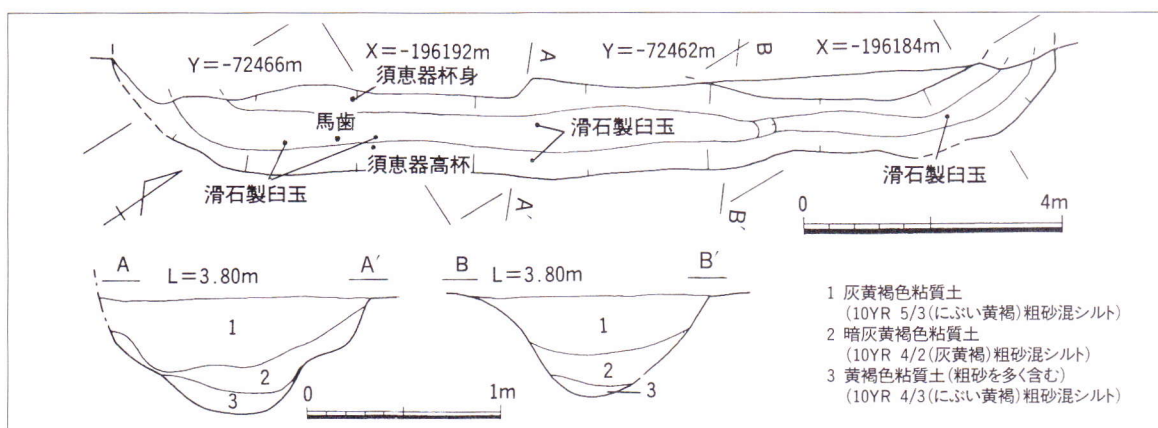
C区の北東側で方墳の周溝とみられる溝(溝31)を検出した。主軸方位はN-30°-Eであり、南東辺を検出した。検出長約12.8mを測り、復元するならば一辺約14mが考えられる。周溝幅約1.4m、深さ0.6mの規模をもつものである。北東隅から南へ約4mまでは少し浅くなっている。土層の堆積状況は3層に分層することができた。上から第1層・灰黄褐色粘質土、第2層・暗灰黄褐色粘質土、第3層・黄褐色粘質土の順に堆積する。最下層の第3層は墳丘側から土が流れ込んで堆積している



B区竪穴住居跡（南から）



B区堀立柱建物（西から）



方墳(溝31)遺構実測図

ものと思われる。遺物はTK43～TK209型式併行期とみられる須恵器杯身・杯蓋・高坏、土師器壺、滑石製白玉、馬歯などが出土した。遺物は主として第2・3層から出土している。出土遺物から存続時期は6世紀後半から7世紀前半のことと考えられる。



C区方墳周溝（南西から）

溝32はB区・C区にまたがって検出された。幅1.2m、深さ40cmを測る浅いU字溝である。遺物はコンテナに1箱分出土した。ほとんどは土師器で若干の須恵器が入るのみである。土師器甕には韓式系のものがみられる。出土した須恵器からTK23～47型式併行期の遺構であると考えられる。

まとめ

本調査で検出した古墳時代の竪穴住居11棟、及び方墳1基は全て第5層・黄褐色粘質土の上面において検出したものである。調査地を北東からA・B・C区に分割して調査したが、B区からC区北東半分に第5層・黄褐色粘質土がみられた。第5層は安定した微高地を形成しており、この微高地の中心部はB区からみて調査区外北東方向にあるものと考えられる。このような微地形は鳴神V遺跡においてもみられ、方墳が群集して営まれていた。なお、A区は古墳時代の溝が多数検出されているが、遺構の掘削基盤層が、A区東側が第6層・淡黄褐色砂質土の河道堆積層であり、A区西側が第7層・灰色粗砂である。以上のことから、A区は微低地であったと考えられる。

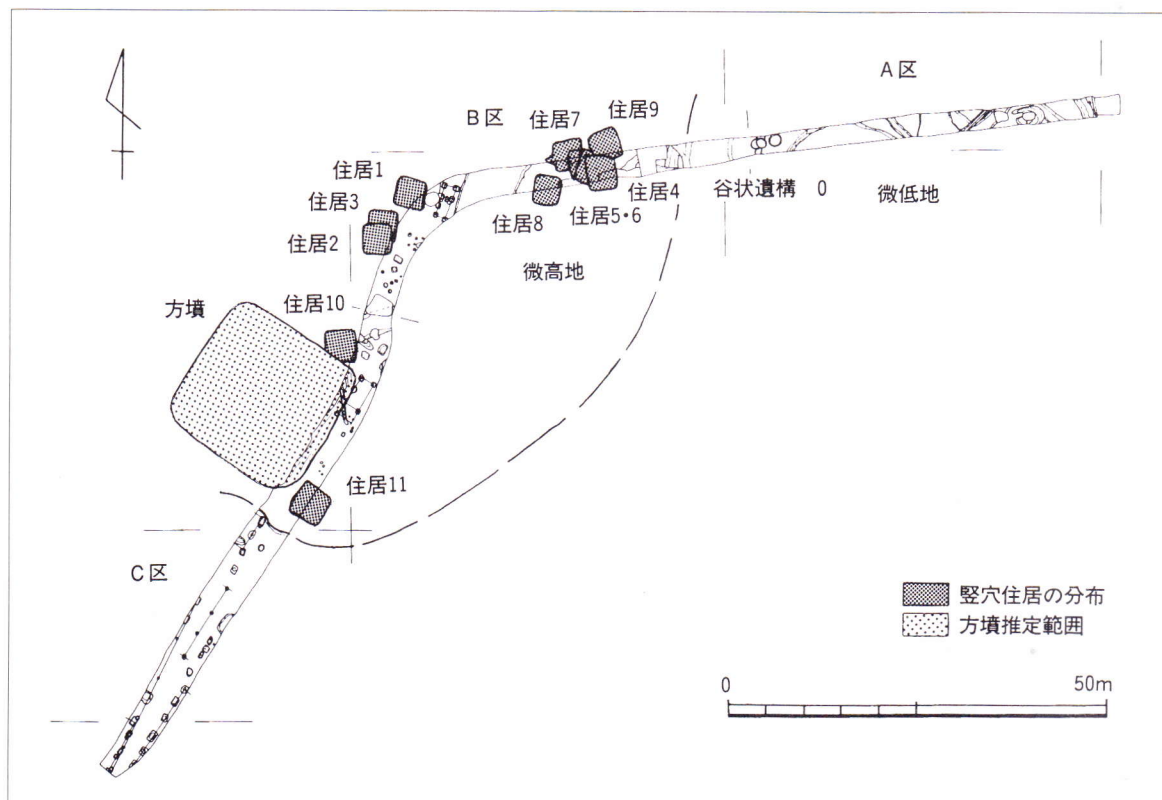
微高地上に展開する竪穴住居群であるが、平面形は方形のプランを呈するものが一般的である。確実に平面形が長方形のものは竪穴住居4がある。住居の平面的な規模は、調査区が幅の狭いことなどの制約のため不明確なものが多いが、一辺2.9～3.6mの範囲となり、小規模な住居群であるといえる。

住居はその遺構の切り合い関係から住居3⇒住居2、住居7⇒住居6⇒住居5⇒住居4、住居9⇒住居4の新旧順位を確認することができた。住居3⇒住居2、住居7⇒住居6⇒住居5⇒住居4の変遷は住居の建て替えであると考えられ、これらの住居は5世紀末から6世紀前半の時期と推定することができる。

本調査において検出した方墳の時期は出土遺物から6世紀後半から7世紀前半のことと考えられる。この方墳は微高地上において、集落の展開が終息、あるいは移動した後の時期のものであるとみられ、古墳時代後期後半にはこの周辺が墓域の一角を成したものであると考えられる。

以上、鳴神IV遺跡で検出した古墳時代中期後半～後期前半の竪穴住居及び古墳時代後期後半の方墳について報告したが、紀ノ川南岸の和歌山平野において、まとまった古墳時代の集落についての貴重な資料を得ることができた。また、鳴神IV遺跡で方墳を検出したことは、周辺地において秋月遺跡と鳴神V遺跡の平野部の古墳群に加え、鳴神IV遺跡にも古墳群が存在することを明らかにすることができた。

遺跡周辺では鳴神IV遺跡の南東に隣接して展開する花山古墳群及び花山の丘陵北西縁辺部に展開



竪穴住居と方墳 概念図

する音浦遺跡の古墳時代集落、また国道24号バイパス建設に伴う調査で検出された鳴神IV遺跡南縁部の別単位の微高地に展開するとみられる竪穴住居などと当調査において検出した古墳時代集落との関係が重要であり、今後注意が必要であろう。

A区東端深掘グリッド及びC区南西端の2ヶ所で地震による液状化現象に起因する噴砂の砂脈を検出した。基本土層の第7層・灰色粗砂(10 YR 6 / 1 (褐灰)粗砂)が液状化した地層である。この液状化層は平成5年の当事業団の鳴神V遺跡の調査時にも確認することができた。A区においては噴砂の砂脈は遺構面には及ばず、遺構面下の無遺物層中において観察することができた。平面的にみて、噴砂の貫入によって生じた砂脈の方向性はN-18°-WからN-42°-Wまでを測る。C区においては、噴砂によって生じた砂脈を遺構面上に平面的にN-18°-WからN-7°-Eまでの方向性を観察することができた。C区の壁面に噴砂の砂脈が貫入する状況を観察することもできたが、砂脈の貫入は第1層・灰色粘質土(N 3 / 0 (暗灰)シルト)まで及んでいた。第1層は近世以降の耕土層であり、噴砂による砂脈貫入を引き起こした地震は江戸時代以降のものであることが確認された。(北野隆亮)



C区南東壁土層断面の噴砂・砂派貫入状況

参考文献

『鳴神IV遺跡第6次発掘調査報告書概報 ―地方改善整備事業道路改良工事に伴う調査報告―』(財)和歌山市文化体育振興事業団 (1995)

10. なるかみ 鳴神VI遺跡 第4次調査

調査地 和歌山市秋月字中瀬145-2他

調査面積 430m²

位置と環境

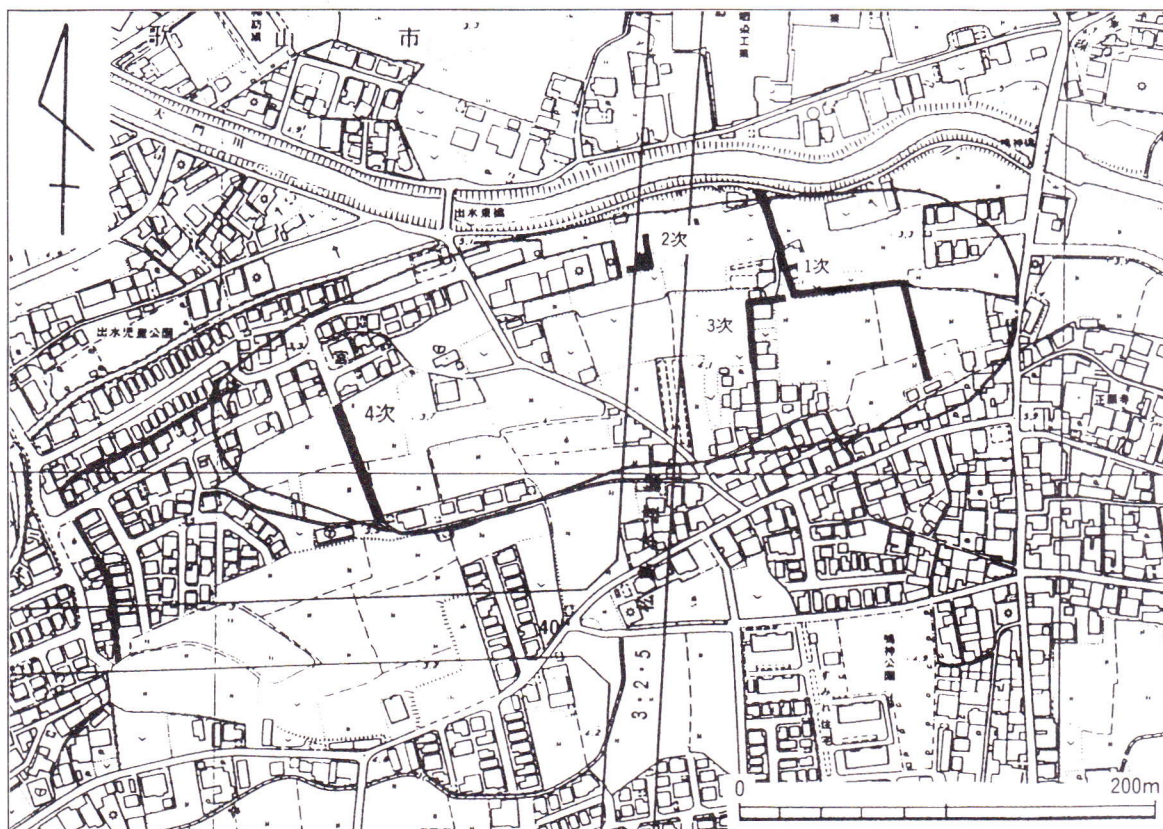
奈良県の大台ヶ原に源を発し、紀伊半島の北部を紀淡海峡に向かって西流する紀ノ川は、その河口部において広大な和歌山平野を形成する。和歌山市は、この和歌山平野を主な市域としている。

鳴神VI遺跡は、この和歌山平野のうち、紀ノ川の分流である大門川の氾濫原、およびこの大門川の旧支流の流域範囲内に位置する。遺跡の範囲は東西約460m、南北約170mの楕円形の地域を範囲とする。

調査内容

(1) 基本層序

- 1 灰色 (5Y 5/1) 砂質土 (砂礫を多く含む) = 近世から近代の耕土
- 2 にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘質土 (7.5YR 5/4 にぶい褐色のマンガン粒を多く含む)
- 3 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト質粘土 (7.5YR 5/4 にぶい褐色のマンガン粒を多く含む)
- 4 灰色 (5Y 5/1 ~ 7.5Y 6/1) 粘質土 (7.5YR 7/4 にぶい橙色のマンガン粒を多く含む) = 旧耕土
- 5 にぶい黄橙色 (10YR 7/3) シルト質粘土 (7.5YR 7/4 にぶい橙色のマンガン粒を多く含む) = 旧床土



調査位置図

6 灰白色 (5Y 7/1) 粗砂 (細礫を少し含む)

7 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト

(2) 検出遺構

A 区の遺構

第 1 遺構面

〔土坑 6〕 直径1.5m、深さ55cmの円形の土坑である。河道 1 が埋没した後に穿たれている。出土遺物には、瓦質土器不明品、肥前系の広東碗、堺焼播鉢転用の面子、小型土製品等があり、そのほかに罫子等もある。

〔土坑 7〕 直径1.3m、深さ50cmを測る。土坑 6 に近接して穿たれた円形の土坑である。出土遺物には須恵器、土師器、肥前系磁器、瓦質の羽釜等がある。

第 2 遺構面

〔河道 1〕 東西方向の河道で、その南岸をB区の北端で検出した。北岸については、調査区外に存在するものと考えられる。したがってこの河道の幅は、少なくとも45m以上と推定できる。

この河道の河岸部でピットを 7 基検出した。いずれも直径10～20cmを測り、深さも10～20cmである。出土遺物はない。

この河道 1 全体からの出土遺物は、河道内堆積層からの出土という性格上、磨滅が著しく各時期のものが混在している様相を呈するが、弥生中期の甕底部、土錘、須恵器、土師器、近世平瓦、肥前系の染付等が出土している。

B 区の遺構

第 1 遺構面

〔溝〕 溝 1～6 の 6 条を検出した。いずれも東西方向の溝で、耕作に伴う鋤溝と考えられる。出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器の小片があるが、磨滅が著しく図化できない。

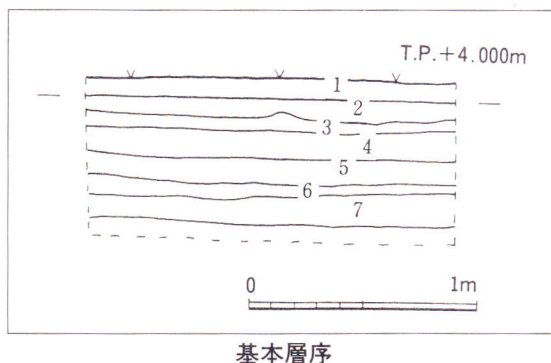
〔土坑 1〕 長径1.5m、短径0.8m、深さ14.7cmの南北に長い楕円形の土坑である。出土遺物には土師器、須恵器、黒色土器 (A類)、染付等があるが磨滅が著しく小片で図化できなかった。

〔土坑 2〕 長径1.1m、短径0.5m、深さ6.9cmの東西に長い楕円形の土坑である。出土遺物には土師器の小片があるが、磨滅が著しく図化できなかった。

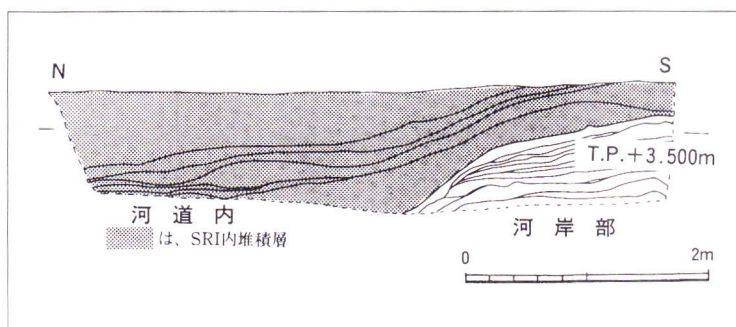
〔土坑 3〕 直径0.9m、深さ9.1cmの土坑である。円形を呈すると思われるが、南半は調査区域外に存在する。出土遺物には、土師器・須恵器がある。いずれも小片で図化できない。

〔土坑 4〕 直径0.8m、深さ12cmの不整円形の土坑である。出土遺物では、肥前系の染付が出土している。しかし非常に小片で図化できなかった。

〔土坑 5〕 直径0.6m、深さ6.1cmの不整円形の土坑である。土坑 4 とは切り合い関係にあり、土坑 5 のほうが時期的には古い。遺物の出土はなかった。

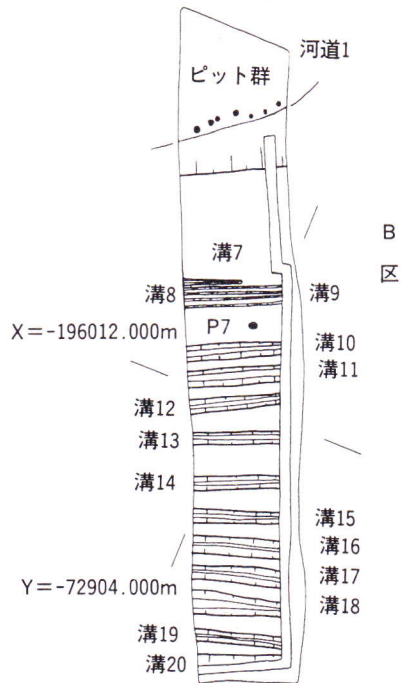
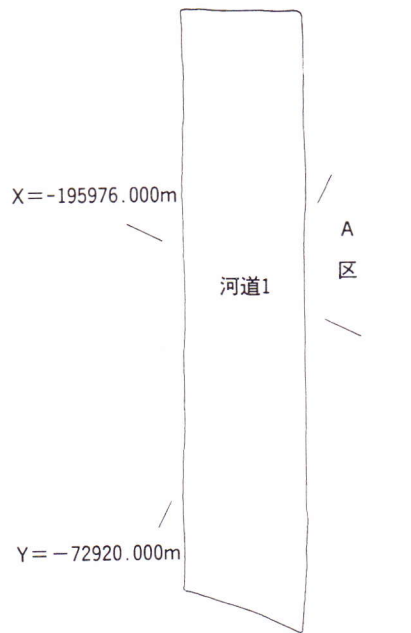


基本層序

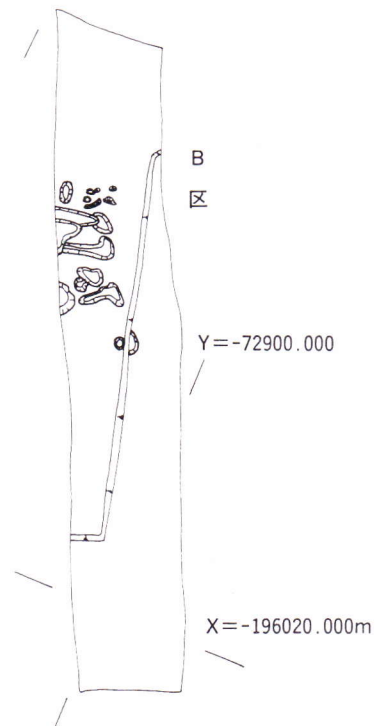
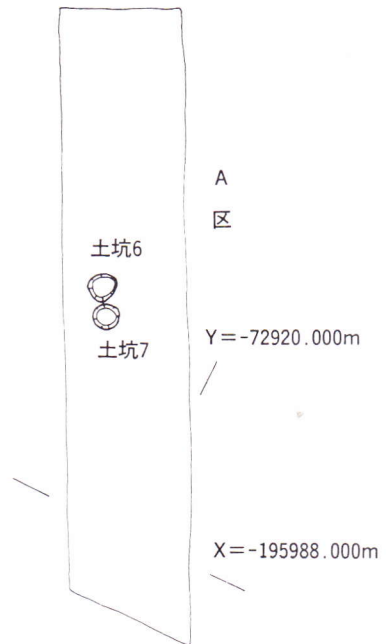


河道1 南岸部土層断面図

第2遺構面



第1遺構面



検出遺構実測図

〔ピット〕 ピット1～6の6基を検出した。規模は、直径0.3m内外で円形を呈し、深さも2～5cmの内におさまる。遺物は、ピット1から瓦質土器1点、ピット3から土師器1点、ピット5から土師器1点、ピット6からは土師器2点、平瓦1点が出土している。これら出土遺物は、いずれも小片で図化することができない。

第2 遺構面

〔溝〕 溝7～20の14条を検出した。全て東西方向の溝で、溝20以外は、両端とも調査区外に延びる。また溝7の南半部も調査区外に存在する。これら溝の幅は、50cm～1.2mの内におさまり、深さも5～10cmの内におさまる。溝20は、幅2.3m以上で深さは11cmを測る。

〔ピット5〕 直径20cm深さ18.2cmを測る。出土遺物はない。時期は、層位的にみて近世から近代にかけての遺構と思われる。

まとめ

今回の調査で検出した遺構は、河道1を除いて全て、遺物、遺構埋土、層位的にみて近世から近代にかけてのものと考えられる。

具体的な調査の成果としては、まず第一に挙げられるのが第1次から第3次調査までで確認されていた砂礫層の堆積原因である、旧河道本体の南岸部をはじめて検出したことである（河道1）。

またこの河道の南岸部で検出されたピット群は、水流の浸食作用によって河岸が崩壊するのを防ぐための、護岸に伴う杭が打たれていた痕跡と考えられる。そしてこの河岸のすぐ南側では耕作に伴う畝と溝の遺構群を検出した（河道7～20）。このことから、例えば現在の紀ノ川の河岸部に見られるように、河道のすぐ脇に耕作地が展開しているという空間をこの調査地点においても復原することができる。

以上の調査成果を踏まえ、この遺跡における歴史的空間を復原すると、今回の調査で検出した大門川の支流である旧河道が遺跡の北側に存在し、その南側には耕作地が展開していたようである。それは、この遺跡が集落のような生活空間そのものというよりも、生活空間にごく近い位置を占める生産地空間（具体的には耕作地等）として復原できるであろう。（木建正宏）

参考文献

『鳴神VI遺跡第4次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団（1995）

11. ^{おおた}太田・^{くろだ}黒田遺跡 第25次調査

調査地 和歌山市太田533-1

調査面積 24m²

位置と環境

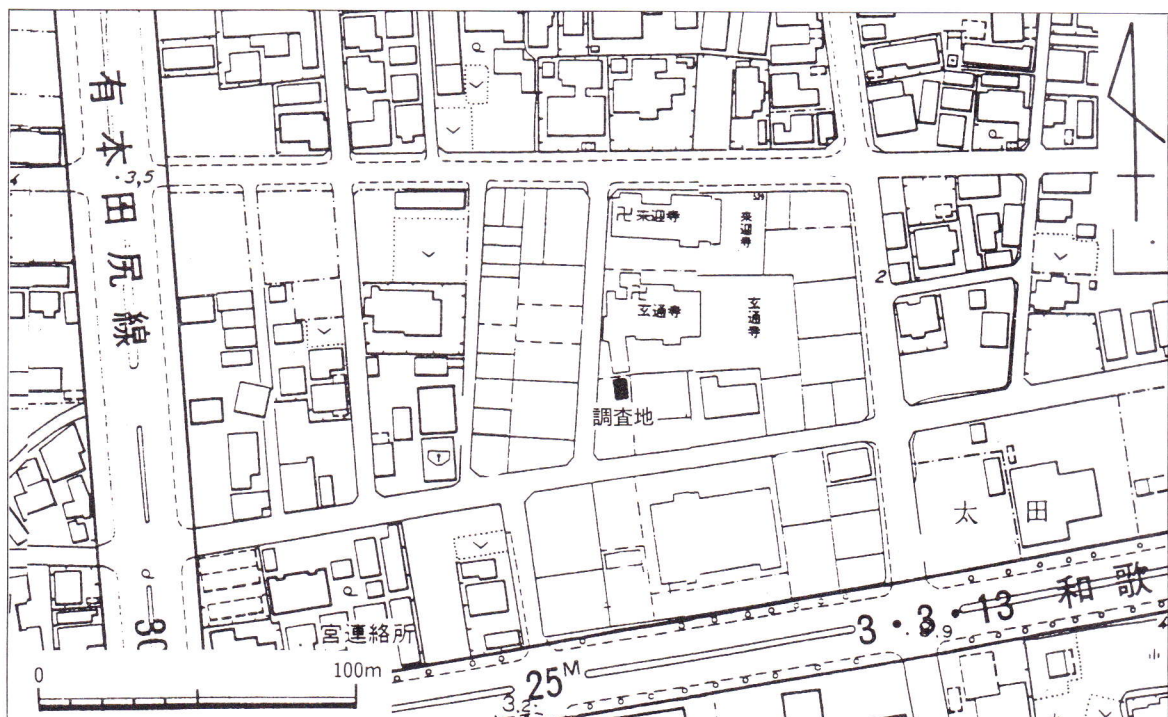
調査地は、標高3.8mを測る沖積平野上にあり、遺跡の南端部に位置する。調査地の周辺ではこれまでに、第14・15・16次調査が行われている。特に第16次調査では、弥生時代前期の竪穴住居址が1棟確認されており、今回の調査においても弥生前期の遺構を検出する可能性が高いと考えていた。また調査地は、石山本願寺の門徒集団である雑賀衆の一派、太田党の居館といわれる太田城跡に相当するため、それに関連する遺構もあわせて確認することができるとみていた。

調査内容

調査区の大半が著しく攪乱された状況であり、遺構面は調査区のほぼ中央の幅約2mの範囲で残存していた。ここでは古墳時代・中世・近世の遺構を同一面上で確認することができた。その主な遺構としては、古墳時代の土坑1基・中世以降の溝1条・近世の小溝2条・近世～近代の溝1条がある。

古墳時代の土坑は、直径約1.2mの規模を呈し、出土した土師器や須恵器(右項遺物実測図3)の年代から、6世紀初頭のものともみられる。

中世の溝は、西肩の一部を検出ただけであるが、南北方向に走る溝である。深さは、遺構検出面から約20～30cmを測る。溝の東肩は、調査区外におよぶため正確な規模はわからないが、床面の立ち上がりから考えて、幅2m前後のものともみられる。溝の埋土からは、土釜や備前焼の甕など14世紀末から15世紀にかけての遺物が主としてみられ、上層からは16世紀初頭の唐津焼の碗(遺物実測図10)が出土している。したがってこの溝は、室町時代以降に掘削され機能していたが、近世初頭



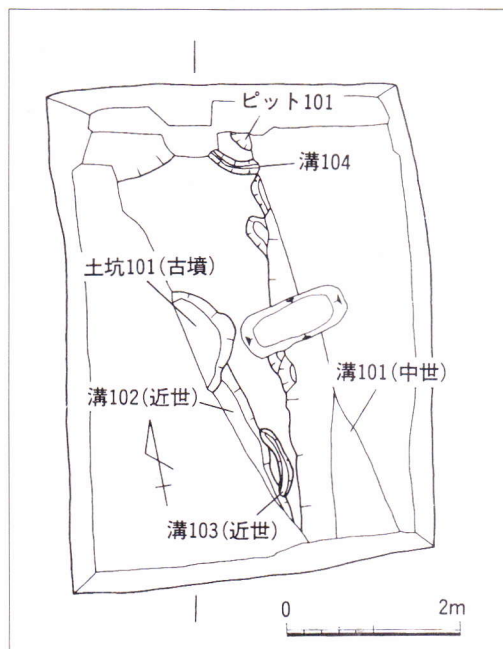
調査位置図

には埋没していったとみられる。

遺物はコンテナにして、2箱分出土している。備前焼の播鉢・壺・甕など15世紀から16世紀代初頭の遺物を中心に、そのほとんどが中近世の陶磁器である。また14世紀後半から15世紀前半、明代のものとみられる白磁皿（遺物実測図3）や青磁碗（遺物実測図4）などの輸入陶磁器もみられる。さらに近世の特徴的な遺物として、焼塩壺（遺物実測図11）や碁石（遺物実測図12）がある。しかし混入ではあるが、弥生時代中期後半（第IV様式）の弥生土器も微量出土している。

まとめ

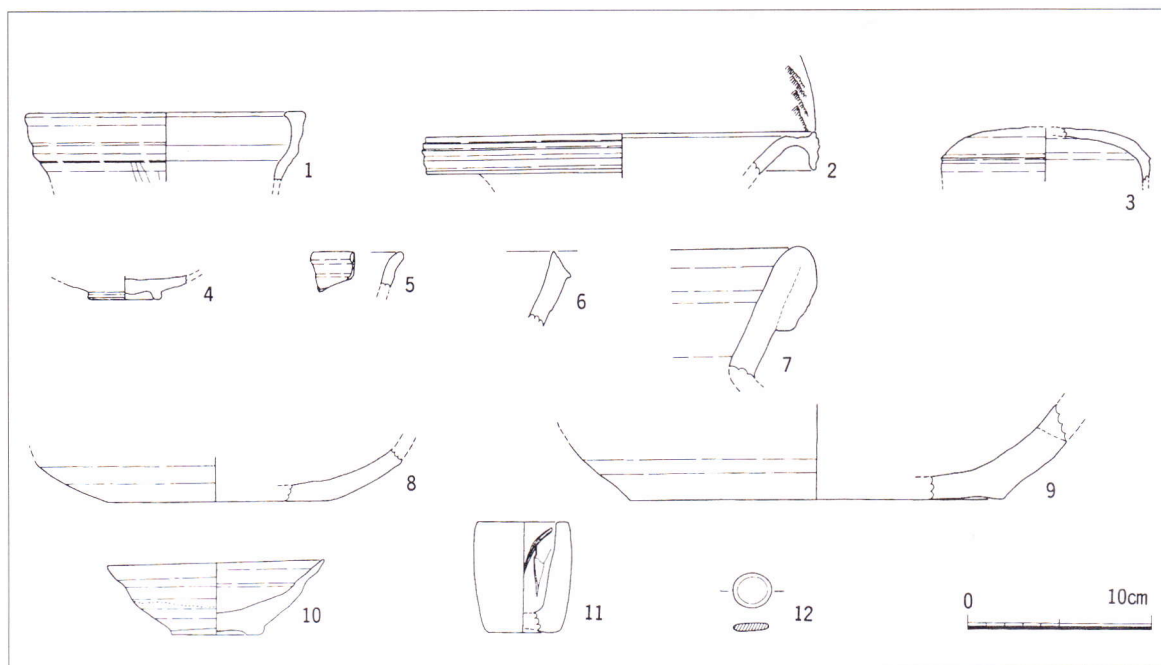
ここでは、遺構・遺物ともに中世・近世のものが主体であった。また、安定した近世の遺物包含層を確認することができた。また白磁や青磁の輸入陶磁器が出土しており、中世居館の存在を窺わせるものである。今回検出した中世の溝も、それに関係のある遺構と考えられる。さらに近世においては、和歌山城城下町の拡大とともに、周辺地域である太田・黒田の地域も発展したとみられる。ここでは遺物の出土がみられたものの、弥生時代の遺構を検出できなかったが、遺構面が攪乱によって破壊されていたためか、調査地が遺跡の縁辺部であったためと考えられる。（栗本美香）



遺構全体図



調査区全景（南から）



遺物実測図

12. 府中^{ふちゅう}IV遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市府中355番地他

調査面積 206m²

位置と環境

府中IV遺跡は、紀ノ川北岸の和歌山平野を一望する標高約25mの丘陵上に立地している。この遺跡は宅地造成のための土採り工事が行われ、この工事現場において多量の弥生土器を含む土層が発見され、この状況より周辺には弥生時代の遺跡が存在するとみられた。このため和歌山市教育委員会が新発見の遺跡として文化庁に届け出を行い、府中IV遺跡(遺跡番号402)として周知の遺跡となったものである。この遺跡の周辺は、縄文時代から古墳時代にいたる多くの遺跡が分布する地域である。

調査内容

A区は残された断面観察により特に遺構が集中するとみられた地区であり、東西の幅が6~8m、南北が約25mにわたる調査区である。この調査区は今回の調査範囲内では比較的標高が高く、遺構検出面での標高が約24.5mを測り、北側から南側への緩やかな傾斜をもった地形を成している。この調査区の基本的な堆積は、表土下に約20cmの厚みを持ち、灰褐色弱粘質土を呈する遺物包含層が堆積し、この層の下面が竪穴住居跡等を検出した遺構面である。この遺物包含層の時期は、中国製青磁鍋蓮弁文碗や瓦器片等を含むことから少なくとも鎌倉時代以降に堆積したものとみられる。遺構は、拡張による建て替えを含めたものであるが、弥生時代後期の円形竪穴住居5棟、古墳時代前期の方形



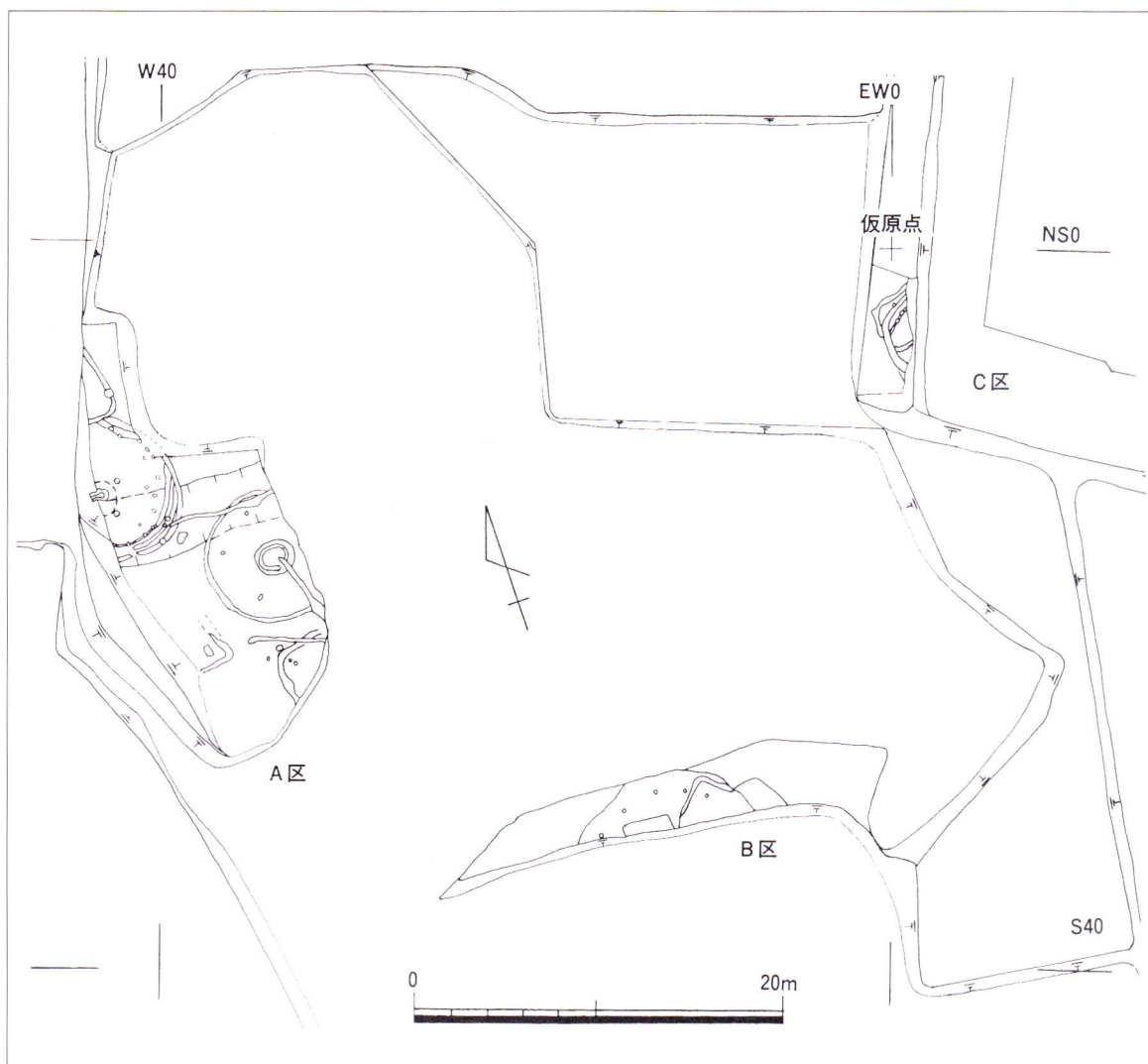
調査位置図

竪穴住居 4 棟を検出している。竪穴住居以外の遺構は、調査区を東西に横切る幅3m、深さは検出面より最深部で25cmを測る溝がある。この溝は、出土遺物より庄内併行期でも比較的新しい時期のものである。このほか、削平が著しいため覆土等は失われているがおそらく竪穴住居に伴うとみられるピットを検出している。

次にB区は、南端に位置する調査区で東西25.6m、南北3.6mを測る。遺構検出面の標高は約22.5mを測り、A・C区と比べて2m程度低くなっている。検出した遺構は、弥生時代後期とみられる円形竪穴住居 1 棟、古墳時代前期の方形竪穴住居 3 棟などがある。このほか調査区周辺の削平が著しく正確な平面プランを確認することができなかったが、円形の竪穴住居である竪穴住居B-4の上部に東西幅 4 m以上を測る古墳時代前期の遺構を検出している。

C区は、東端にあたる地点で東西 3 m、南北 7 mの調査区である。遺構検出面の標高は24.5mを測る。遺構面までの堆積は3層に分けられ、なかでも遺構面直上の2層には瓦器や中国製白磁碗などを含むことからA区と同時期の堆積がみられる。遺構は、西壁がそれぞれ重なりをもつ円形から方形の竪穴住居 3 棟を検出している。

竪穴住居A-1は、A区のほぼ中央で検出した円形の竪穴住居であり、径7.5mを測るもので弥生時代後期の住居である。この住居は検出面から床面までの深さが良好な地点で約40cmを測り、土層は大



遺構平面実測図

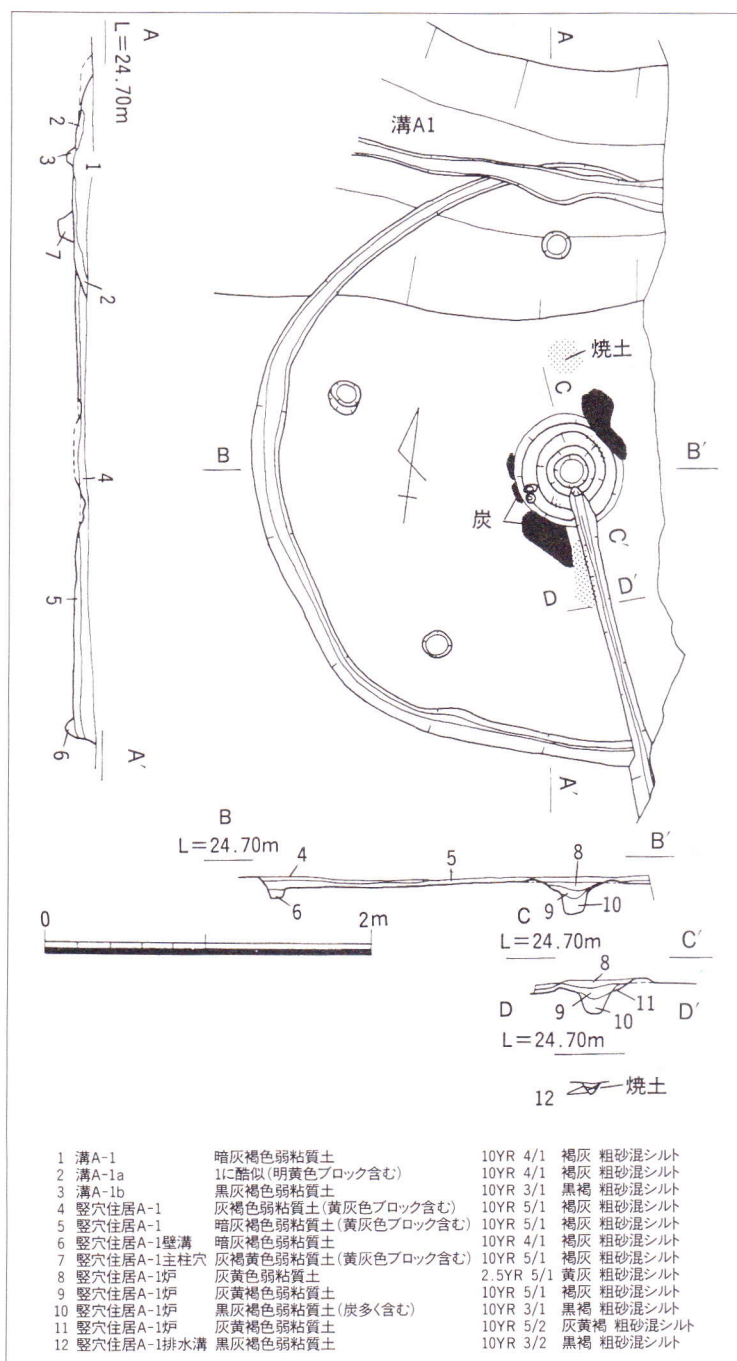
きく3層に分けられ、暗灰褐色弱粘質土主体の覆土である。床面の検出では住居ほぼ中央に径80cmを測る播鉢状の炉を検出している。この炉は周りに高さ5cm程度の周堤(いわゆる炉堤)をもつものである。また炉から北東方向に断面がV字形をした幅20cmの溝が屋外にのびる。この住居を構成する主柱穴は東側が大きく削平を受けているため明確でないが、残存する3個の主柱穴から本来5本柱の住居であったことが考察できる。住居の周壁直下に掘られた壁溝は、残存部では全周し、床面からの深さ10cm前後を測る。

竪穴住居A-4は、竪穴住居A-1に近接する復原径7.5mの規模をもつ円形住居である。ほぼ中央の床面に炉堤をもつ炉を配し、炉から西側にのびる溝を検出している。床面の精査では、壁溝が3条検出でき、二度の拡張による建て替えが行われた住居であることが確認できた。この建て替えによる主柱の数は1・2期では6～7本であったものが、3期では8本を数え、住居の拡張とともに主柱が増す状況が得られた。

竪穴住居A-5は、A区北端で検出した方形の竪穴住居で、円形の竪穴住居A-4と重なりをもち、時期的には最も新しい住居である。この住居は、ほとんどが調査区外に広がるため全体を復原することは不可能であるが、床面に検出した主柱穴より4本柱の住居とみられ



竪穴住居 A-1 炉 (北から)

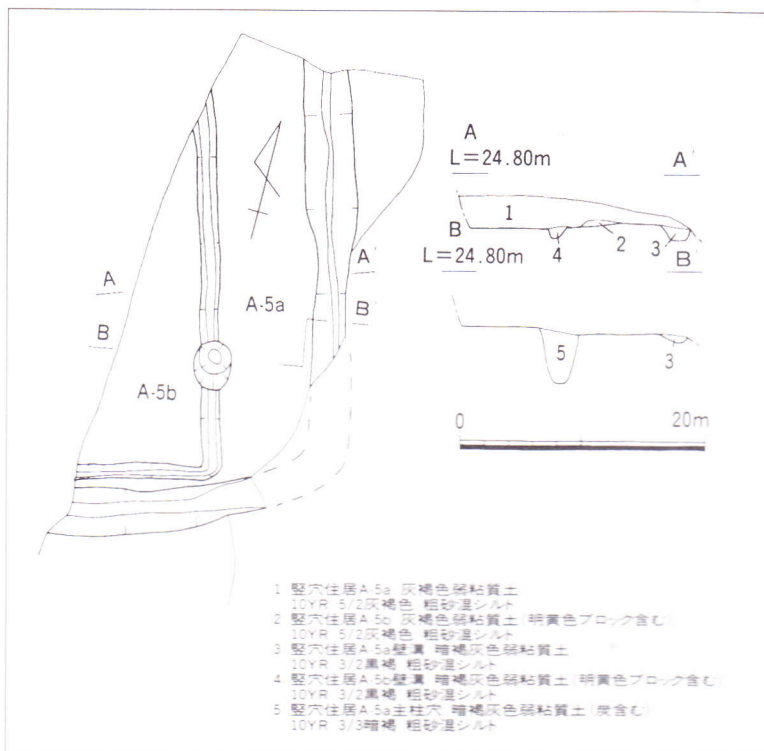


竪穴住居 A-1 平面図及び断面図

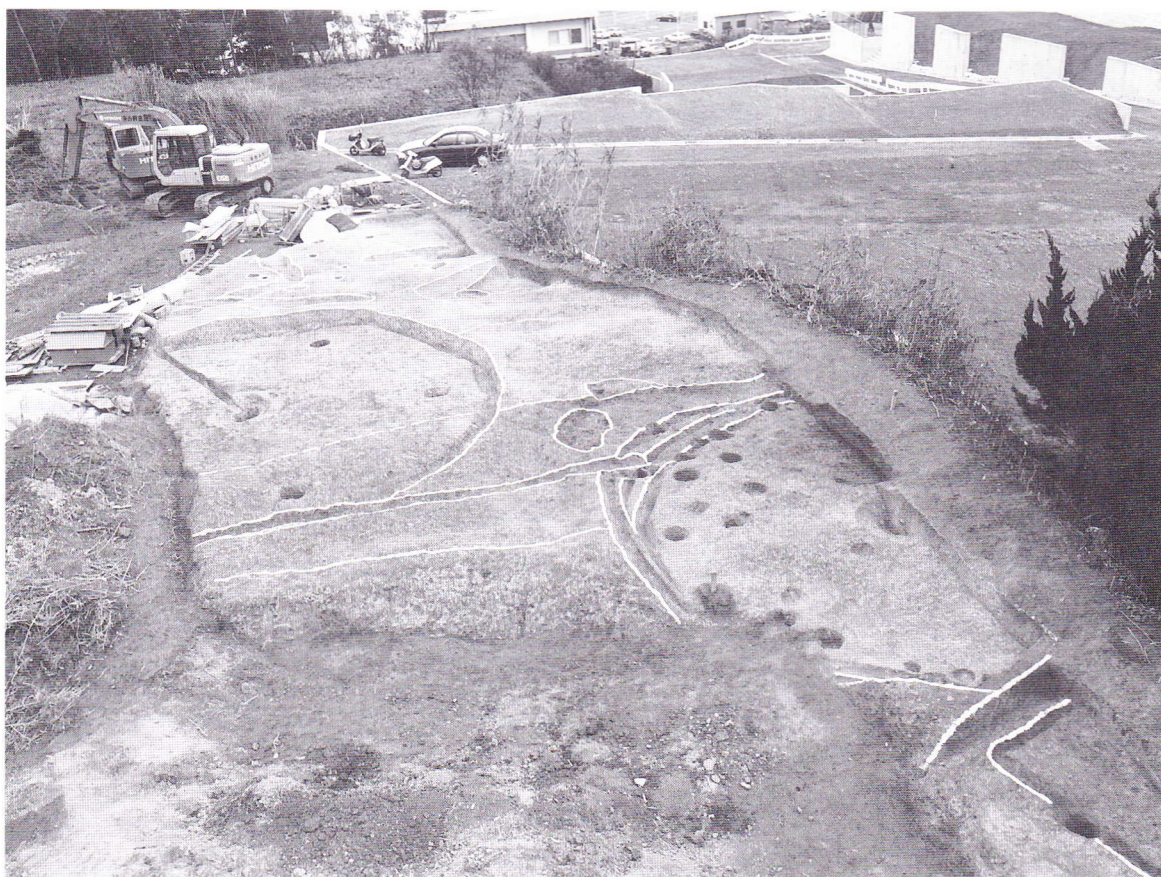
る。さらに、床面にはL字状に折れ曲がる溝を検出し、この溝の形状より壁溝とみられ、この住居の古段階のものと考えられた。このことから、竪穴住居A-5は拡張による建て替え住居と考えられる。この住居の覆土は、他の住居に比べ褐色系が強い灰褐色弱粘質土であり、また古段階の壁溝はベース土と同じ明黄色のブロックが多く含まれていたことから建て替え時に埋められたものと考えられる。また新段階の支柱穴は床面から深さ45cmを測り、埋土は炭を含む暗褐色灰褐色弱粘質土である。この住居の

出土遺物は、比較的希薄であったが、出土した遺物から住居の時期は古墳時代前期のいわゆる庄内併行期とみられる。

次に出土遺物は、竪穴住居跡などの遺構が良好なのに比べ全般的に希薄であり、遺物本体の剥離



竪穴住居A-5平面図及び断面図



A区全景（北から）

及び磨滅が著しく本来の調整等が失われているものがほとんどである。しかし、竪穴住居等から出土した弥生時代後期から古墳時代前期にあたる一部の遺物は、全体を復原できるものであり、住居などの時期を限定する資料として良好なものである。出土した畿内V様式及び庄内併行期にあたる土器の胎土は比較的粗く、赤色軟質粒や石英を多く含む。色調は、乳白色から赤褐色のものが多く、このほか同時期とみられる石器が出土している。この石器には砥石や叩き石がある。

遺構以外の遺物には、包含層などから出土した須恵器、黒色土器、瓦器、中国製の白磁・青磁、近世陶磁器がある。

竪穴住居A-1の出土遺物は弥生時代後期の壺・甕・高杯がある。壺のなかで器形が明確なものは口縁端部を肥厚させ外端面に二条の沈線を施した広口壺のみである。高杯は、比較的大型のもので、「く」の字状に大きく屈曲し、外上方にのびる杯部などがあり、丁寧なヘラミガキ調整がみられる。また底部は、平底のものと上げ底状のものが多く、なかには底面に繊維状の圧痕が明瞭に観察できるものがある。

溝A-4から出土した高杯の脚部は、杯部から大きく開きほぼ直に接地するタイプのもので円形の四方透かしをもつ。

溝B-2には壺・甕・高杯・甗がある。壺には二重口縁壺や広口壺があり、二重口縁壺には円形浮文や刻み目によって加飾している。甕は「く」の字状に大きく外反する口縁部をもつ。また体部外面はタタキ調整が残る。また甗は底部中央に径9mmの穿孔がみられる。

溝B-1の出土遺物は、壺・鉢がある。鉢は口縁部がラッパ状に大きく開くもので、体部外面にタタキ調整が明瞭にみられる。

竪穴住居C-1には、形状は甕であるが外面に横方向のハケ調整を施したのち一部に縦方向のヘラミガキ調整を施した特殊なものがある。このほか壺・甕の底部や高杯が出土している。

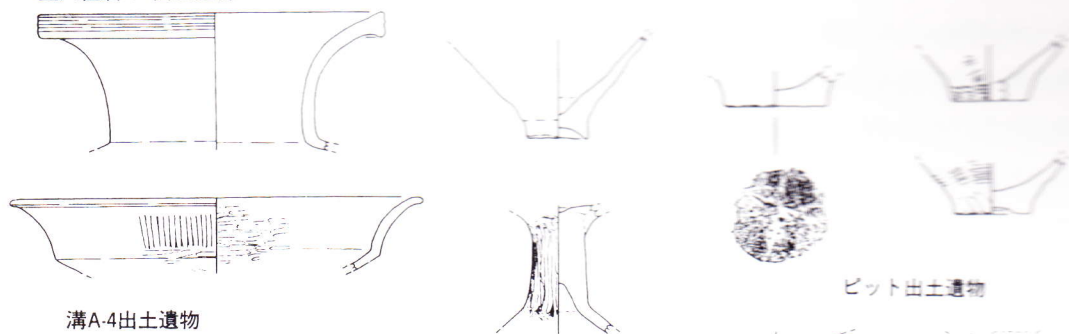
竪穴住居C-2からの出土遺物は、壺・甕・高杯・手づくね土器などがある。

次に、石器は砥石、叩き石などがみられる。また石器の石材とみられるサヌカイトの剥片が6点出土している。砥石は2点出土しており、内1点は研磨面が4面のもので、全体的に破損が著しいが使用痕が明瞭に残り、砥石以外の製品の可能性もうかがえる。叩き石は、すべていわゆる和泉砂岩製で敲打痕が明瞭に観察できるものが多い。

今回出土した遺物から遺構の時期を限定すると、まず竪穴住居A-1は広口壺や高杯の形態より畿内V様式の後葉にあたり、最も古い時期のものである。また溝B-2や竪穴住居C-2などには庄内併行期にみられる二重口縁壺が含まれており、古墳時代の初頭とみられる。また竪穴住居C-1は高杯や底部の状況より、これよりさらに新しい様相をもち、庄内併行期でも新段階のものとみられる。

以上から今回検出した竪穴住居等が機能していた時期は、弥生時代後期末から古墳時代前期と考えるのが妥当といえる。

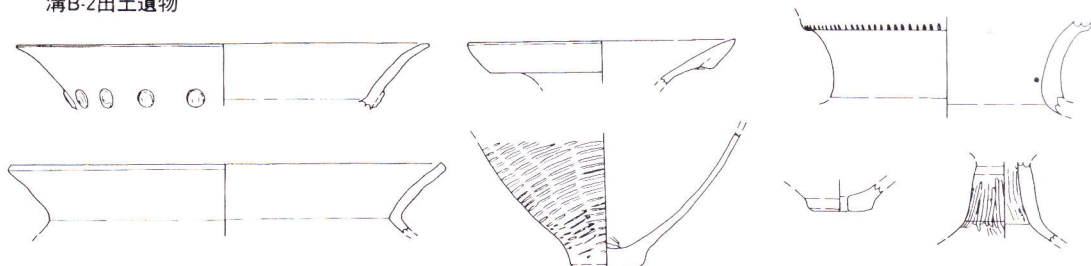
竖穴住居A-1出土遺物



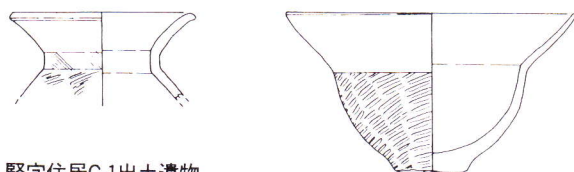
溝A-4出土遺物



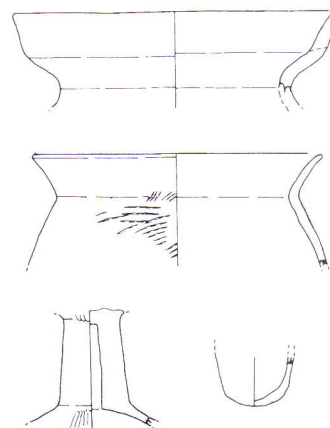
溝B-2出土遺物



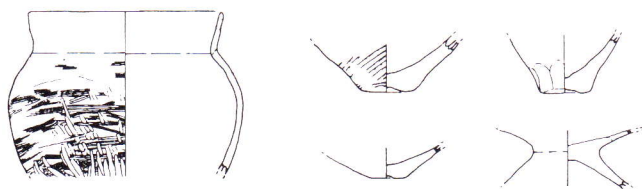
溝B-1出土遺物



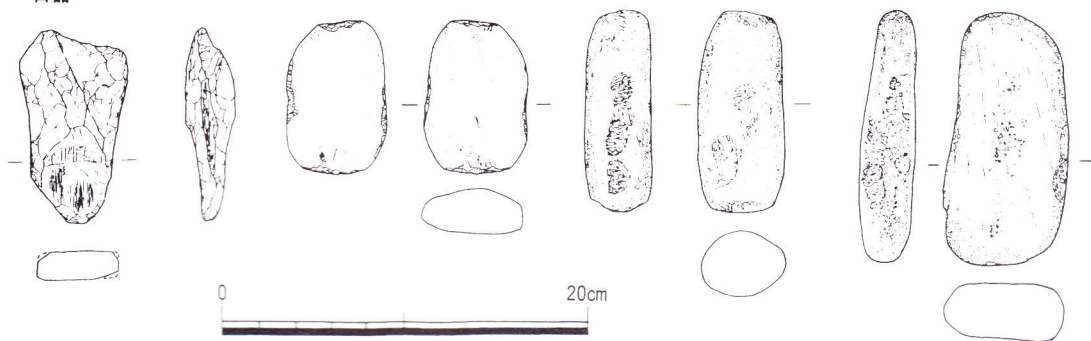
竖穴住居C-2出土遺物



竖穴住居C-1出土遺物



石器



遺物実測図

まとめ

府中IV遺跡周辺の弥生時代から古墳時代にかけての集落の展開は、まず弥生時代中期において当遺跡から南東約2 kmに位置する宇田森遺跡に集落が営まれている。昭和42年に行われた発掘調査では、弥生時代中期の中央に炉をもつ円形竪穴住居が検出されている。また、近接する北田井遺跡は、弥生時代中期の竪穴住居をはじめ、後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が確認され、長期間にわたる集落が形成されていたことが明らかとなっている。これらの遺跡は標高8 mから10 mの平野部でも微高地にあたり、農耕を基盤とする集落として良好な立地条件にあったといえる。弥生時代後期には遺跡の分布は大きく広がりをもつ。まず山間部では、北東約1 kmに位置する標高約100 mの独立丘陵と丘陵から派生するいくつかの尾根(標高約60~80 m)に所在する橘谷I遺跡・橘谷II遺跡がある。これらの遺跡は、過去の調査より後期の円形竪穴住居が検出されており、いわゆる高地性集落であるとみられている。また平野部では、弥生時代後期末から古墳時代を中心とする集落遺跡として、田屋遺跡・西田井遺跡が広域を誇り、大規模な集落であったことが確認されている。さらに、橘谷遺跡や南1 kmに位置する紀の川中州からは弥生時代後期の銅鐸が出土していることも注目できる。

今回の府中IV遺跡の調査において検出した遺構は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての竪穴住居が主体となっている(竪穴住居一覧表)。竪穴住居は、建て替えを含めると平面形が円形のもの7棟、方形を9棟検出している。これらの住居は不明瞭なものを含んでいるが、明確な住居は支柱穴や壁溝、炉などが検出され、全体が復原できる良好な住居も存在する。このことから、明確な竪穴住居について分類すると、まず弥生時代後期に円形プランの住居(竪穴住居A-1・A-4・B-4)が

住居No.	平面形	規模(m)	支柱穴の復原数	覆土(cm)	壁溝	炉	主な出土遺物	備考
竪穴住居A-1	円形	径7.4	5	22	○	○	壺・甕・高杯・叩き石	炉堤、排水溝をもつ。
竪穴住居A-2	方形	一辺2.4以上		10			サヌカイト剥片	
竪穴住居A-3	円形?	—		4				
竪穴住居A-4a	円形	径7.9	8	23	○	○	壺・甕・高杯	竪穴住居A4bの拡張住居。
竪穴住居A-4b	円形	径約7.5	6~7		○	○		竪穴住居A4cの拡張住居。
竪穴住居A-4c	円形	径約7.2	6~7		○	○		
竪穴住居A-5a	方形	一辺2.4以上	4	13	○		壺・甕・高杯・叩き石	竪穴住居A5bの拡張住居。
竪穴住居A-5b	方形	一辺3.2以上			○			
竪穴住居A-6	方形	一辺2.6以上			○			壁溝のみ残存。
竪穴住居B-1	方形	一辺2.6以上	4	14	○			
竪穴住居B-2	方形	一辺3.0以上	—	18	○			
竪穴住居B-3	方形	一辺3.0以上	—	16				
竪穴住居B-4	円形	径約9.8	11	30				
竪穴住居C-1	方形	一辺2.6以上	4	25	○		壺・高杯・叩き石	
竪穴住居C-2	方形	一辺3.0以上	4	20	○		壺・甕・高杯・手づくね土器・叩き石	
竪穴住居C-3	円形?	径約4.4			○		—	

竪穴住居一覧表

建てられたことが挙げられ、これらの住居の中でもA-4住居からは建て替えによる3時期の住居が認められる。今回検出した竪穴住居において、円形プランの住居が存在した時期に方形住居(竪穴住居A-5b・B-1・B-2・B-3・C-1・C-2)が共存したかについては、住居の重なりや出土遺物の検討より可能性が少ない。このことから、必然的に円形住居から方形住居という変遷が受けとれる。

次に、住居の内部構造については、検出した住居16棟のうち12棟に壁溝が検出されている。また主柱穴は、すべてのプランの住居に存在するが、主柱穴の多い円形住居は、方形住居に比べ主柱の数が増すことより上屋構造の違いが考えられる。方形住居は、すべての柱穴を検出することはできなかったが、残存する柱穴より4本柱であったことが考察できる。また円形住居は5本から11本と様々な様相をもつ。炉は円形住居のみに確認できたが、本来この時期の方形住居の煮沸形態も円形住居と同様とみられる。炉を明確に検出した竪穴住居A-1の炉はいわゆる炉堤をもつものであり、県下では紀北地域の弥生時代中期頃より後期にいたる住居にみられる設備である。また炉から屋外にのびる溝は山間部の住居にその特徴がみられるもので、壁溝からのびる場合もある。

次に、住居以外の重要な遺構については、A区で検出した幅3m前後の溝A-1やB区で検出した溝B-2がある。この2条の溝は、今回検出した遺構では古墳時代前期でも最も新しいもので、ともに傾斜面を東西に横切る溝であり、底部の傾斜は溝A-1より東から西に下る。このことから、これらの遺構はどのような施設に伴うものかは不明であるが、先述した住居埋没後に溝が掘削されていることが明らかである。

最後に、今回の調査で検出した集落の時期は、住居内より出土した遺物より弥生時代後期末から古墳時代前期という限られた時期であることが明らかである。この集落とほぼ同時期に存在した集落では、先に触れた西田井遺跡などが存在するが、標高25mを測る丘陵上に営まれた集落としては当遺跡だけである。この遺跡以前の弥生時代中期末から後期前半に存在した集落として知られている橋谷Ⅰ遺跡・橋谷Ⅱ遺跡は、いわゆる高地性集落として考えるならば、当遺跡と時期を異にする。このことから、高地性集落が、以後低地性へと移行する状況のなかで出現した特殊な集落の一つと考えられる。

(井馬好英)

参考文献

- 『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会(1968)
- 『和歌山県史』(考古資料)和歌山県史編さん委員会(1983)
- 『弥生土器Ⅰ』佐原真 ニューサイエンス社(1983)
- 『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ寺沢薫・森岡秀人 木耳社(1989)

しせきわ かやまじょう 13. 史跡和歌山城 第13次調査

調査地 和歌山市一番丁三番地

調査面積 100m²

位置と環境

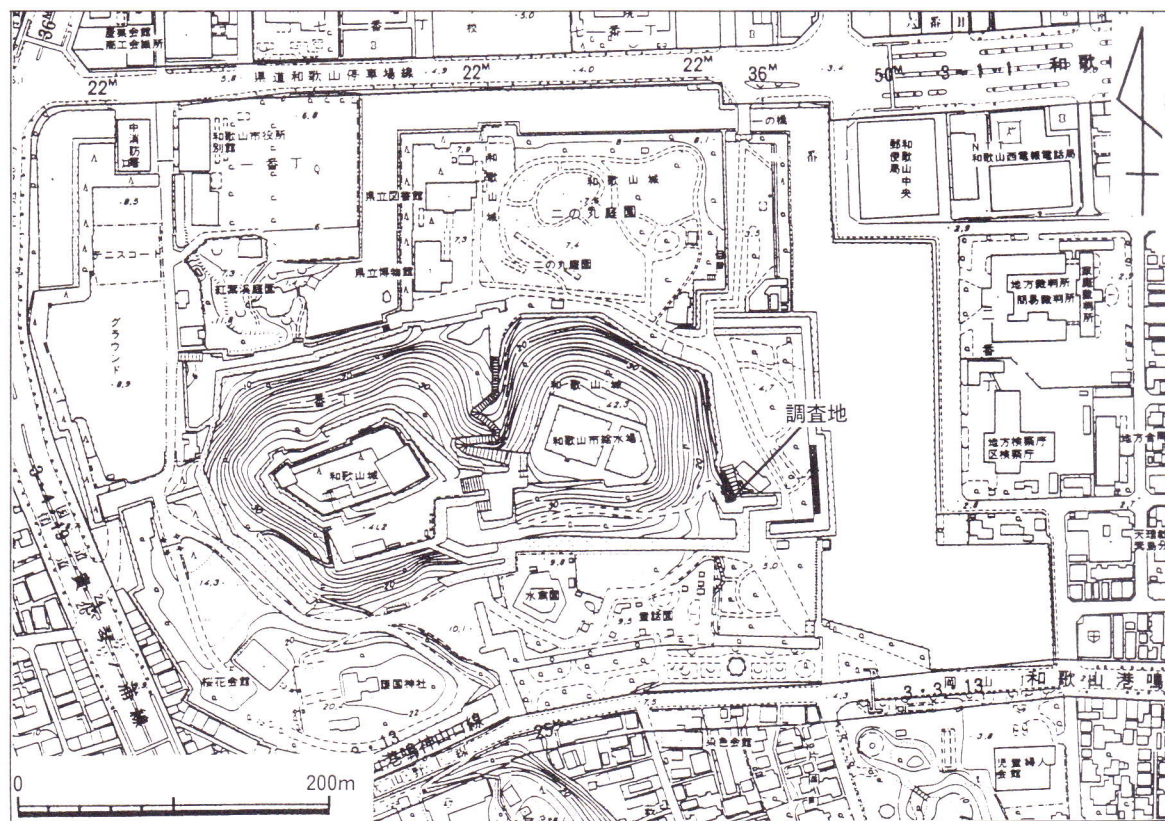
和歌山城は、比高40mを測る若山を基点として範囲をもち、1585(天正13)年の豊臣秀吉による紀州平定の際、築城されたものである。和歌山城の築城がほぼ完成するのは、関ヶ原合戦後、城代浅野幸長が入城してからのことである。

調査地は、天守閣に続く通路である表坂登り口西側の石垣である。石垣は緑色片岩の野面積みであり、1m内外の石材を横積みし、その間に20cm程の小割石をはめ込んで構築している。周辺の石垣と比較しても古い様相を示しており、若干修復されているものの石垣本来の姿を留めているとみられる。城内における位置から考えても、文禄年間(1592～1596年)に築いた可能性が高い。現在、表坂には石段が設けられている。

調査内容

調査は、石垣修理工事に先立って実施したものである。調査の方法としては、石垣上面では石垣の天端までの堆積層を平面的に掘削し、それ以下の層については幅1m内のトレンチをキの字形に設け、調査を進めた。石垣の基底部については、石垣に沿って幅1.5mの調査区を設定して調査を行った。

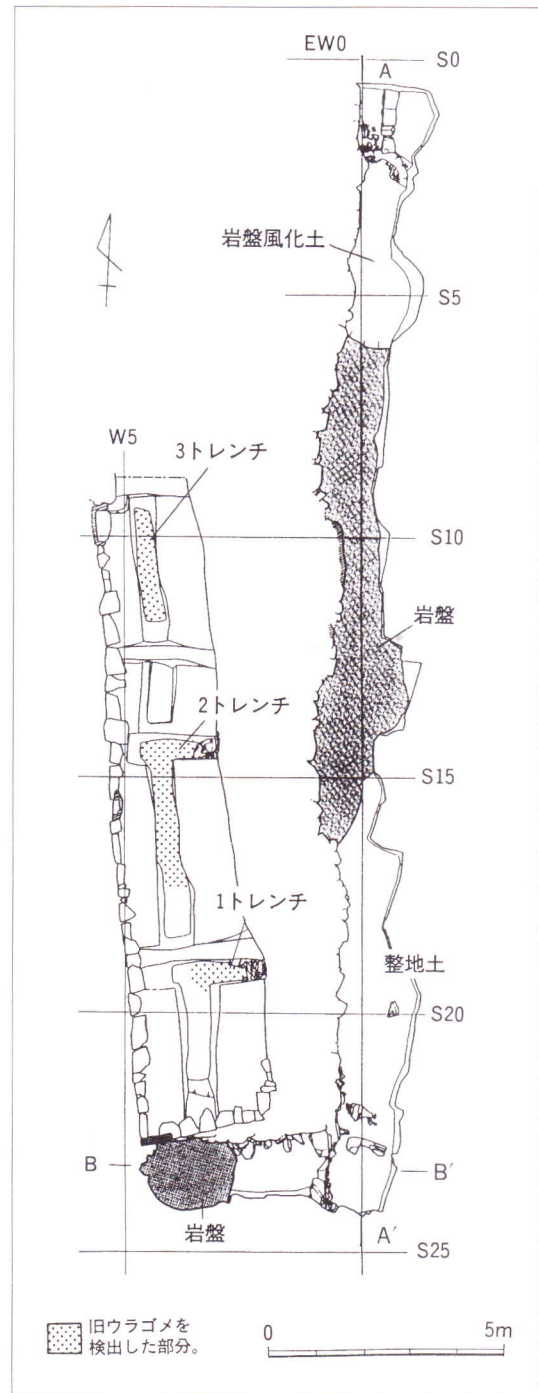
まず石垣の上面は、幅約2.5m、南北約13mの広さをもち、現況は植え込みであった。調査の結果石垣の天端から数段積み替えた痕跡がみられ、またその下層で石垣構築時のウラゴメを検出するこ



調査位置図

とができた。石垣の東側面を観察すると、天端から3、4段下は、扁平で比較的小振りな石材を使用しており、石垣全体からみて若干様相が異なる。それと対応してウラゴメの部分では、表土の直下に淡黄褐色弱粘質土系の土層が約40cmの厚みをもって堆積しており、その中には漆喰片や瓦片が乱雑に投棄された状況であった。遺物としては、棧瓦片や18世紀後半の染付等が含まれていた。調査開始当初は、天端から3、4段下の部分は雨落ちに相当するため様相が異なると考えていたが、江戸時代後期以降の幕末に近い時期に積み替えたものと考えられる。それより下の層では、明黄褐色系の山土によって何層にも整地した後、それを切り込み緑色片岩の小割石によってウラゴメをし、さらにその上面を整地するといった工程がみられた。これらの層は、遺物を含まず確実な年代はわからないが、使用している整地土が精緻であることや、石垣東面との対応を考えると、石垣構築当初のウラゴメとみられる。また石垣上面においては、土塀等の建造物の痕跡はみられなかった。

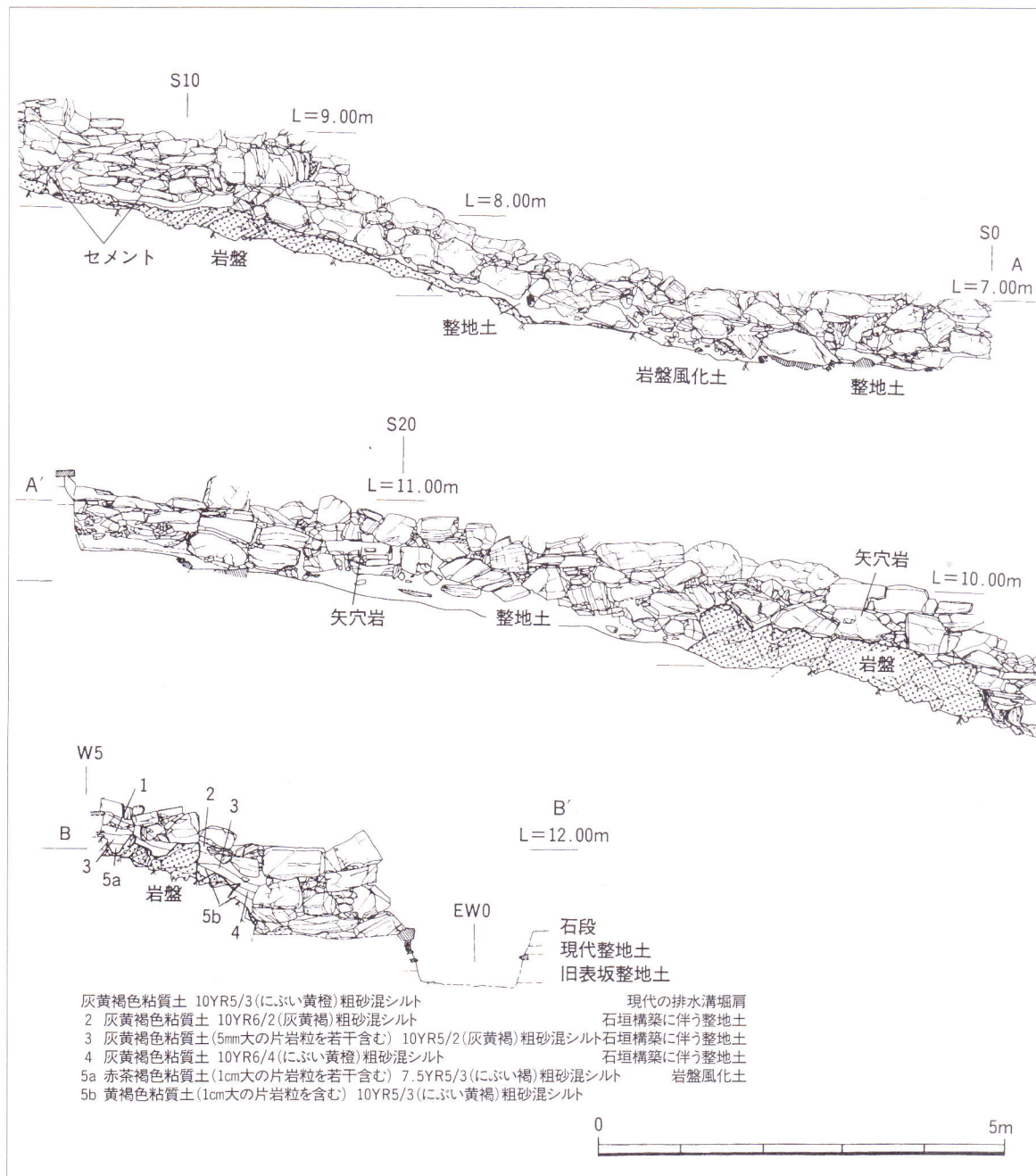
石垣裾部においては、調査区内の大半が表土直下に岩盤がみられ、石垣の基底石は岩盤の直上に設置されていた。また、調査区の南東隅のコーナー部分においてはL字状に岩盤はみられず、緑色片岩の小割石を含む黄褐色弱粘質土によって整地した後、基底石を設置している状況であった。おそらく岩盤を利用して構築する方法を基本とし、岩脈が途切れた部分については整地して高さを均一にし、基底石を据えたものとみられる。また裾部の調査区においては、石垣南東隅の角石に付設する石組および、旧表坂に伴う整地土を検出している。石組は石垣の東側面と平行に南へのび、石垣の基底石から2段目の石材の上端と同じ高さまで積み上げ、ほぼ水平に保っている。緑色片岩の割石を主体とする黄褐色土により石垣の基底石の上端と同じ高さまで整地し、その後緑色片岩の扁平な石材を2段に横積みしている。石組が機能していた当初は、上部2段のみが露出していたとみられる。石垣構築のための整地土と石組のため



遺構全体図



石垣上面調査区（南から）



石垣裾部実測図



石垣裾部調査前の状況 (北から)



石組 (東から)

の整地土が類似していることやその様相から、石垣と石組の間には、時期的な差はあまり感じられない。さらに、調査区の南壁土層堆積状況を観察すると、石垣南側の調査区西端で検出した岩盤から、この石組に向かって斜めに堆積する整地土層が認められる。その整地土は緑色片岩の小割石を含む黄褐色系の粘質土を用いており、6層に分層することができる。東壁においてもこれに続くと思われる整地土層が、南から北に向かって斜めに堆積している。以上のことを考えあわせると、石組は旧表坂の一部とみられる。つまり、現在の表坂と同様に石垣を取りまくかたちで通路が設けられ、通路が屈曲する所で段差をもつものと想定される。現在では階段になっているが、本来は単なる坂道であったとみられる。

出土した遺物についてみると、その大半が江戸時代中期以降の瓦類である。土器類としては伊万里焼染付（遺物実測図2）・備前焼すり鉢（遺物実測図1）・堺すり鉢・備前焼建水（遺物実測図3）・瓦質火鉢等が少量みられるのみであった。

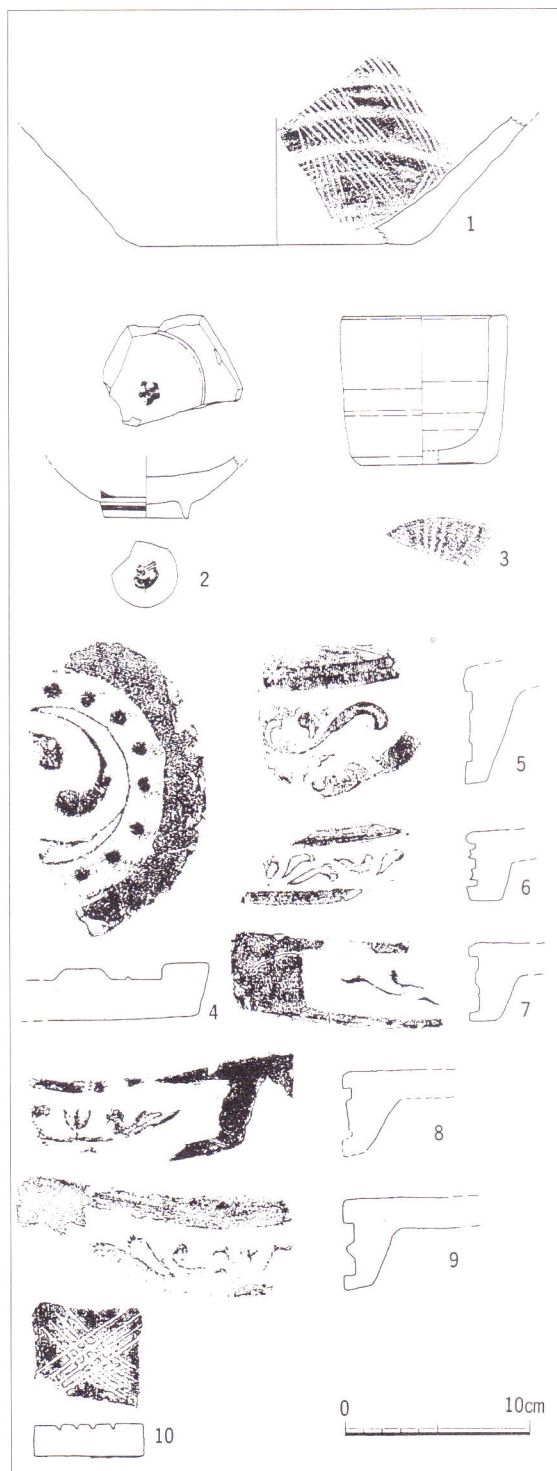
瓦には、巴文軒丸瓦・軒平瓦・滴水瓦がある。軒丸瓦は直径17～18cmのものと約15cmのものにわかれる。軒平瓦については全て唐草文である。また脇区が発達するものの、外区上厚の部分に面取がみられ、焼成もややあまく今回出土の瓦類の中では、若干古い様相を示すものもある（遺物実測図6～9）。さらに、菱形状の瓦製品が出土している。片面には4本単位の条線がみられ、道具瓦の一種とみられるが用途は不明である。

この他特筆すべき遺物としては、石垣上面の積み替えを行った部分から、寛永通宝が13枚ままとまって出土している。

まとめ

今回の調査においては、自然地形を利用した構築過程を窺うことができた。石垣上面においてはウラゴメ以外の遺構を確認することができなかったが、石垣裾部においては、旧表坂に関連する遺構を検出することできた。江戸時代末期にかかれた『和歌山御城内総御絵図』においても、表坂は階段ではなく坂道として表記されており、石垣だけでなく和歌山城を復原する資料を得たといえる。

（栗本美香）



遺物実測図

14. 狛口石岩陰遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市秋葉町地内

調査面積 27m²

位置と環境

狛口石岩陰遺跡は、和歌山市秋葉町に所在する縄文時代の周知の遺跡である。和歌山市の南部にあたるこの地域は、和歌浦湾に面してほぼ東西にはしる小山塊がみられ、この山塊の西側は雑賀崎に達し、海に突き出している。この山塊の一角で秋葉山の西側丘陵裾部に狛口石岩陰遺跡が所在する。この遺跡では、過去において貝層が確認され、縄文時代晩期の土器片や貝類(ハマグリ・ハイガイ・オキシジミ)が出土したことが知られている。このことから、遺跡はいわゆる縄文時代晩期の貝塚であるとみられている。

この調査は、遺跡に極めて近接する場所において公共下水道管の埋設工事が実施されることになり、このため事前の調査として遺跡の実態を解明するために実施したものである。現地調査は、平成7年3月6日から23日までの約3週間の期間において実施し、記録保存を行った。

調査内容

調査の方法は、まず調査地が国道42号線の歩道にあたり、アスファルト舗装がなされていたためコンクリートカッターを用いた。次に、重機(アイオン)によりアスファルト等の掘削を行い、重機



調査位置図

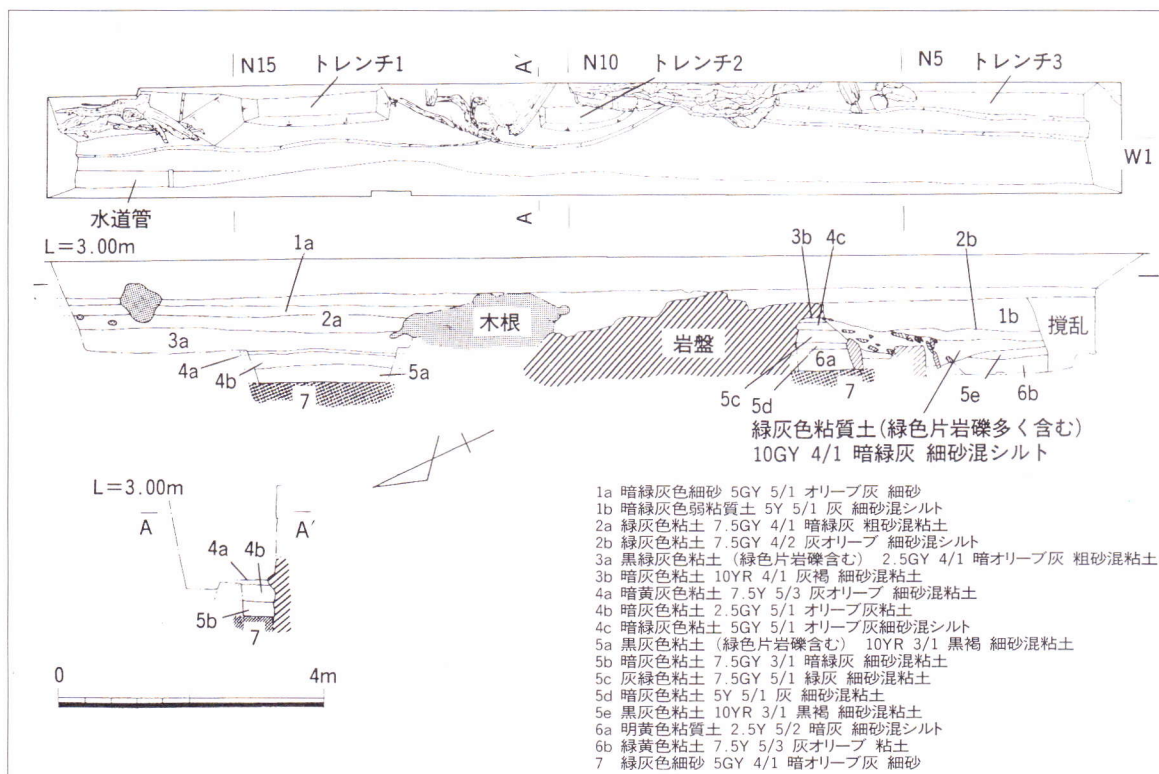
(ユンボ)により遺構面まで掘削し、ダンプを用いて排土処理を行った。その後、遺物包含層等の調査を人力掘削によって実施した。

今回の調査地は、機械掘削時から調査区中央より西側の堆積が碎石を含む状況が得られ、すでに攪乱されているものとみられた。この攪乱は、下層の調査より既存する水道管埋設によるものであることが確認できた。このことから、今回の調査では、調査区ほぼ中央より東側でのみ良好な堆積層が残存していると考えられ、中央より東側を中心に調査を行った。しかし、調査区東側においても、すでに雨水排水等のためのコンクリート製による暗渠排水溝(カルバート)が設置されており、表面から約60cmの間はすでに攪乱されている状況であった。このカルバート下の堆積は、比較的良好であり、層位的に調査を行うことが容易であったが、過去に松林が存在していたことから、この根が残存していたため、連続する堆積状況が一部得られなかった。

人力掘削による調査は、掘削が可能であった3ヶ所において幅約30cmのトレンチを東壁際に設け、それぞれ無遺物層であるベース層まで掘り下げた。この東壁面の土層堆積状況から表面である路面の標高が約3.3mを測り、深さ50cmのカルバートが設置されていることがわかる。このカルバート下にはカルバート設置時に入れられたグリ石が堆積し、その下層から若干の遺物を含む土層が確認できた。しかし、厚さ60cmを測るグリ石直下の1～3層には、近世の遺物が含まれており、これらの堆積は少なくとも近世以降のものであることが明らかである。また、北トレンチの状況よりその下



狛口石近景（北西から）



遺構平面図及び断面図

層に堆積する4a・4b及び5a層は、比較的古い堆積とみられ、特に最下層の5a層から古墳時代のものとみられる遺物が出土している。

次に、調査区ほぼ中央で検出した緑色片岩の岩盤は、狛口石から張り出した末端の部分であり、調査区内で幅4mを測る。この岩盤の南側は、本来狛口石の岩陰部分とみられ、豊富に遺物等が出土するとみられた地点であったが、攪乱のため調査範囲がわずかであったことから良好な遺物は検出できなかった。

まず南トレンチでは、張り出した岩盤下に良好な水平堆積がみられ、これらの堆積層のなかでも5c・5d層に比較的古い遺物が含まれていた。特に、5d層からは小片であるが今回の調査では最も古いとみられる遺物(縄文土器?)が出土している。この層の直下には厚さ30cmを測る明黄色粘質土が堆積しているが、いわゆる無遺物層であり、ベース層の変化したものと考えられる。また、この層の下層は、ベース層(緑灰色細砂)であるいわゆる海砂であり、標高約1.5m前後を測る。



調査地全景(南から)



トレンチ3周辺東壁(西から)

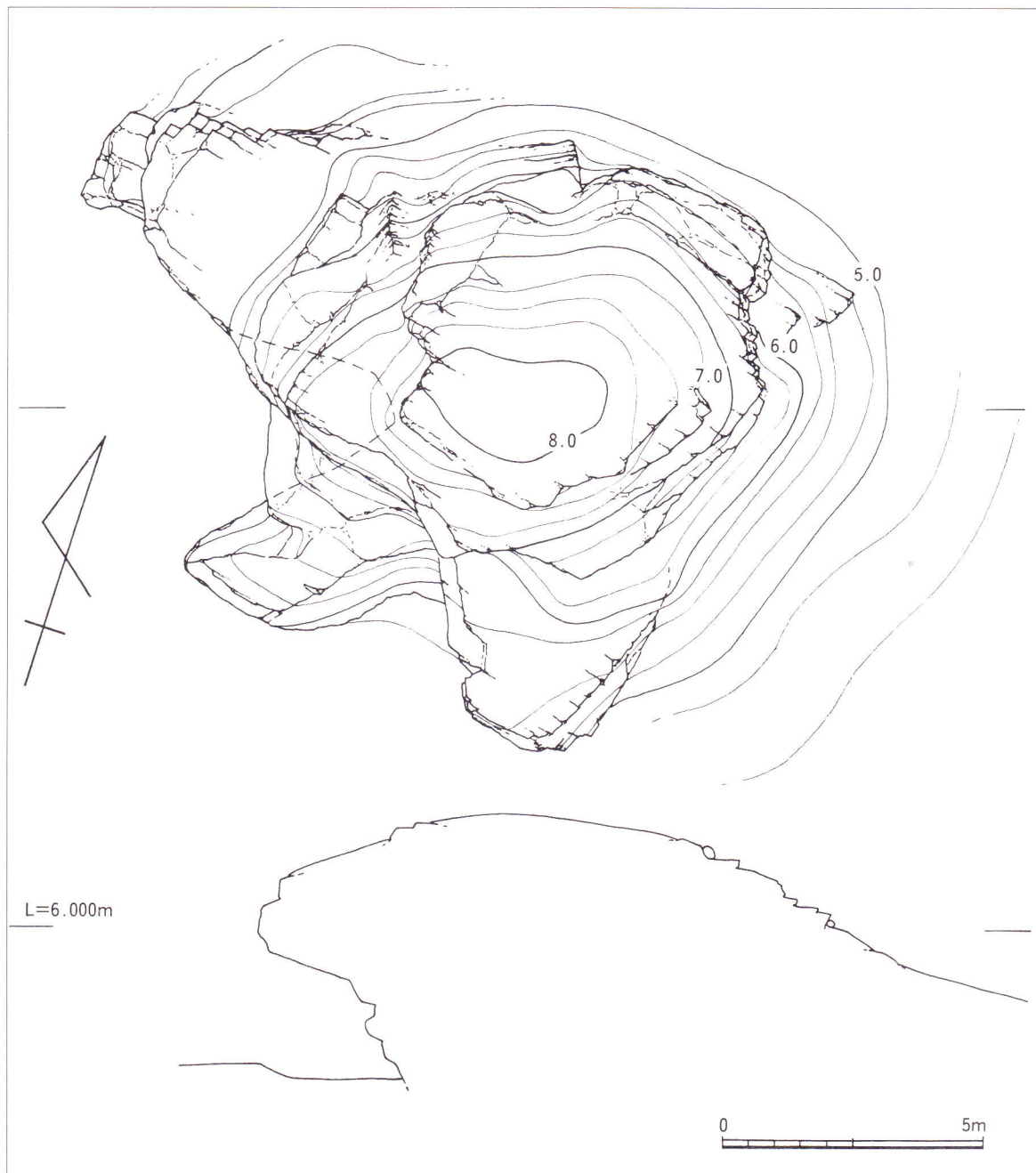
今回の調査で検出した遺構は、攪乱が著しく明確なものは検出できなかった。しかし、北トレンチで確認した4b層(暗灰色粘土)や南トレンチ南端で確認した5e層(黒灰色粘土)は、遺物は希薄であるがその状況から遺構の可能性がうかがえるものである。

今回の調査で出土した遺物は、全体的に希薄であったが江戸時代の遺物を中心に検出することができた。江戸時代の遺物は、唐津焼などの肥前系陶磁器や瓦質の羽釜などがある。また、古い時期のものでは、土師質のものが数点出土しており、器種等は不明であるが、焼成や胎土から古墳時代のものとそれ以前のものとみられる。

3. まとめ

狛口石は、秋葉山の西側に突き出した単独の丘陵で、東西20m、南北15mを測る方形の山塊であり、緑色片岩が露呈している。山頂部は、標高8m、周辺との比高差約5mを測る。また、狛口石内部の西面には和歌山藩の儒者として著名な李梅溪の筆によって「狛口石」と顕彰の文字が刻まれている。

今回の調査地は、狛口石に極めて近接する地点であったが、狛口石の中心とみられる岩陰は南西方向に開口しており、やや中心部から外れているものと考えられた。しかし、上部から張り出す岩盤は、調査区のほぼ中央を横切り、この岩盤付近の堆積層は良好な様相を示すものとみられた。



狢口石測量図

発掘調査は、水道管理設等における攪乱が著しく調査幅が限定される状況下であり、平面的に遺構等をとらえることができなかった。しかし、東壁際の下層は攪乱されず、近世以前の堆積層が明瞭に得られた。この堆積状況と層位的にとらえた出土遺物から少なくとも3時期の堆積が明らかである。これらの時期は、大きく分けて古墳時代及びそれ以前のものの中世、近世である。また、狢口石の主体部に近い南側では、岩盤に接する堆積層を確認したが、過去にみられたとされる貝層は検出できず、遺物も希薄であった。このことから、良好な貝層の分布は、より狢口石に近い岩陰内に収まるものと考えられ、今回の調査では検出できなかったものといえる。また、比較的豊富であった近世の遺物からは、この狢口石が江戸時代において名所であったことをうかがわせるものである。

(井馬好英)

参考文献

『和歌山市文化財総合調査報告(1)』 和歌山市教育委員会 (1978)

15. ^{ありもとじょう}有本城 発掘調査

調査地 和歌山市有本55他

調査面積 20m²

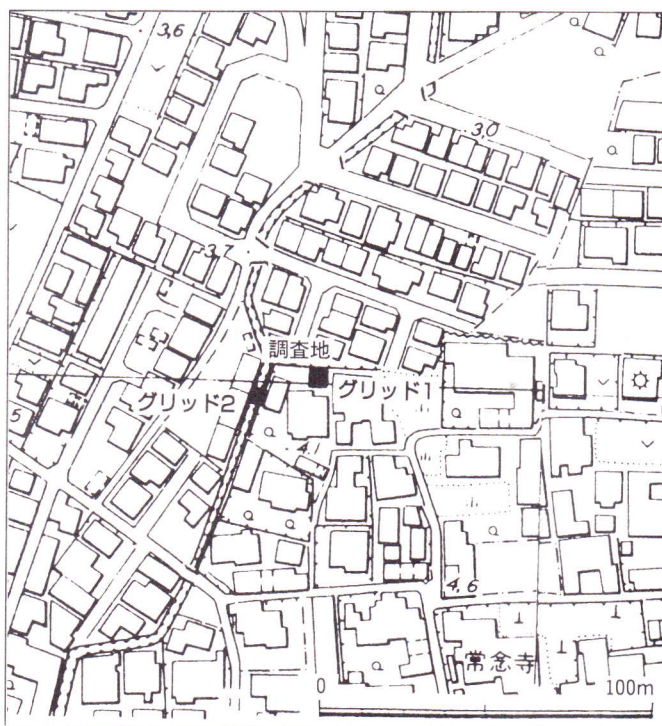
位置と環境

有本城跡は、紀ノ川南岸の和歌山市有本付近に、中世末期から近世にかけて存在したと伝承されている城郭跡である。

しかしながら有本城の存在に関しては伝承のみで、文献・文書類をはじめ、『和歌山県史』や『和歌山市史』などにもその存在を学問的に裏付けるような記載はなく、わずかに有本の集落内に「シロノマエ」「シロノウラ」「シロノカワ（城の川）」など「シロ（城）」の名を付した地名が伝承されているにすぎない。

そこでこのたび、和歌山市によって計画された、有本の集落内を貫流する有本川（城の川）の河川改修工事に先立って、「シロノマエ」「シロノウラ」「シロノカワ」と呼称されている地域で、少なくとも

近代以前のものと考えられる石垣の見られる部分を中心に発掘による確認調査をおこない、有本城存在の有無を確認することになった。今回の調査は、上記石垣に近接して2ヵ所のグリッドを設け、調査を進行した。



調査位置図

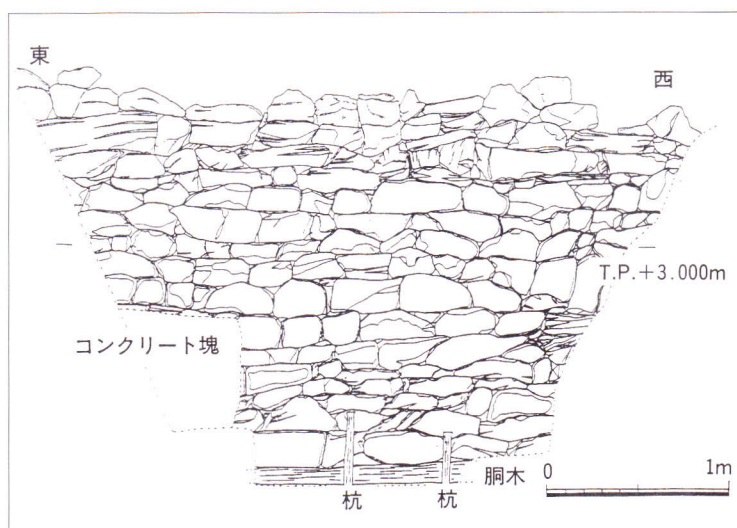
調査内容

(1) グリッド1

このグリッドで検出した遺構には、石垣1がある。この石垣は、北面して構築されており、その東西長は3.6m以上、また残存高は2.2mを測る。

この石垣の構築時期は、以下のごとく大きく3時期に分けることができる。

[第1期] 構築の最初の段階である。まず直径約15cmの胴木

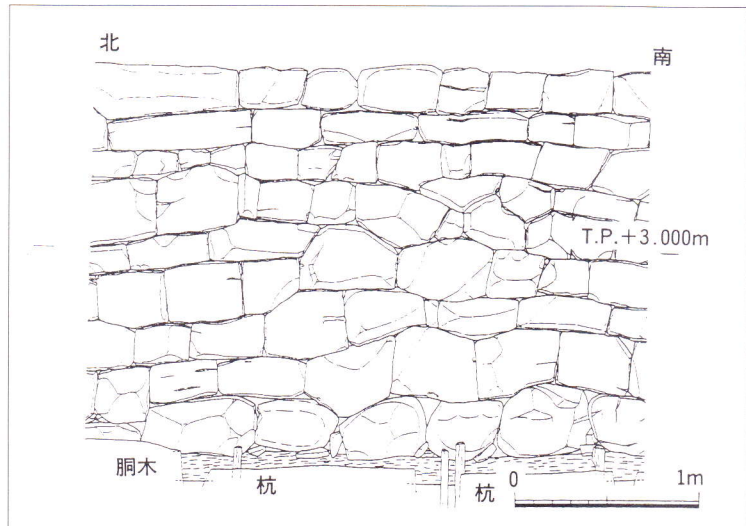


石垣1 立面図

を据え、この胴木を固定するために杭を打ち込む。その後この胴木の上に方形を呈した砂岩および緑色片岩を6段積み上げる。

〔第2期〕 比較的球形を呈した砂岩、緑色片岩、花崗岩を6段積み上げる。上位2段は石垣の後方すなわち南側にやや傾斜している。

〔第3期〕 比較的板状を呈した砂岩および緑色片岩を4段積み上げる。全体に大きく石垣の後方すなわち南側に傾斜している。



石垣2 立面図

以上3期のうち、第1期の最初の段階で据えられた胴木の埋土中からは、18世紀代の内におさまる時期の遺物が出土している。また、第2期および第3期に該当する石垣の埋土中からは、近代以降の遺物（煉瓦や瓶の王冠等）が出土している。

(2) グリッド2

このグリッドで検出した遺構には、石垣2がある。この石垣2は約50cm×30cmの砂岩を8段ないし9段積み上げて構築されており、その高さは2.0mを測る。

最下段には一部緑色片岩を使っており、その下部に直径16cmの胴木が設置されている。最下段の石材と胴木との間には砂岩および緑色片岩片が詰められている。

まとめ

今回検出した石垣の様相は、各グリッド間で大きく異なる。その主な相違点を以下に述べる。

まず、石垣1に用いられている石材には、砂岩・緑色片岩・花崗岩があるが、石垣2では砂岩と緑色片岩のみが用いられている。また石垣1では、構築過程を3時期に分けることができたが、石垣2は、一時期に積み上げられたと考えられる。次に石垣に用いられた石材の加工に関して、石垣1では、砂岩・緑色片岩・花崗岩の自然石および自然石の割石をそのまま積み上げているが、石垣2では、基底部に若干砂岩および緑色片岩の自然石を用いるものの、他は全て砂岩の切石を用いている。このことは、石垣2の基底部以上が、人目に触れる事を意識して構築された事も考えられる。

これら石垣の存続期間に関しては、石垣1が18世紀代にまで遡る可能性があり、石垣2についても江戸時代には存在していた可能性がある。そうすると両者間に非常に大きな時期差（例えば中世と近世というような時期差）は存在しえないことも予想でき、先述の相違点は、この石垣群の地点差と考える事ができる。

(木建正宏)

16. のなうら 野奈浦遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市加太友ヶ島（沖ノ島）

調査面積 1 m²

位置と環境

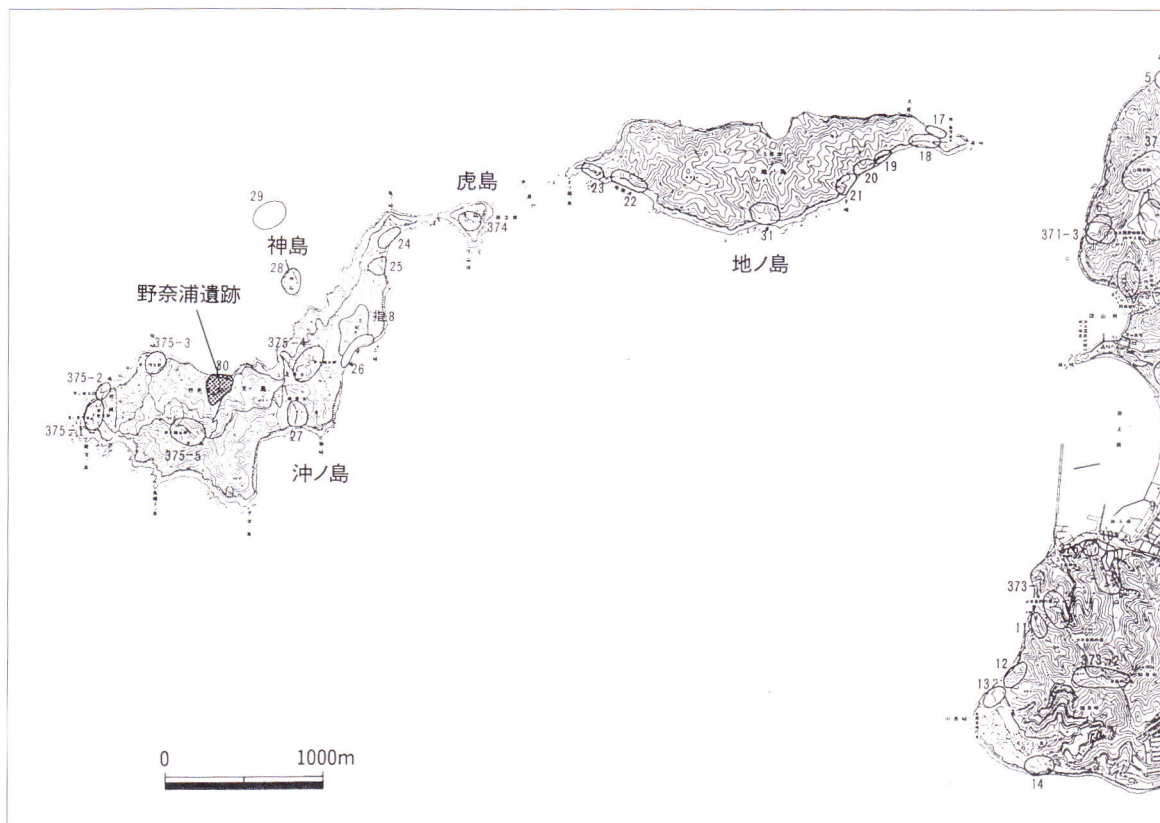
和歌山市加太の西沖に浮かぶ友ヶ島は、地ノ島・神島・虎島・沖ノ島の4島を総称したもので、いずれの島からも縄文時代から奈良時代にいたる各時代の土器や石器等が確認されている。特に海岸線には古墳時代・奈良時代に塩作りを行なった痕跡を残す遺跡が多く分布し、加太地域における塩生産の拠点的形成していたことがうかがえる。

調査内容

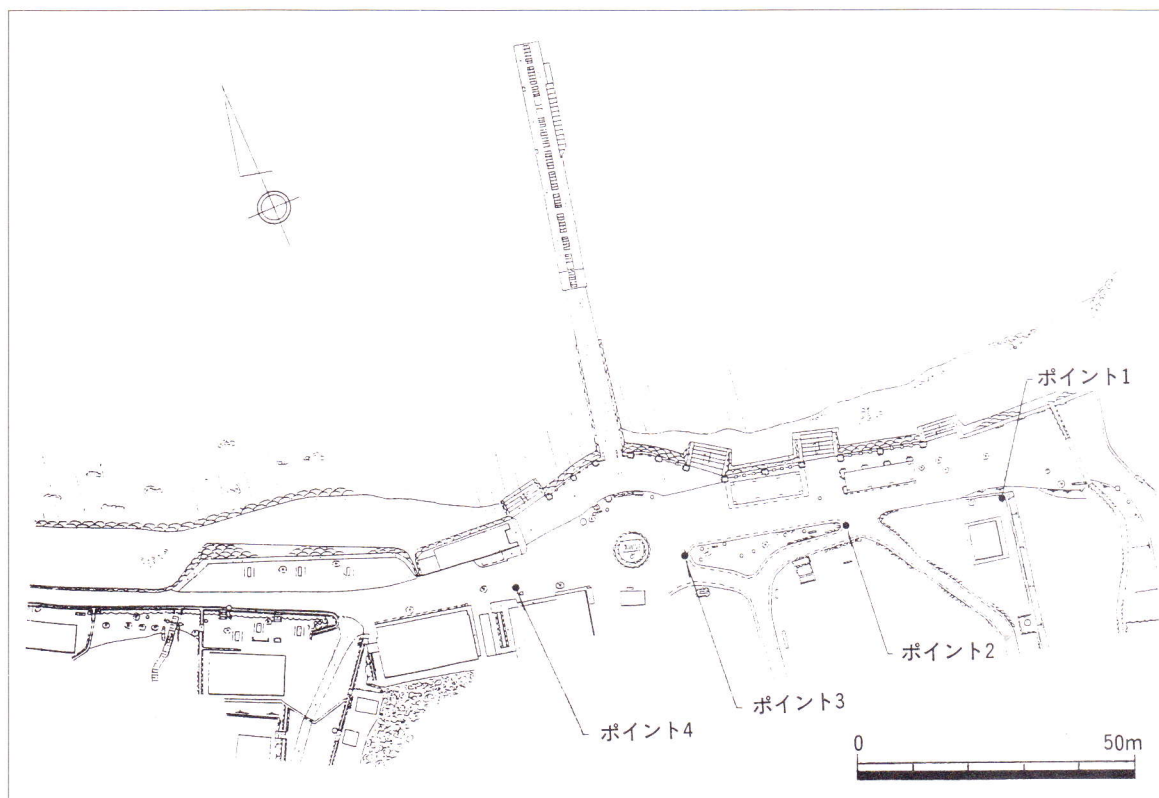
今回の発掘調査は、沖ノ島内に送電するための電柱設置工事に伴うもので、島内に計画された38ヶ所のうち周知の遺跡である野奈浦遺跡内に予定されたの4ヶ所について調査を行なった。いずれも50cm四方の限られた範囲であり、海岸線から約20m入った海拔3.5mを測る地点での掘り下げであった。便宜上東側からポイント1・2・3・4として区別したが、ポイント3・4から土器を含んだ黒色系粘質砂が確認された。個々の状況は以下のとおりである。

〔ポイント3〕10cm程の道路敷のバラス層の下に10～30cm大の丸石が多く混じる黒茶色粘質砂層が70cm以上堆積しているのが確認され、多量の製塩土器片等が含まれていた。

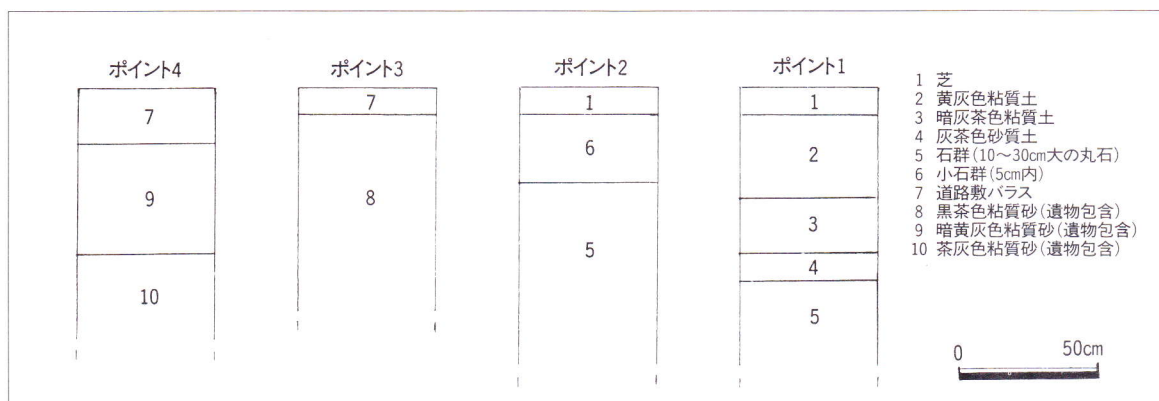
製塩土器の殆どは器壁が2～3mmの薄い2次焼成を受けた胴部で、図化できないほどの小片であった。その他に壺か甕の胴部と思われる須恵器片や貝殻片がわずかに出土した。



調査位置図



調査地周辺測量図



土層柱状模式図

[ポイント4] 約20cmの道路敷直下に約40cmの厚さで暗黄灰色粘質砂、その下に茶灰色粘質砂が30cm以上堆積し、どちらも製塩土器等の遺物が含まれていたが、下層ほど包含密度が高かった。出土遺物はポイント3と同様に器壁の薄い2次焼成を受けた多量の製塩土器と少量の須恵器片・貝殻片が出土した。

まとめ

本遺跡は従来弥生時代の遺物散布地として認識されていたが、今回6世紀代の遺物包含層が発見されたことは遺跡の実態を考える上で重要な成果であった。

製塩土器が出土したポイント3・4の周辺は、海浜部から一段高くなって谷奥部に向ってなだらかに勾配しており、周辺の地形からも塩生産が行われていた可能性が高い地点である。今回の限られた範囲での調査では製塩炉の痕跡は確認できなかったが、包含層の内容は炉に伴う灰原と考えられ、製塩炉の存在を裏付けるに十分な資料といえる。

(益田雅司)

III. 普及啓発活動

1. 書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第10集 『平尾遺跡 発掘調査概報』

―市道矢田平尾線建設に伴う調査報告―（平成6年11月）

第11集 『鳴神IV遺跡 第4次発掘調査概報』

―地方改善施設整備事業鳴神地区道路改良工事に伴う調査報告―（平成7年3月）

第12集 『鳴神IV遺跡 第6次発掘調査概報』

―地方改善施設整備事業道路改良工事に伴う調査報告―（平成7年3月）

2. 和歌山市文化財ニュース発行

文化財に対しての理解を深めてもらうために、市内の小中学校と一般の方々を対象に『和歌山市文化財ニュース』を発行した。

『和歌山市文化財ニュース』No.13（1994年4月）「鳴神V遺跡の発掘 その1」

『和歌山市文化財ニュース』No.14（1994年8月）「文化財の調査と研究」

『和歌山市文化財ニュース』No.15（1994年11月）「新たに横穴式石室を発見」



西田井遺跡 調査風景



平尾遺跡 調査風景

平成9年3月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 4

—平成6年(1994)年度—

編集・発行 財和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 西岡総合印刷株式会社

© 財和歌山市文化体育振興事業団 1997



府中Ⅳ遺跡 竪穴住居